

人間科学

第40巻 第1号

2022年 9月

研究論文

関本如髪集成来翰集（第四巻 巨石宛）

..... 二村 博 64（一）

感情無視の適応的側面に関する探索的検討

..... 樫村 正美 1

人間科学の歴史序説（1）

— 人文学・人間の科学・人間学（人類学）・人間科学：人間に関する学問の変容 —

..... 長谷川幸一 11

研究ノート

「フェイクニュース」とメディア・リテラシー教育に関する研究の概観

..... 石川 勝博 31

常磐大学人間科学部紀要『人間科学』編集規程

(目的)

第1条 この規程は、人間科学部紀要編集委員会（以下「委員会」という。）が行う編集作業に関して必要な事項を定めることを目的とする。

(根拠)

第2条 この規程は、人間科学部紀要編集委員会規程（1983年6月15日）第4条に基づく。

(公表)

第3条 常磐大学人間科学部（以下「本学部」という。）の研究発表誌『人間科学』（HUMAN SCIENCES）（以下「研究紀要」という。）は、毎年度に1巻とし、2号に分けて編集し、冊子体を発行するほか、その電子版を常磐大学のホームページに公表する。

(寄稿資格)

第4条 研究紀要へ寄稿する資格を有する者は、本学部の専任教員および委員会が認めた者とする。

(審査)

第5条 委員会は、次のことを寄稿者に確認しなくてはならない。

- 1 提出された論文等が学術論文等として相応しい内容と形式を備えたものであり、かつ未発表のものであること。
- 2 図版、写真等に著作権等の支障がないこと。

(論稿の種類)

第6条 研究紀要に掲載される論稿は、次の各号のいずれかに当てはまるものでなければならない。

- 1 論文 論文とは、学術論文に相応しい内容と形式を備えた理論的または実証的な未発表の研究成果をいう。
- 2 研究ノート 研究ノートとは、研究途上であり、研究の原案や方向性を示した未発表の研究成果をいう。
- 3 書評 書評とは、新たに発表された内外の著書または論文の紹介であって未発表のものをいう。
- 4 学界展望 学界展望とは、諸学界における研究動向の総合的概観であって未発表のものをいう。
- 5 その他 その他の論稿であって委員会が寄稿を認めたものをいう。

(編集)

第7条 研究紀要の編集は、前条までに規定された事項を除くほか、次の各号に従って行われなければならない。

- 1 必要に応じて、片方の号はテーマを決めて特集号とする。
- 2 論文の体裁（紙質、見出し、活字など）は、可能な限り統一する。
- 3 紀要のサイズはB5とし、論文、研究ノート、書評および学界展望は二段組、その他は一段組で、原則として横組で明朝体とする。

附 則

- 1 この規程の改正には、委員会の3分の2以上の委員の同意を必要とする。
- 2 この規定の改正条項は、2020年4月22日から施行する。

常磐大学人間科学部紀要『人間科学』寄稿規程

(目的)

第1条 この規程は、冊子体および電子媒体で公表される常磐大学人間科学部の研究発表誌『人間科学』（HUMAN SCIENCES）（以下「研究紀要」という。）に寄稿を希望する執筆者について必要な事項を定めることを目的とする。

(根拠)

第2条 この規程は、人間科学部紀要編集委員会規程（1983年6月15日）第4条に基づく。

(寄稿資格)

第3条 研究紀要へ寄稿する資格を有する者は、常磐大学人間科学部紀要『人間科学』編集規程（1983年6月15日。以下「編集規程」という。）第4条に定める者とする。

(寄稿希望者の義務)

第4条 研究紀要への寄稿希望者は、寄稿に関してはこの規程を遵守するほか、この規程の解釈については人間科学部紀要編集委員会（以下「委員会」という。）の決定に従わなければならない。

(原稿提出要領)

第5条 寄稿希望者は、委員会が定める原稿募集要領に従って寄稿希望書ならびに原稿を委員会に提出しなければならない。

- ② 委員会に提出する原稿は、編集規程第6条に定める論稿の種類に当てはまるものでなければならない。
- ③ 委員会に提出できる原稿は、原則として一号につき一人一編とする。
- ④ 原則として、原稿は電子媒体とそれを印刷した紙媒体とを合わせて提出する。本文は横書きの場合、1ページあたり30行・1行あたり40字に字組みする。本文・図・表・写真などのデータは、それぞれ標準的な形式のファイルとして収録する。なお本文中に、図・表・写真などの挿入箇所を指定する。
- ⑤ 原稿の長さは、図表等を含め、論文は2万4,000字以内（A4用紙20枚）、研究ノートは1万2,000字以内（A4用紙10枚）、書評は4,000字以内、学界展望は8,000字以内を基準とする。課題研究助成報告は、研究計画年次終了分に関しては、論文又は研究ノートとして寄稿する。そのほかのものについては、委員会が決定する。
- ⑥ 提出原稿は、執筆者がコピーをとり、オリジナルを委員会に提出し、コピーは執筆者が保管する。

(原稿執筆要領)

第6条 寄稿希望者は、原稿執筆に当たっては、次の各号に従わなければならない。

- 1 原稿の1枚目には、原稿の種類、題目、著者名および欧文の題目、ローマ字表記の著者名を書くこと。
- 2 論文には、200語程度の欧文アブストラクトを付すこと。
- 3 書評には、著者名、書名のほか出版社名、発行年、頁数を記載すること。
- 4 日本語以外で執筆された部分については、執筆者の責任においてネイティブチェックを行う。
- 5 数字は、原則として算用数字を使用する。
- 6 人名、数字、用語、注および（参考）文献の表記等は、執筆者の所属する学会などの慣行に従う。
- 7 図表の番号は、図1.、表1.、とする。そのタイトルは、図の場合は図の下に、表の場合は表の上に記載すること。
- 8 図表の補足説明、出典などは、それらの下に書くこと。

(掲載内容の選考)

第7条 委員会は、研究紀要の学問的水準を維持するために、寄稿論文等を検討し、必要な場合には、修正を求めることができる。

(著者校正)

第8条 初校の校正は、執筆者が行う。

(発行報告)

第9条 執筆者は、本人が寄稿した研究紀要の発行報告に代えて、論稿が掲載された当該研究紀要2冊と抜刷50部を学事センターにおいて受け取ることができる。

- ② 執筆者が前項に規定する数量を超える複製を希望する時は、本人がその実費を負担しなければならない。

附 則

- 1 この規程の改正は、委員会の3分の2以上の委員の同意を必要とする。
- 2 この改正規程は、2008年10月22日より施行する。
- 3 この規程の改正条項は、2013年12月18日から施行し、2013年9月5日に遡及して適用する。
- 4 この規程の改正条項は、2020年4月22日から施行する。

感情無視の適応的側面に関する探索的検討^(1,2)

樫村 正美 (常磐大学人間科学部)

Exploratory research for the adaptive dimension of 'emotional neglect'.

Masami KASHIMURA (*Faculty of Human Sciences, Tokiwa University*)

Abstract

The purpose of this study is to investigate adaptive and maladaptive dimensions of the emotional neglect. A questionnaire concerning the tendency to emotional neglect, freedom description of gain and cost about emotional neglect, and depression was administered to 305 undergraduate students. Firstly, the results of classification by KJ method indicate that the gain and cost about emotional neglect has multimodal dimension, and emotional neglect has advantages and disadvantages. Secondly, all participants were assigned to five groups by sorting the presence or absence of understanding gain and cost about emotional neglect. The results of ANOVA indicate that understanding gain and cost group has significant lower depression than lacking an understanding of two sides group. Thus, the understanding gain and cost about emotional neglect contributes to lowering psychological distress, and this result suggests the necessity of psychoeducational intervention to emotional neglect.

問題

不快で苦痛な感情⁽³⁾ (以下、不快感情) を体験した際、そうした感情に対して向き合うか、回避するかは個人の性格特徴や状況によって大きく左右される。感情に向き合うことの重要性が指摘されているが(宮下, 1998; 中田, 2006), その一方でそうした不快感情に向き合うことは一時的にでも個人に苦痛をもたらす、個人によっては非常に脅威となる体験にもなりうる。この場合には、感情から一度距離を置くことも重要な対処となる。感情に向き合わず、回避することが必ずしも個人に何らかの不利益を生じさせるとは言い切れない。

先行研究において、不快感情を喚起させるような問題となる状況に対して回避的になることが、ストレ

ス反応としての不快感情を強め、具体的な問題解決を先送りにするなどの結果をもたらすことが報告されている (e.g. Holahan & Moos, 1985; Osowiecki & Compas, 1999)。一方、回避が個人に有益な結果をもたらしうることも報告されている。例えば、不快な気分を経験している際に他の活動に従事することによってその気分を紛らわそうとする気晴らし (distraction) という方略は、問題から注意をそらすことを可能とし (Stone & Neale, 1984), 問題に関わる思考を回避することによって不快感情を早期に軽減させる (坂本, 1998)。問題から一度離れることにより、結果的には問題となる状況にも効果的に対処することが可能となる (Nolen-Hoeksema & Morrow, 1991)。このことから、回避的な行動選択が必ずしも否定的な結果をも

たらずとは限らないと考えられる。

自身の感情に向き合わず、回避する行動の一つとして、自身に生じた感情を感じないように、それにまつわる事柄を考えないように無視すること（以下、感情無視 emotional neglect）が挙げられる。感情無視によって、自身の不快感情を感じ続けることなく、感情はなかったものとして個人内で処理される。例えば、比較的持続するようなストレスイベントがある場合、あるいはすぐには解決できそうにない問題を抱えている場合において、その都度喚起される感情に目を向けてばかりいては心身ともに疲弊することとなり、日常生活にも支障をきたしかねない。自身の感情を無視することとは、個人内の状態を落ち着かせることで、一時的にも平穏な日常を取り戻そうとする行為であるともいえそうである。

しかしながら、感情無視はあくまで問題の回避であって根本的な解決とはならない。感情無視と同様に回避的な傾向と考えられる思考の抑制に関する先行研究においては、自身の思考を抑制することで感情状態が悪化したり（櫻村・小川, 2006; Wegner, 1994b）、反すう傾向を強めたりするなど（Gross & John, 2003; Wegner, 1997）、個人を悩ます結果をもたらすことが報告されている。自身の感情を無視することによっても、思考の抑制と同様の結果が生じるであろうことが予想される。一時的に難を凌ぐことに有効かもしれない感情無視だが、長期的には否定的な結果をもたらすのであれば、なぜ人は自身の感情を無視することを継続しようとするのかという、感情無視が行われる背景に注目する必要がある。ある行動が消去されずに維持される背景には、その行動を強化させるような個人にとっての利益があると考えられる。ある行動生起を規定する要因として利益とコストに着目する捉え方があるが（永井・新井, 2007）、利益の予期があればある行動は生起され、コスト予期が大きければその行動は抑制される。この考え方に基づけば、感情無視においても個人にとっての利益とコストが認識されており、その利益とコストを天秤にかけることでその時々での行動の生起や抑制が調節されていると予想される。感情無視の利益やコストの構造について明らかにすることによって、感情無視という行動が選択されたり抑制さ

れたりする背景をより理解することができると考えられる。さらには、感情無視の利益とコストの認識のバランスが個人の精神的な健康度とどのように関連しているのかを明らかにすることで、感情無視のより適応的な側面⁽⁴⁾を浮き彫りにすることができるかもしれない。

以上のことから、本研究では感情無視を「自身に生じた感情を感じないように、それにまつわる事柄を考えないように無視すること」と操作的に定義づけ、感情無視の適応的・不適応的な側面を利益（感情無視がもたらす肯定的な結果）とコスト（感情無視がもたらす否定的な結果）の観点から、それぞれがどのような構造であるかを探索的に検討する。また、感情無視に関する利益とコストの認識のされ方は個人によっても大きく異なると予想され、その利益あるいはコストだけを認識する者、両方を認識する者、いずれも認識しない者とが存在すると考えられる。例えば、感情無視の利益・コストともに認識する者はその両面を認識しない者、あるいはどちらかに偏った認識をする者と比べて、状況に応じて上手に感情無視を用いることができるかもしれない。したがって、感情無視の利益・コストの認識のされ方が精神的な健康を反映する抑うつ傾向に差異をもたらすかどうかについても検討を行う。

方法

研究協力者

関東圏内の大学生 305 名（男性 169 名、女性 136 名、平均年齢 20.32 歳、 $SD = 2.31$ ）が本調査に参加した。なお、感情無視の利益・コストの有無と抑うつ傾向との関連をみる分析においては、データに不備のあった 26 名を分析対象から除外し、279 名（男性 157 名、女性 122 名、平均年齢 20.11 歳、 $SD = 1.21$ ）を分析対象とした。

手続き・倫理的配慮

本調査は 2006 年 1 月下旬から 2 月中旬にかけて行われた。大学の講義時間中に質問紙を配布して記入を依頼し、回答終了後その場で回収した。なお、調査の趣旨を説明し、調査への参加は自由意志であること、無記名回答による個人の匿名性の保護、得られた回答

の厳重な保護について紙面および口頭で説明した。また、調査同意を得るため、紙面に調査に協力する場合には丸印を記入する欄を設け、調査参加者の同意を得るようにした。なお、本研究は筑波大学大学院人間総合科学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施した。

質問紙の構成

感情無視に関する1項目 不快で嫌な気持ちを抱いた時、そうした気持ち・その出来事自体を「何も感じないように、考えないように」するかどうかの傾向を尋ねるため、独自に項目を作成した。教示文として、「日頃、私たちは人とのやりとりの際に、あるいは何かしらの出来事の際に不快で嫌な気持ちや感情を体験することがあります。そうした気持ちや感情を抱いた時、そのことをなかったことにする、あるいは無視する、気づかない・知らないふりをする、あるいは何も感じないようにする、考えないようにする、といった対処をすることがあるかと思えます」と説明したのち、「不快で嫌な気持ち（イライラ、落ち込み、不安など）を抱いた時、あなたはその時抱いた気持ちや感情、あるいはそのきっかけとなった出来事自体を何も感じないように、考えないようにしますか?」と尋ねる1項目を「1. 全くしない（1点）」から「6. いつもする（6点）」の6件法で尋ねた。得点が高いほど感情無視を行う傾向が高いことを意味する。

感情無視の利益・コストに関する項目（自由記述） 感情無視に関する1項目への回答の後で、「1. 全くしない」以外の回答をした研究協力者に対して「何も感じないように、考えないようにした、あるいはしなかったために自分の日常生活において良かったと思うことを書いてください（利益）」と「良くなかったと思うことを書いてください（コスト）」について自由記述形式で回答を求めた。なお、感情無視に関する1項目で「1. 全くしない」と回答したにもかかわらず、利益とコストの質問に回答していた者のデータは利益・コストの分類対象から除外した。

抑うつ傾向 Radloff (1977) による CES-D (the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale) の邦訳版 (島・鹿野・北村・浅井, 1985) を用いた。この尺度は20項目4件法 (1日未満 (0点) から5日以上 (3点)) で構成され、各項目に対して一週間で

何日当てはまるかどうかを尋ねるものである。CES-D の得点が高いほど抑うつ傾向が高いことを示す。

結果

感情無視の利益・コストの分類

自由記述の回答から記述内容が曖昧であるもの、また意味が不明な記述を除外した結果、利益は260個、コストは259個の記述が得られた (感情無視1項目の記述統計は平均値 = 3.48, 標準偏差 = 1.28, 中央値 = 4.00, 最頻値 = 4)。これらの回答を1つずつカードにし、KJ法 (川喜田, 1967) を援用した分類を行った。分類に際しては、心理学を専門とする博士課程の大学院生4名によって行われ、互いの分類の一致・不一致を照合させながら、意見の食い違った分類に関しては全員の合意が得られるまで分類を行うといった、受容と納得によるKJ法の妥当化のプロセス (福島, 2006; 渡邊, 2004) に基づいて分類を行った。また、この分類に関わった者と分類に関わらなかった者 (心理学を専門とする博士課程の大学院生) の2名で独立して分類を行った。

利益 得られた自由記述をそれらのグループの類似度に合わせて布置するとき、二つの軸が見出され、四つの象限に記述の布置が可能であった (Figure 1)。一つ目の軸は感情無視に対する個人の意味づけが積極的か消極的か、もう一つの軸は利益の対象が自分自身 (対自的) か他者との関係性 (対関係性的) かの軸であり、これによって一つの象限を除いて個々の記述を布置することが可能であった。第一象限に布置された記述分類はなかった。第二象限は感情無視の利益が対自的で積極的な意味づけがなされる記述の群であった (71件, 27.3%)。ここでは、「個人の成長 (19件; 少々なことではくじけなくなった, 辛い中頑張れるようになった)」、「前進 (20件; 前向きになれた, 次のことを考えられる)」、「集中可能 (27件; 他のことに集中できる, 時間をロスせずに済む)」、「冷静な考え直し (5件; 自分を後で再確認できる, 冷静に物事を考えられる)」などが得られた。第三象限は感情無視の利益が対自的で消極的な意味づけがなされる記述の群であった (133件, 51.2%)。ここでは、「気分の安定 (54件; 自分を保てる, 普段通り生活ができる)」、「気が

楽になる (76 件; 不快な気持ちにならずに済む, そのことで思い悩むことが少ない)、「気逸らし (3 件; 楽しく違うことを考え過ぎせる, 楽しくなる)」などの記述が得られた。そして第四象限は感情無視の利益が対関係性的で消極的な意味づけがなされる記述の群であった (17 件, 6.5%)。ここでは、「対人配慮 (2 件; 相手に気を遣える, 相手の気持ちがわかる)」、「対人関係維持 (15 件; 対人関係を悪化させずに済んだ, 関係を維持できた)」などの記述が得られた。また、「なし」あるいは「わからない」に分類されたのは 39 件 (15%) であった。

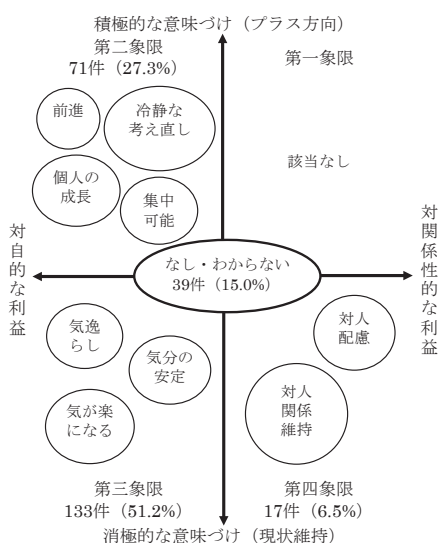


Figure 1 感情無視の利益の構造。

コスト 利益と同様に二つの軸が見出され、四つの象限に記述の布置が可能であった (Figure 2)。一つ目は感情の悪化であるのか (感情面の悪化), 自身が置かれた状況の悪化であるか (状況の悪化) の軸であり、二つ目の軸は利益と同様にコストの対象が対自的か対関係性的かの軸であった。この二軸により、四つの象限に個々の記述を布置することが可能であった。第一象限は感情面の悪化で対関係性的なコスト記述群であり (18 件, 6.9%), 「八つ当たり (9 件; 他人に厳しく当たってしまう, イライラが行動に出てしまう)」、「孤独感 (2 件; 独りぼっちになってしまう, 一人でずっといること)」、「他者嫌悪 (7 件; 相手が

余計に嫌いになった, 相手を避けることになった)」などの記述が得られた。第二象限は感情面の悪化で対自的コストの記述群であり (114 件, 44.0%), 「ストレス反応 (44 件; 不安が強くなる, 体調不良)」、「リバウンド (18 件; 余計にそのことを考える, より深く思いつめる)」、「苦痛の喚起 (23 件; ふと思い出されて不快になる, 再び思い返して腹立たしくなる)」、「引きずり (29 件; 心のどこかでそのことを考える, 未だに引きずる)」などの記述が得られた。第三象限は状況の悪化かつ対自的コスト記述群であり (76 件, 29.3%), 「根本的未解決 (26 件; 根本的な解決にならない, 解決法になっていない)」、「先延ばし (13 件; 結局現実逃避でしかない, 現実と向き合えない)」、「生活への支障 (3 件; 時間の使い方の効率が悪くなる, 趣味に費やす時間がなくなった)」、「失敗の繰り返し (20 件; 次に活かせない, 失敗ばかりの悪循環になった)」、「無視の習慣化 (14 件; 物事を深く考えないようになった, 感じるべきことを感じなくなった)」といった記述が得られた。そして第四象限は状況の悪化で対関係性的なコスト記述群であり (10 件, 3.8%), 「相互不達 (5 件; 自分の気持ちを伝えられない, 相手に伝えない自分だけが損をしている)」、「関係構築の困難 (5 件; 人間関係がうまくいかない, けんかにならない自分との仲が深まらない)」などの記述が得られた。また、「なし」あるいは「わからない」に分類されたのは 41 件 (15.8%) であった。

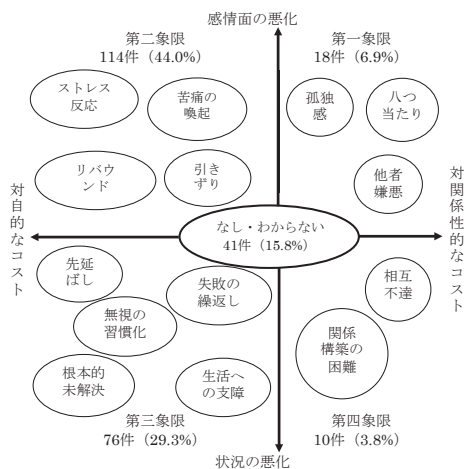


Figure 2 感情無視のコストの構造。

感情無視の利益・コストに関する認識の有無と抑うつ傾向との関連

感情無視に関する利益・コストの認識の有無によって4群を抽出した (Figure 3)。なお、認識の有無については、記述欄への記入の有無で判断した。その結果、利益・コスト両面を記述した群を「両記述群 (141名)」, 利益のみ記述した群を「利益群 (30名)」, コストのみ記述した群を「コスト群 (30名)」, 利益・コスト両面の記述がない群を「記述なし群 (52名)」として抽出した。これらに加えて、感情無視に関する1項目に対して「1. 全くしない」と回答した群を「非無視群 (26名)」として抽出し、計5群を分析対象とした。

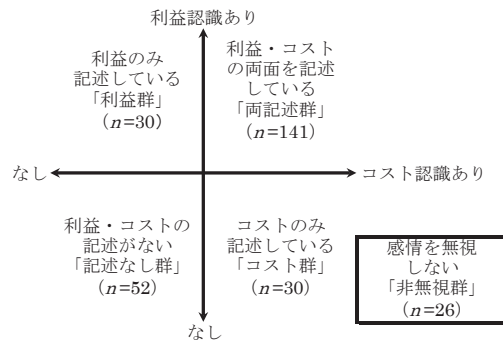


Figure 3 各群の抽出結果。

全体および各群における抑うつ傾向の平均と標準偏差を Table 1 に示した。利益・コストの記述の有無で抽出された4群に非無視群を加え、抑うつ傾向を従属変数とした1要因5水準の分散分析を行った結果、有意な効果が示された (抑うつ傾向: $F(4, 274) =$

4.53, $p < .001$, $\eta_p^2 = .062$)。そこで多重比較 (Tukey法) を行った結果、両記述群 ($p = .007$) と利益群 ($p = .025$) が記述なし群よりも抑うつ傾向が有意に低いことが示された (Table 1)。

考察

本研究の目的は、感情無視の適応的・不適応的な側面を探索的に検討し、利益・コストの観点から分類を行うこと、そして感情無視の利益・コストの認識の有無と抑うつ傾向との関連性を検討することであった。その結果、感情無視の利益・コストのさまざまな側面が明らかとなり、また感情無視の利益・コストの認識の仕方の違いが抑うつ傾向に差異をもたらすことが示された。

利益・コストの分類

感情無視の利益に関しては、不快な感情から距離を置くことで冷静に物事を判断できるようになること、そして今求められる課題に対して集中できるようになることで結果的に個人の成長を促すことなどが示された。また、注意を別に向けることで個人が直面している物事にとらわれず、他のことに集中できるなどの積極的でポジティブな側面が明らかとなった。それらを可能にする要因として、消極的な意味づけではあるが感情無視が気分の安定をもたらすことが一つに挙げられる。感情無視は問題解決に直接有効な対処ではないものの、一時的に気分の安定を図り、後の問題解決を効果的に遂行させる可能性を持っている。また、他者との関係性における利益である、対人配慮や対人関係維持で見られるように、自身の感情は無視しながらも他者を気遣ったり、他者との現在の関係を荒立てるこ

Table 1 各群及び全体における抑うつ傾向得点の平均値と標準偏差、および下位検定結果

	全体 (N=279)	1.両認識群 (N=141)	2.利益群 (N=30)	3.コスト群 (N=30)	4.記述なし群 (N=52)	5.非無視群 (N=26)	下位検定
抑うつ傾向 [95%信頼区間]	18.58(10.33)	16.82(9.88) [15.15, 18.49]	15.50(9.06) [11.88, 19.12]	21.30(9.64) [17.68, 24.92]	22.40(9.26) [19.65, 25.16]	20.88(13.75) [16.99, 24.78]	1**, 2* < 4

注1) ** $p < .01$, * $p < .05$, カッコ内の数値は標準偏差を表す。

注2) 抑うつ傾向はCenter for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D) による得点。

とを避けたりすることで状況の悪化を防ぎ、現在の関係を維持することが可能になると考えられる。したがって、感情無視は問題（不快感情）から注意を逸らすなどして距離を置くことによって現状の悪化を防ぎ、不快感情から個人を保護する側面を有すると考えられる。一時的に問題から離れてしまうものの、感情無視は結果的には前進できることで個人の成長を促すといった適応的な機能を備えていると考えられる。

一方、感情無視のコストに関しては無視した感情が個人のわだかまりとなって残存する様子が窺われる。自分の感情を無視してしまうことで、八つ当たりとしてその場以外の人間関係に悪影響を及ぼし、他者への嫌悪感が喚起されたり、孤独感を強める状況に陥らせたりするような危険性が示唆された。また、感情無視は自分を押し殺す行為であるために、個人のさらなる心理的苦痛として蓄積され、跳ね返りを受けてしまう。これは思考の抑制研究における逆説的効果 (Wegner, 1994a) と同様の結果であり、抑制後に感情状態が悪化 (Wegner, 1994b) する跳ね返りが感情無視でも生じるのだと考えられる。したがって、無視された感情のその後の処理次第で、上記のような苦痛が喚起されるか、あるいは先述のような利益がもたらされるかが決定されるのではないかと推測される。他者との関係性の面では、相互不達や関係構築の困難といったコストが見られる。他者と親密な関係を築くこと的前提には自分自身の内面との親密さがあるが (平木, 1996)、自らの感情を押し殺し、他者に自分の気持ちを伝えないことで成熟した関係の構築に困難が生じるのだと考えられる。また、先延ばしや根本的未解決、失敗の繰り返しなどのコストに見られるように、感情無視は不快な感情や出来事から一時的には回避が可能な反面、問題の解決にならないといった記述が多く見られた。感情無視はコーピングの情動焦点型 (Lazarus & Folkman, 1984 本明・春木・織田監訳 1991) に分類されると考えられ、実際に感情を無視する傾向と回避的・消極的な情動焦点型コーピング間には正の関連性が報告されている (櫻村, 2009)。情動焦点型コーピングは自身の感情的苦痛を低減させるための試みであり、問題解決を狙った対処ではないことから、感情無視に問題の未解決が多く見られることは

妥当な結果であろう。小浜・松井 (2007) によれば、先延ばし中の意識として憂鬱や焦り、自己嫌悪、また先延ばし後の意識として後悔や焦り、不安、自己嫌悪などが報告されている。さらに、感情無視を繰り返すうちに「物事を深く考えないようになった」、「出来事を理解しないようになった」などの無視の習慣化も生じており、感情無視が習慣化されて誤った方向に学習されうような記述も見られた。自身の感情に直面せず、解決する機会を逃した問題を後になって解決しようとするのはしばしば困難を伴う。その結果として問題解決が先送りとなり、また同じ失敗を繰り返すといった悪循環が生じる。以上のことから、感情無視は利益だけでなくそのコストも存在する、いわば諸刃の刃のような現象であることに注意が必要であろう。

感情無視の利益・コストの認識の有無と抑うつ傾向

感情無視の利益・コストに関する記述の有無で抽出した4群に加え、感情を無視しないと回答した群の計5群で抑うつ傾向得点の比較をした結果、一部に有意差がみられた。利益・コストの両記述群は両面の記述がなかった記述なし群よりも抑うつ傾向が有意に低かった。感情無視に関する利益・コストの両側面を認識しながら用いることは、感情無視に対する個人の能動的かつ積極的な姿勢を反映するものとして捉えることもできるかもしれない。利益とコストの両面を認識しているからこそ、状況に応じて感情無視を行い、感情無視による悪影響を予測することで個人や関係性における状態の悪化への対処準備も促されると推測される。一方、利益・コストの両面の認識がない場合、感情無視に対する姿勢は受身的で消極的なものとなり、惰性的に用いるような非効果的な対処となりかねない。また、非無視群と両記述群では抑うつ傾向には有意差がみられなかった。中田 (2006) によれば、自分の感情に正面から向き合い、それをしっかりと抱えつつ、しみじみと感じ入るような体験の重要性を指摘している。さらに、問題への直面化は積極的な問題解決スタイルと関連することから (松本, 2008)、感情へ目を向けることは自身の感情体験の理解を促進させるとともに、抱えている問題の解決へと至るためにも重要なことであると考えられる。しかし、個人の置かれている状況次第では、喚起される不快な感情への直面は

個人に苦痛をもたらすものでもある。直面が望ましいものであるにも関わらず、直面の作業は時に難しくもある。このことから、無理に感情に直面させるように促すだけでなく、個人が慣習的に用いる感情無視を大事にしつつも、その利益やコストの認識を促すことで抑うつ傾向などのメンタルヘルス状態の悪化を緩和させることも可能となるかもしれない。また、感情無視の理解を深める過程においては、自身の回避的な姿勢を見直すことも必要であるが、感情無視は決して苦痛の一時凌ぎのような側面だけでなく、個人に冷静さを取り戻させることで個人を前進させる側面も持っている。個人が直面化の過程へと進む機会を感情無視が提供するということが期待できる。

一方、利益のみを記述した利益群も記述なし群より抑うつ傾向が有意に低い結果が示された。この結果からは、感情無視の利益のみを認識することが効果的な感情無視を引き出すようにも見える。しかし、感情無視には本研究の結果で示されたように多様なコストがあるにもかかわらず、利益という物事の良い面のみを認識するというのは、偏りのある捉え方であるといえよう。感情無視の利益には気を逸らして他に集中できたり、自身の気分を安定させたりすることが可能になる面などがある。その一方で、感情を無視したところで個人の抱える問題の根本的な解決には至り難い対処であり、さらにはストレス反応や苦痛の喚起などの跳ね返りをもたらすものでもある。例えば、物事の良い面のみを認識することに関連する性格特性として、楽観性が挙げられる。楽観性は精神的健康と正の関連性を示す一方で(戸ヶ崎・坂野, 1993)、非現実的な楽観傾向によって脅威の存在に対する適切な評価が妨げられ、状況に適切な対処方略の選択と修正が妨げられる可能性も指摘されている(e.g. Weinstein, 1982)。したがって、利益群で得られた結果の解釈には注意が必要であろう。

本研究の限界と今後の課題

本研究の結果から、感情無視に関する利益・コストのさまざまな側面が明らかとなり、またその両側面を認識することの重要性が示唆された。しかし、本研究には以下のような方法上の限界が挙げられる。まず、本研究は感情無視の適応的・不適応的側面を利益・コ

ストの観点から個人の意識的な回答を基に探索したに過ぎない。本研究では、感情無視の利益・コストに関する回答の有無によって、どちらか片方のみを記述した者を利益群とコスト群、「なし」あるいは「わからない」と回答した者を記述なし群とに分類したが、記述なし群が感情無視に関する利益やコストの認識に欠けているのか、あるいは記入が面倒なために未回答であったのかの弁別が難しい。加えて、本研究で用いた感情無視に関する質問紙において、回答者が本当に感情無視を理解した上で利益・コストについて回答したかどうかについても断言が難しい。さらには、質問紙による回答のため、個人が意識的に回答できる範囲でしか感情無視の利益やコストを明らかにできていない。本研究はあくまで探索的検討にとどまるものであり、今後としては上記の課題を統制した上で質問紙法以外でのアプローチを用いて検討を行い、感情無視をより多角的に捉えることが望まれる。

以上のことから、感情無視は回避的で多くのコストを伴う対処ではあるが、ストレスによる直接的な影響を一時的に最小限にとどめ、現状を維持するだけでなく個人の成長をももたらす機能を備えていると考えられる。また、感情無視に関する利益・コストの両側面を認識することが抑うつ傾向のようなメンタルヘルス状態の差異をもたらすことが示されたことから、感情無視の利益やコストに関する心理教育の必要性を示唆する結果であったともいえる。自身が日常的に使用している感情無視について理解を深めることで、そのメリットやデメリットを理解しつつ、さらにはその過程において感情を無視し続ける自分自身の回避的な姿勢の見直しを行うことで、個人の成長につなげる機会を提供することができるかもしれない。

引用文献

- 福島和俊 (2006). 質的心理学からの提言 - 因子分析における発想法 -. 岡山大学大学院文化科学研究科紀要, 21, 111-125.
- Gross, J.J. & John, O.P. (2003). Individual differences in two emotion regulation processes: Implications for affect, relationship, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 348-362.

- 長谷川寿一 (2005). 動物行動研究における適応論的アプローチの重要性. *動物心理学研究*, 55, 41-44.
- 平木典子 (1996). 座談会 これからのパートナーのあり方. 平木典子 (編) 親密さの心理 (現代のエスプリ) 至文堂 pp. 9-33.
- Holahan, C.J., & Moos, R.H. (1985). Life stress and health: Personality, coping, and family support in stress resistance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 739-747.
- 今田純雄 (1999). 感情. 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司 (編) *心理学辞典* 有斐閣 pp. 141-142.
- 樫村正美・小川俊樹 (2007). 不快感情の抑制に伴って生ずる派生的感情について—予備的研究—. *筑波大学心理学研究*, 33, 89-94.
- 樫村正美 (2009). 大学生における状態アレキシサイミアに関する予備的検討. *筑波大学心理学研究*, 38, 109-118.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 想像性開発のために 中公新書.
- 小浜 駿・松井 豊 (2007). 先延ばし過程における意識の変化の探索的検討. *筑波大学心理学研究*, 34, 27-35.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer, Publishing Company.
- (ラザルス, R. S., フォルクマン, S. 本明 寛・春木豊・織田正美 (監訳) (1991). *ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究—*. 実務教育出版)
- 松本麻友子 (2008). 拡張版反応スタイル尺度の作成. *パーソナリティ研究*, 16, 209-219.
- 松山義則 (1993). 感情心理学研究の刊行を迎えて. *感情心理学研究*, 1, 1-2.
- 宮下一博 (1998). 青少年の感情と向き合うことの重要性. *青年心理学研究*, 10, 77-80.
- 永井 智・新井邦二郎 (2007). 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影響の検討. *教育心理学研究*, 55, 197-207.
- 中田 (北出) 薫 (2006). *イラショナル・ピリーフと感情の体験様式との関連 - 感情体験尺度作成の試みを通して*. *パーソナリティ研究*, 14, 241-253.
- Nolen-Hoeksema, S., & Morrow, J. (1991). Prospective study of depression and posttraumatic stress symptoms after a natural disaster: The 1989 Loma Prieta earthquake. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 115-121.
- Osowiecki, D. M., & Compas, B. E. (1999). A prospective study of coping, perceived control, and psychological adaptation to breast cancer. *Cognitive Therapy and Research*, 23, 169-180.
- Radloff, L.S. (1977). The CES-D scale: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, 1, 385-401.
- 坂本真士 (1998). 自己注目と抑うつ—抑うつ発症・維持を説明する3段階モデルの提起—. *心理学評論*, 41, 283-302.
- 鳥 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について. *精神医学*, 27, 717-723.
- Stone, A. A., & Neale, J. M. (1984). New measure of daily coping: Development and preliminary results. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 892-906.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1993). オプティミストは健康か? *健康心理学研究*, 6, 1-11.
- 渡邊芳之 (2004). 質的研究における信頼性・妥当性のあり方: リアリティに至る過程. 無藤 隆・やまだようこ・南 博文・麻生 武・サトウタツヤ (編) *質的心理学: 創造的に活用するコツ*. 新曜社 pp.59-64.
- Wegner, D.M. (1994a). Ironic processes of mental control. *Psychological Review*, 101, 34-52.
- Wegner, D.M. (1994b). White bears and other unwanted thoughts: Suppression, obsession, and the psychology of mental control. New York: Guilford Press.
- Wegner, D.M. (1997). Why the mind wanders. In

J.D. Cohen & J.W. Schooler (Eds.), Scientific approaches to consciousness. Mahwah, NJ : Erlbaum, pp.295-315.

Weinstein, N.D. (1982). Unrealistic optimism about susceptibility to health problems. *Journal of Behavioral Medicine*, 5, 441-460.

脚注

- (1) 本研究は日本心理学会第70回大会(2006)において発表された内容を再分析・再構成したものである。
- (2) 本論文は2010年に筑波大学人間総合科学研究科に提出した博士論文の一部を再分析・再構成したものである。
- (3) 本研究では、過去の文献の中で情動と感情の間に一貫した区別がない(今田, 1999)ことや、1993年に発足した日本感情心理学会において、感情 = emotion を学術用語として対応させたことから(松山, 1993)、感情と情動を同じ意味を持つ言葉として用いる。
- (4) 本研究で述べる適応とは、長谷川(2005)が指摘するように進化的時間軸の中で語られる生物学的適応であり、社会的望ましさとは関係のないものである。すなわち、ある環境でその形質や行動が生存や繁殖の成功に貢献していれば適応的であるとする考え方に基づいている。

人間科学の歴史序説（1）

— 人文学・人間の科学・人間学（人類学）・人間科学：人間に関する学問の変容 —

長谷川幸一（常磐大学人間科学部）

Introduction to the History of Human Sciences (1)

— Humanities・Science of Man・Anthropologie・Anthropology・Human Sciences：
Transformation of Learning about Humans —

Kouichi HASEGAWA (*Faculty of Human Sciences, Tokiwa University*)

Abstract

The task of this paper is to outline the history of human sciences. This task is so overwhelming that it may be the kind of attempt to give up on it from the beginning. When did human sciences begin and what kind of transition did it take to reach the present? If we imagine the length of time from start to finish and the doctrines that will have to be taken up, many will find it difficult to accomplish. In Japan, the meaning of the word "human sciences" remains ambiguous. It is used in various meanings depending on the interpretation of. Therefore, when we write history of human sciences, we are confused about where to start it, what kind of person and theory should be handled, and what method should be relied on. Foucault considered the history of human sciences in terms of the disruption of the cognitive system between the three periods of Renaissance, classical and modern times. His attempt, while of great significance, is merely abstract and seems to overemphasize the discontinuity in history. In this paper, we interpret that the study of human beings has changed from the "humanities" formed in the Renaissance, to "science of man" and "Anthropologie" in the classical period, and to "human sciences" since the 19th century.

1. 本稿の課題と術語の整理

本稿の課題は「人間科学」(human sciences)の歴史の概要を示すことにある。この課題は過重であり、それを十分な形に仕上げることを初めから断念せざるを得ない類の試みであるかもしれない。「人間科学」がいつ始まり、どのような変遷を経て現在に至ったのか。初めから終わりまでの時間の長さを取り上げなければならぬであろう人物と学説の多さを想像すれ

ば、多くの人は、それをやり遂げることは困難であると判断するに違いない。

そもそもわが国では、「人間科学」という言葉の意味が曖昧なままである。その曖昧さは、「人文科学」や「人文学」、「人間学」といった術語との関係において顕著であり、「人間科学」という語を冠する文献や組織(学部)は、それを独自の解釈にしたがいさまざまな意味で用いている。それゆえ「人間科学の歴史」

を書くといっても、わたしたちはそれをどこから始め、どのような学説をとりあげれば良いのか、どのような方法に依拠すべきなのか、戸惑わざるを得ないのである（1）。

ただこの課題については、すでにフーコー（M. Foucault, 1926-84）が『言葉と物——人間科学の考古学』（邦訳副題は「人文科学の考古学」）において、言葉と物事のあいだの規則（認識体系）の時代的な断絶という観点から独自の考察を行っている。それゆえ、本稿ではまずかれの議論をとりあげる。フーコーの「人間科学の考古学」は、バachelard（G. Bachelard, 1884-1962）とカンギレム（G. Canguilhem, 1904-95）による「エピステモロジー」の方法に依拠したものであったが、当時の歴史家たちから厳しい批判を受けた（2）。

フーコーの議論については2. において検討を加えるので、ここではまず、本稿で用いる「人文学」、「人間の科学」、「人間学」、「人類学」、「人間科学」という術語について説明しておきたい。『言葉と物』の邦訳副題が「人文科学」とされているように、わが国では“sciences humains”（仏）と“human sciences”（英）が、「人文科学」と訳されている場合がある。この点は「戦後日本における人間科学の曖昧さ」として別の機会に論じたいと考えているが（3）、本論は表1の理解に従って進める。

ところで「人間科学」に関する術語の整理という点では、日本語の「科学」と“science”および“sciences”との対応関係も重要な意味をもつ。「科学」という日本語は、明治期に生まれた言葉である（4）。本論2-2. で見る通り、19世紀の西欧では学問の「専門分化」が進み、ラテン語の“scientia”（知識）の

英訳・仏訳であり単数で用いられることが一般的であった“science”は、個別の学問分野の集合を表す“sciences”へと変貌を遂げた。したがって、日本の明治期に“sciences”の翻訳語として生まれた「科学」は、まさに「分科の学」・「百科の学」という意味もっている。「科学」は“science”の訳語ではない（野家 2008: 36-8）。

このような理解からすると、表1. のように“science of man”に「人間の科学」という日本語を充てることは誤りであることになる。3-4. ではヒューム（D. Hume, 1711-76）の「人間本性論」を検討するが、わが国のヒューム研究者たちの多くは、ヒュームの言う“science of man”を「人間の科学」とは訳さず、「人間の学」あるいは「人間学」としている。それは18世紀の哲学者であるヒュームの言う“science”が、明治期に生まれた日本語の「科学」とは異なる意味をもつと解釈するからであろう。

ただ19世紀以前における“science”という言葉の使用について言えば、それがすべて単数で用いられていたのではない。たとえば3-2. で見るベーコン（F. Bacon, 1561-1626）は、17世紀に英語で書かれた『学問の進歩』（1605）において、文脈によって“science”と“sciences”を使い分けている。またヒュームの『人間本性論』（1739-40）においても、“sciences”が使われている。

以上のような理由から本論では、“science”と“sciences”の双方を「科学」と訳し、「科学」(science)、「科学」(sciences)のように原文を併記することにする。ただ、文脈によっては「諸科学」としたほうが自然である場合もあるので、その場合は「諸科学」という言葉を用いることにする。

表1. 本論における人間科学に関する術語の対応関係

日	人文学	人間の科学	人間学・人類学	人間科学
英	humanities	science of man	anthropology	human sciences
仏	—	science de l' homme	anthropologie	sciences humaines
独	—	Wissenschaft von Menschen	Anthropologie	—

2. 考察の観点：科学史における連続と断絶

歴史における連続と断絶をどのように理解するかという問題は、ある事柄の歴史的考察において重要な事柄のひとつであろう。フーコーは「ルネサンス・バロック」、「古典期」、「近代」のあいだに存在する「断絶(断層)」を強調し「人間科学の歴史」を論じた。かれの議論は「物事と言葉のあいだの規則」に焦点をあて、それぞれの時代には他とは異なる独自の規則(認識体系)があると主張するものであった。

本論は、「人文学」、「人間の科学」、「人間学」、「人類学」、「人間科学」の5つの学問の誕生と変容に焦点をあてた考察を行うが、これらの学問は異なる時代に生まれ、固有の人間観を背景にもっており、それらのあいだには確かに大きな断絶がある。ただ筆者はフーコーとは異なり、これらの学問のあいだには断絶のみがあるとは考えない。以下では、ベーコンとホップズ、ホップズとヒューム、ヒュームとカントとの個人的な関係に注目しながら考察を進めるが、その関係には連続と断絶を同時に読み取ることが可能である。

2-1. フーコー「人間科学の考古学」(archéologie des sciences humaines) について

先に触れたようにフーコーは、ルネサンス・バロックから古典期、近代への「認識体系」(épistémè)、つまり「物事と言葉のあいだの規則」の転換に着目することで、人間科学の誕生と変容について考察した。かれは、「ルネサンス・バロック」、「古典期」、「近代」の3つの時期にはそれぞれ固有の認識体系があり、それらのあいだには大きな断層(断絶)があると主張した。かれはみずからの試みを、従来の意味での歴史を記述するのではなく、歴史を明確にすることを可能とする認識論的な枠組みを明らかにすることを目的とするものであるから、「歴史」ではなく「考古学」と呼ぶべきものであると述べている(Foucault 1966: 13 = 1974: 20-1)。

フーコーは『言葉と物』以前にも、『狂気の歴史』(1961)や『臨床医学の誕生』(1963)などで独自の「考古学」の方法に依拠した論考を発表していたが、「人間科学の考古学」をテーマに掲げた『言葉と物』は、個別科学ではなく、「人間科学」とそれを可能にする

認識体系について考察した点において特別の意義を有する論考となった(中山 2010: 221-8)。

『言葉と物』においてフーコーは、近代における「知識」(savoir)の意味と形態を明らかにするとともに、その形態のなかでの「人間科学」の位置づけを把握しようと試みている。そこで提出された命題のひとつは、知識の意味は時代とともに変化してきた、というものである。それは、「ルネサンス・バロック」(おおまかに言って15・16世紀)、「古典期」(17世紀中葉から18世紀末まで)、「近代」(19世紀初頭から少なくとも20世紀中葉まで)の3つの時期はまったく異なる「知識概念」をもっていた、という主張につながる。そしてもうひとつの命題は、それぞれの時代の知識概念は、その時代の「秩序の経験」、換言すれば、その時代が物事のあいだの関係をどのように理解していたのかに基づいている、というものである(Gutting 1989: 139-40 = 1992: 211-2)。

フーコーは、「近代の知識」の大きな特徴は「生身の人間」が登場したことであり、近代において初めて、「人間」は知にとつての客体であるとともに認識する主体として、その両義的な立場において登場したと主張する。かれによれば、18世紀末から19世紀初頭に近代の科学である「生物学」、「言語学(文献学)」、「経済学」は、古典期とは異なる意味での「人間」を認識対象としたが、それらの科学と同じ種子から一連の「危険な中間物」のような科学である「人間科学」が派生した。人間科学とは、人間の有限性そのものを対象とするのではなく、人間の活動メカニズムがいかにして生まれ、展開されるかを明らかにしようとする科学である。この危険な科学としてフーコーが挙げているのは、「心理学」、「社会学」、「文化史」、「思想史」、「科学史」などである(Foucault 1966: 355-85 = 1974: 365-95)。

フーコーは、「精神分析」、「文化人類学」、「構造主義的言語学」の3つの科学では、歴史的な主体としての「人間」は存在せず、近代において登場した意味での「人間」は死んでいると主張した。かれによれば、近代哲学の「人間探求」は袋小路に突き当たっており、「人間」を哲学の不可避の焦点として受け入れることに何ら疑問を感じない姿勢は、「教条的まどろみ」の

新たなかたち（人間学的眠り）でしかない。フーコーは、その「教条的まどろみ」から目覚めるには、わたしたちの至高の支配的なカテゴリーについて「人間」を排除し、「人間学」(anthropologie) を根こそぎにしなければならぬと述べている (Foucault 1966: 351-4 = 1974: 362-4)。

2-2. 「人文学」・「人間の科学」・「人間学」・「人間科学」

(1) 17世紀における自然学から自然科学への転換

フーコーの認識体系論は、知識概念の変容に眼を向けた独自のものであったが、科学史の時代区分という点では一般的な理解とほぼ一致している。つまりフーコーの言うルネサンスから古典期への認識体系の転換が生じたのは、バターフィールド (H. Butterfield, 1900-79) の言う「17世紀科学革命」(the Scientific Revolution) (5) によってであり、古典期から近代への転換が生じたのは、19世紀において「科学の専門分化」、「個別科学ごとの学会の設立」、「科学の職業化(科学者の誕生)」が進展した時期である。人間的なものに関する学問は、このあいだにルネサンス期に形成された「人文学」(humanities) から古典期の「人間の科学」(science of man)・「人間学」(Anthropologie)、19世紀以降の「人間科学」(human sciences) へと姿を変えた。

バターフィールドは『近代科学の起源』(1949)において、近代世界と近代精神の真の生みの親は「17世紀科学革命」であり、その意義はキリスト教の出現以来他に例を見ないほど大きく、それに比べれば「ルネサンス」と「宗教改革」はほんの挿話的な事件に過ぎず、「17世紀科学革命」の重要性を考慮すれば、西欧史における従来の時代区分は時代錯誤でしかないと主張した (Butterfield [1949]1957: 7-8 = 1978: 14)。天文学におけるコペルニクス (N. Copernicus, 1473-1543)、生理学におけるハーヴィー (W. Harvey, 1578-1657)、運動学におけるガリレイ (G. Galilei, 1564-1642)、ニュートン (I. Newton, 1643-1727) らの理論によって、その後自然と人間に関する認識体系と知識の意味は大きく変わり、「科学」(science) の理論と方法が確立されていった。

(2) 19世紀に生じた科学の専門分化と制度化：学会と大学ならびに科学者の誕生

19世紀以降、ヨーロッパでは科学の「専門分化」と「制度化」が進んだが、科学の理論と方法が確立された「17世紀科学革命」に対して、19世紀の劇的な変化を「第2の科学革命」と呼ぶ場合もある (6)。たとえばフランスでは、ナポレオンが教育制度全般を改革するとともに、「エコール・ポリテクニク」、「エコール・ノルマル」が整備され、国家が科学技術政策を主導する中央集権的な体制が築かれていった。表2. は19世紀のフランスで創設された学会の一覧であるが、この表から明らかなように、科学の制度化と専門分化は密接な関連をもって進行した。

表2. 19世紀フランスに創設された科学の専門学会

設立年	学会名	備考
1761	王立農業学会	1804年にフランス農業アカデミーと改称
1803	パリ薬学アカデミー	
1821	地理学会	
1821	パリ自然史学会	
1827	フランス園芸学会	
1830	フランス地質学会	
1832	フランス昆虫学会	
1843	外科医学会	
1848	生物学会	
1852	フランス気象学会	
1854	順応動物学会	
1854	フランス植物学会	
1857	パリ化学会	1906年にフランス化学会と改称
1859	パリ人類学会	
1860	パリ統計学会	
1873	フランス物理学会	
1873	フランス数学会	
1876	フランス動物学会	
1878	フランス鉱物学・結晶学会	
1884	フランス菌類学会	
1887	フランス天文学会	
1897	フランス海洋学会	
1901	フランス心理学会	
1908	物理化学会	
1909	フランス鳥類学会	
1914	生化学会	

(出典) (古川 2018: 175)

また19世紀における科学の制度化・専門分化の過程に関しては、ドイツにおける「大学制度」の刷新も重要な意義を有している。ドイツではフンボルト (K. W. Humboldt, 1767-1835) の主導によって、1810年に新しい理念に基づく総合大学である「ベルリン大学」が創設され、その後の世界の大学のあり方に大きな影響を与えた。3-5. で見るカント (I. Kant, 1724-1804) は『諸学部の争い』(1798)において、上級学部である「神学部」、「法学部」、「医学部」に対して従属的な位置に置かれていた「哲学部」の意義を力説したが(7)、ベルリン大学では哲学部が神学部に代わって近代的な総合大学の核となった。哲学部には、天文学、生物学、植物学、化学、古典文学、地質学、歴史学、数学、文献学、哲学、物理学、政治学の12名の正教授が着任した。またベルリン大学では「ゼミナール」と「研究所」が設置され、個別の学問分野の研究が大学組織に組み込まれ、各学科の「専門分化」が進んでいった。

19世紀において生じた重要な出来事のなかでもうひとつ触れておくべきなのは、「科学者」(scientist)という言葉の誕生であろう。よく知られているように、ニュートンは生前、科学者と呼ばれたことはなく、「自然哲学者」と呼ばれた。科学者という言葉が生まれたのは、かれの死後100年以上経った1834頃のことである(8)。当時の状況は、科学の専門分化に応じて科学者自身の呼び方にも変化が見られた。科学者たちは、数学者 (mathematician)、物理学者 (physicist)、化学者 (chemist)、博物学者 (naturalist) など、それぞれの専門領域の名称で呼ばれるようになった。ケンブリッジの数学者・哲学者ヒューエル (W. Whewell, 1794-1866) は、科学の研究者を一般的に表す名称が必要であるとして、“science”からの造語である“scientist”という言葉の使用を提案したのである(古川 2018: 174-6)。

3. 「人間の科学」の誕生

3-1. ルネサンス期における人文学と自然学

(1) 人文学 (humanities)

人間科学の歴史とは「人間的なもの」に関する議論の歴史であると言えるが、「人間的なもの」に関する

議論はすでに古代の哲学者たちによって始められていた。ただ、ひとつの学問として成立したのはルネサンス期においてである。ルネサンス期の「人文主義者」(humanista)は、従来の「スコラ学」に対抗してフマニタス研究を称揚し、「人間性」(humanity)の探求を主要な課題としたが、かれらの研究は「人文学」として確立された。『人文学に何が起きたか』(What's happened to the humanities?: 邦題『人文科学に何が起きたか』)の編者であるカーナンによれば、「人文学」とは、人間が語る物語、人間の思考方法、人間の過去の姿、言語によるコミュニケーションや説得、人間の存在の奥底を突き動かす音楽などの研究からなる(9)。

ルネサンス期の「人文主義者」(ヒューマニスト)が教授する学問の対象はフマニタス研究と呼ばれ、具体的には「文法」・「修辞学」・「歴史学」・「詩学」・「道徳哲学」を含み、古代の著作の講読と注解が中心であった。フマニタス研究という言葉は、すでに古代ローマ時代にキケロやゲリウスが、自由人(市民階級)にふさわしい教養という意味で用い、その理念は中世における「自由学芸」(リベラル・アーツ)に受け継がれたのである。

(2) 自然学 (physica)

ルネサンス期における学問の変化として注目すべきもうひとつの点は、アリストテレス (Aristoteles, 前384-22)の「自然学」の伝統を受け継いだ中世的な自然学が大きな変貌を遂げたことである。キリスト教的思考様式が支配的であった中世において人間の身体は特別な存在であり、それをバラバラにするといったことは許されない行為であった。しかし、ルネサンス期になると医療行為のひとつとして人体の解剖が許されるようになり、人体の観察から得られた知見はその後の「人間論」にも決定的な影響を与えていった。

ルネサンス期における自然学の発展は多種多様な分野で生じたが、それらは複雑に絡み合っていた。ひとりの学者がさまざまな分野に関心を寄せ、総合的な宇宙論と人間論を展開したのである(10)。解剖学、発生学、学問論、地理学、天文学、光学、数学、力学などの発展は、自然と人間の自然本性の理解にも大きな影響を与えざるを得なかった。パドヴァ大学の解剖学講座を担ったヴェサリウス (A. Vesalius, 1514-64) は

『人体の構造について』（1543）において、人体の骨格、筋肉、血管、神経、腹部内蔵、胸部内蔵、頭部諸器官の7つの組織・器官を論じた（池上 2017: 2）。解剖学によって得られた人間の身体に関する認識の変化が、「人間論」に大きな影響を与えることは当然のことであろう。パドヴァ大学で学んだハーヴィの『動物の心臓ならびに血液の運動に関する解剖学的研究』（1628）とかれの機械論的人間観は、ホブズの「人間本性論」とかれの論敵であったデカルトの「人間論」にも大きな影響を与えた。

3-2. ベーコン：科学的方法の提唱と「学問」の分類、および学会の構想

フランシス・ベーコン（F. Bacon, 1561-1626）は近代科学の基礎を築いた人物のひとりであり、「人間科学の歴史」を考えるうえでも重要な位置にある。たとえばヒュームは、「人間の科学」の構想を明らかにした『人間本性論』の副題を「実験的な推論法を心の諸問題に導入する試み」とするとともに、序論では「人間の科学」の基礎が経験と観察（experience and observation）に置かれなければならないとし、みずからの試みがベーコン以来の方法を継承するものであると述べている（Hume [1739-40]2000: 45 = [1995]2011: 7-8）。またフランスの「百科全書派」の学問的営為が、ベーコンの理念を継承したものであることもよく知られている。

ベーコンは、中世に支配的であったスコラ的アリストテレス主義哲学を不毛な饒舌の思想であったと批判し、それに代えて「有用性」、つまり「人間の幸福への貢献」という価値基準を中軸にした新しい学問体系を提唱した。かれにとって、人間の自由な行動を阻む自然の制御が学問の重要な使命であり、学問は「人間の王国」を築くために奉仕するもの、「人間のための学問」であった。ベーコンは『ノブム・オルガスム』（1620）において、原因を知らなければ結果を得られないから、人間の知識と力は一致するとし、これによらなければ自然は征服されないと述べている（Bacon [1620]2018: 3 = 1978: 70）。この言葉は近代科学の知が「技術知」であることを象徴するものであると解釈され、多くの論者はこの理念に基づく「ベーコン主義」

が西欧文明の礎を築いたとしている。

たとえば、ホルクハイマー（M. Horkheimer, 1895-1973）とアドルノ（Th. Adorno, 1903-69）は西欧文明の根源を暴き批判した『啓蒙の弁証法』（1947）において、西欧の進歩思想（啓蒙のプロジェクト）の始まりをベーコンの思想、つまり「人間の王国」の樹立という理念に見て、その思想が「自然の搾取」を招いたと論じている（Horkheimer/Adorno, [1947]2020: 9-49 = 2007: 23-99）。地球温暖化を核とする自然破壊が、ベーコンの言う「自然の制服」という理念から直接生じたものなのか、わたしたちは慎重に見極めるべきであろう。

（1）学問の現状に対する批判と「科学の組織（学会）」の構想

1662年に設立されたロンドン王立協会（Royal Society of London）が、ベーコンの学問の理念に基づいて設立されたものであることは良く知られている（11）。現在まで続く学会のなかで最古のものであると言われるこの組織は、「自然の制服」という目的を達成するためには多数の人間の共同作業が必要であることを説いた『ニュー・アトランティス』（1627）に登場する「ソロモンの家」の発想に基づくものであった。政界においても活動したベーコンは、「科学の制度」についても新しい構想をもっていたのである（12）。

ベーコンはすでに1605年の『学問の進歩』（The Advancement of Learning）第2巻において、当時の学問の現状を次の6点に分けて批判している。

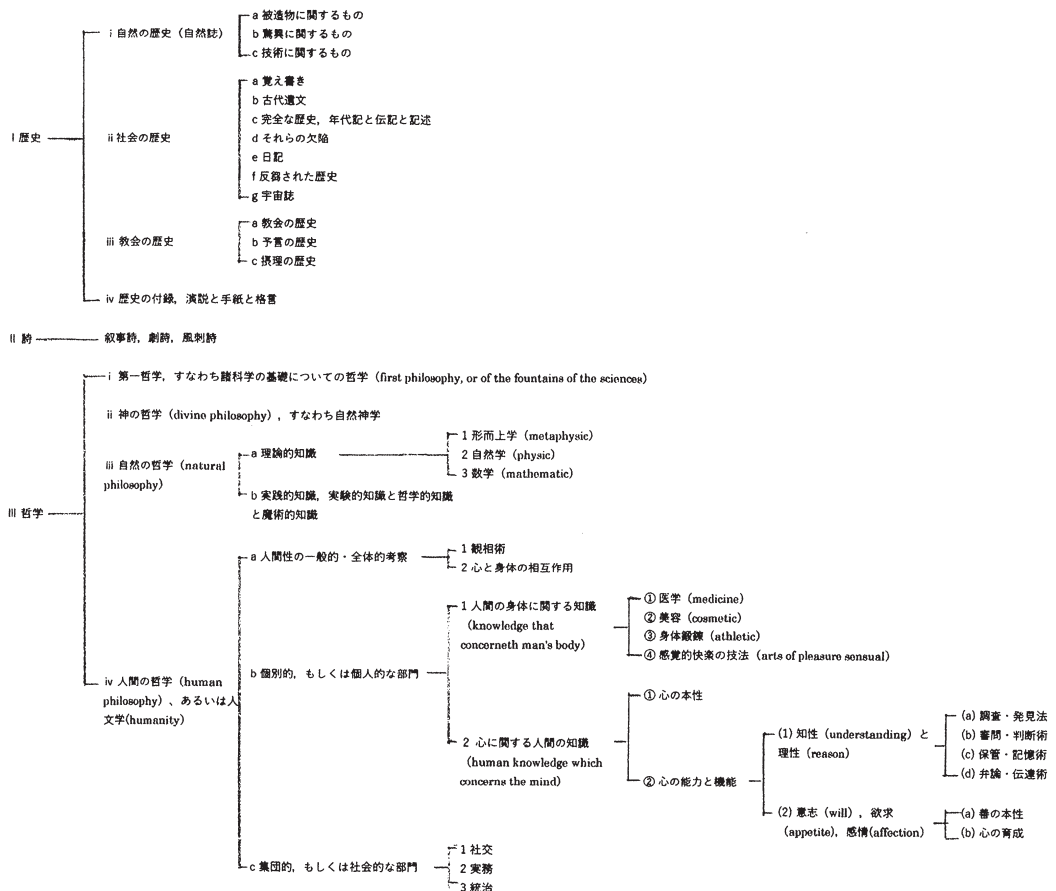
- i. ヨーロッパには多くの大学（colleges）があるにも関わらず、それらはすべて神学、法学、医学の専門科目（professions）に専念し、教養科目（arts and sciences）を教授していない。
- ii. 大学の創設者は教養科目にせよ、専門科目にせよ、その講座に十分な資金を提供していない。大学講座の担当者は一時的にその講座を担当しているのではなく、科学（sciences）を発展させるという役割を担っているのであるから、かれらの報酬と待遇は、専門の実務に就く人間の平均収入と同等でなければならない。
- iii. 自然を解明するには、書物の他にも数々の実験装置が必要であるのに、そのための十分な資金が

提供されていない。

- iv. 君主や高官たちは、大学の管理者たちを視察することを怠っている。
 - v. ヨーロッパの諸大学間の知的な交流が欠けている。
 - vi. どの学問分野の研究が進み、どの分野が遅れているかについての調査が行われていない (Bacon [1605]1895: 4-8 = 1974: 117-23, 強調点は引用者)。
- こう述べたあとベーコンは、これらの欠陥を取り除く仕事は王者の仕事であると述べている。『学問の進歩』は、1603年エリザベス女王の逝去によって即位したジェームズI世を意識して書かれたものであった。

(2) 学問の分類と人間の哲学 (human philosophy)

ベーコンは、人間の知力を「記憶」(memory)・「想像力」(imagination)・「理性」(reason)の3つに分け、これらにはそれぞれ「歴史」・「詩」・「哲学」の3つの学問分野が対応するとしている(図1.を参照されたい)。そしてさらに最後の哲学には、「第一哲学、つまり科学の基礎に関する哲学」(First philosophy, or of the foundations of the sciences)、「神の哲学」(divine philosophy)、「自然の哲学」(natural philosophy)、「人間の哲学」つまり「人文学」(humanity)という4つの分野があるとしている (Bacon [1605]1895: 28-54 = 1974: 151-88)。



(出典) (Bacon[1605]1895: 10-165=1974: 126-353). 学問の名称の初めに付けた記号と内容は邦訳とその目次を参照した。ただし訳語の一部は邦訳とは異なる。

図1. ベーコンによる学問の分類

ベーコンはさらにこの「人間の哲学」を「人間性の一般的考察」、「個別的・個人的な部門」、「社会的な部門」の3つに分けているが、とくに「個別的・個人的な部門」を詳しく説明している。人間の個別的な部門に関する知識は、「身体に関する知識」と「心（mind）に関する知識」に分けられ、後者はさらに「魂（soul）あるいは心の実体あるいは本性（nature）」を研究する部門と、「心の能力と機能を研究する部門」に分けられる。

ベーコンは魂の本性に関する議論において、魂が物質の法則を免れているか否か、それが不死のものであるか否か、といった問題が考察されているが、それらの議論は迷路に陥っているとし、魂に関する真の知識は神の啓示によって得られなければならないと述べている（Bacon [1605]1895: 63-4 = 1974: 203-4）。この点は、3-3. で見るホブズの議論と比較すると興味深い点であろう。また心の能力と機能に関する知識として、ベーコンは2つの種類のものがあるとし、人間の「知性」（understanding）と「理性」（reason）に関するものと、「意志」（will）と「欲求」（appetite）、「感情」（affection）に関するものを区別している（Bacon [1605]1895: 66 = 1974: 207）。

（3）帰納法の精練

「帰納法」（*inductio*）とは、特殊な個別的事実から一般的な結論を導く論理的推論であり、古代から行われていた一般的なものである。ただベーコンの時代の論理学では、「三段論法」（*sylogismus*）が主流となり、論理学者たちは帰納法の精練に労力を費やさなくなっていた。ベーコンが批判した当時の帰納法とは、感覚および個別的なものから、遠く離れた最も一般的な命題へと一挙に飛躍し、そのあとでこれらの命題の不動の真理性に基づいて中間の一般的な命題を証明するものであった。ベーコンは次のように述べている。

単純枚挙法によって進められる帰納法は、子供じみたものであり、不確実な結論を導く。それは反例によって覆される危険にさらされており、多くの場合、妥当な数よりあまりにも少なく、かつ手身近な事例のみによって決定する。しかし、技術（arts）と科学（sciences）の発見と論証に

とって実際に有用な帰納法とは、適切な排除と除外によって本質を見抜き、否定事例を十分に集めたあとに、結論すべきなのである。（Bacon [1620]2018: 53 = 1978: 163-4, 強調点は引用者）

ベーコンは精練された帰納法を「自然哲学」だけではなく、「論理学」・「倫理学」・「政治学」などの科学（sciences）にも適用できるとしている。なぜなら、わたしたちは怒りや恐れ、羞恥心や政治的事例について記録するとともにその発見表を作成できるし、それは寒熱や光、植物の生育などに劣らず、記憶や気質、分類や判断などの心の働きについても同様だからである（Bacon [1620]2018: 65-6 = 1978: 191）。

なお科学の方法としての「帰納法」の位置づけについては、後にポパー（K. Popper, 1902-94）が提起した問題について触れておくべきであろう。周知の通り、ポパーは実験と観察から法則を導くことが科学の方法であるとする立場を批判し、「反証可能性」を科学的方法の規準とすべきであると主張したが、ポパーは前者の典型としてベーコンの名前を挙げている（13）。ただ上で引用した部分の論述を見る限り、ベーコンは単純枚挙法に依拠する帰納法を子供じみたものであると批判し、科学の方法として有用な帰納法にとって必要なのは適切な排除であると述べている。それゆえ、ベーコンについての理解という点では、ポパーの議論には再考の余地があるように思われる（14）。

3-3. ホブズ：「人間本性論」と「科学」の分類表

人間科学の歴史において、ホブズ（Th. Hobbes, 1588-1679）は「人間的なもの」に関する議論の観点を、「人間性」（humanity）から「人間本性」（human nature）へと転換させた人物であると言える。「ルネサンス・ヒューマニズム」を受け継ぐ「人文主義者」であるとともに「機械論的唯物論者」であったホブズは、神と人間の身体を含むすべてが物体に還元されるとする徹底的な唯物論に基づく「人間本性論」を展開した。筆者は、ホブズの「人間本性論」がおおむね100年後のヒュームの『人間本性論』と、そこで構想が示された「人間の科学」に引き継がれたと考える（15）。そしてさらにホブズの「人間機械論」は、現

代の人間科学の人間像にもつながるものである。

ホブズは1620年頃から26年頃までベーコンの秘書としてときおり働き、『随筆集』のラテン語訳を手伝い、口述筆記をしていた(16)。オックスフォード大学卒業後、イングランドの名門貴族キャベンディッシュ家に仕えたホブズは、その子息ウィリアムの家庭教師兼友人として、当時のイングランドの重要人物や国王にたびたび会う機会を得ていた(17)。ウィリアムが1614年時点でダービシャー代表の下院議員であったことを考えれば、1613年にはすでに法務長官の地位にあったベーコンとホブズは、1620年以前から面識があったと推察される(梅田 2005: 42)。ベーコンとホブズの交流は、ベーコンの侍医を長年務めていたハーヴィとの親交に繋がったが、ハーヴィの『動物の心臓ならびに血液の運動に関する解剖学的研究』(1628)に象徴される新しい生理学はホブズの「人間機械論」に大きな影響を与えている。

(1) ルネサンス・ヒューマニズムと機械論的唯物論

ホブズは1629年に最初の著作となる『ペロポネソス戦史』の英語訳を出版したが、晩年にも『オデッセイア』全巻(1675)、『イリアス』(1676)の翻訳を行っている。かれはルネサンス・ヒューマニズムから多大な影響を受け、それによって培われた知識は当時のスコラ哲学者・神学者たちを圧倒するものであった。

その一方でホブズは、エピクロス(Epicurus, 前341-270)の哲学を継承したガッサンディ(P. Gassendi, 1592-1655)の「機械論的唯物論」に基づいた「人間本性論」を展開した。『リヴァイアサン』(1651)の序論でホブズは、人間の身体と機械を対比し、技術によって創造される国家を「人工人間」(Artificial Man: *Homo artificialis*)として捉えることができると述べている。そこで示された理解にすれば、「生命」は四肢の「運動」(motion; *motus*)であり、すべての自動機械は人工の生命をもっていると思定できる(Hobbes 1651: 16-7 = 1954: 37)。

(2) 人間の因果的思考習性と情念としての意志

「機械論的唯物論」に基づくホブズの「人間本性論」の画期的な特徴は、論敵であったデカルト(R. Descartes, 1596-1650)とは異なり、人間の心も物で

ある身体の一部(脳)の運動である、という認識を示した点にある。周知の通り、「心身二元論」に立つデカルトは人間の身体は物であるが、心は物ではないと主張した。デカルトは、動物は機械と同様、心をもたず、痛みを感じることもないと考えたが、ホブズは、動物は人間と同様、知性と意志・情念をもつと主張した。ホブズによれば、人間と動物は共に理性的意志ではなく、情念としての意志によって従って行動する存在である。ホブズは『リヴァイアサン』において、人間の知性(理解)に関するスコラ哲学の見解を批判し、次のように述べている。

人間(あるいは想像する能力をもつ他のどんな被造物でも)のなかに、言語あるいは他の意志にもとづく印によって起こる想像は、われわれが一般に知性(Understanding; *Intellectus*)と呼ぶものであり、それは人間と獣(Beast; *Bestia*)に共通である。すなわち、犬は習慣によって、その主人の呼び声や叱声を理解するだろうし、他の多くの獣もまたそうである。人間に固有の理解はかれの意志だけではなく、かれの概念や思考を、ものごとの名前を肯定と否定およびその他の言葉のかたちで理解することである。(Hobbes [1651]2012(2): 36-7 = 1954: 55-6)

このようにホブズは、「知性(理解)」を人間と人間以外の動物(獣)にも共通の能力とする一方で、「言葉による理解」が人間に固有のものであるとしている。この考えは「社会契約」を論ずるさいに、「獣は言葉を理解しないから、獣と信約(Covenant; *Pactum*)を結ぶことはできない」(Hobbes [1651]2012(2): 210-1 = 1954: 228)とする主張につながる。

ホブズはまた人間の「知性(理解)」について「因果的思考習性」を重視し、『法の原理』(1640)において「人間は以前見たことのあるものを現在において見ると、以前見たものに先行していたものが、現在見ているものにも先行していると考ええる。たとえば、火事のあとに灰が残っているのを見たことがある人は、ふたたび灰を見ると火事があったと結論する」(Hobbes

[1640]1969: 15 = 2016: 44, 強調点は引用者)と述べている。このようにホブズは、人間が本来的に因果的思考習性をもつことを強調したが、3-4. で見るヒュームもまた同様であり、『人間本性論』にはよく似た論述がある(18)。

(3) 科学の定義と分類表

ホブズは『リヴァイアサン』第5章で「科学」(Science; *Scientia*)を「諸帰結とひとつの事実の他の事実への依存についての知識(Knowledge; *Cognitio*)である」(Hobbes [1651]2012(2): 72-3 = 1954: 91-2)と定義している。これに続きホブズが強調しているのは、ある物事の原因を解明することは将来的に望ましい結果を得るために有用であるという点であり、ペーコンと同様、ホブズにおいても「科学」は「技術知」として理解されていたと言える。

ホブズは『リヴァイアサン』第9章で、「知識」を「事実についての知識」と「ひとつの断定の他の断定への帰結についての知識」に分けて説明している。前者は感覚と記憶以外の何ものでもない「絶対的な知識」、後者は「科学」と呼ばれるもので条件的であり、3-4. で見るヒュームが言う「推論」(reasoning)と同様の意味である(Hobbes [1651]2012(2): 125-5 = 1954: 146)。

ホブズはこの後詳細な「科学の分類表」(図2.を参照)を示しているが、その表題は「科学、すなわち諸帰結についての知識、それは哲学とも呼ばれる」とされている。ホブズにおいて「哲学」と「科学」は明確には区別されておらず、類似の意味をもつものであったと言える。

3-4. ヒューム：「人間の科学」の構想

ヒューム(D. Hume, 1711-76)は、28歳で出版した最初の著作『人間本性論』(1739-40)において「人間の科学」の構想を提示した。ヒュームが考える「人間の科学」とは、人間の知性と情念(感情)の自然本性を解明し、超越的な存在(神)には依拠しない道徳と社会形成のあり方を提示するものである。フーコーはカントの人間学(Anthropologie)を念頭に置きながら、近代の人間科学の特徴を人間が客体であると同時に主体でもあることに見たが、ヒュームの言う「人間

の科学」はすでにその特徴を兼ね備えるとともに、人間がさまざまな感情(情念)をもつ存在であることを踏まえ、道徳と正義、社会秩序の問題を考察している。それゆえ、ヒュームの『人間本性論』ではすでに、フーコーの言う意味での「人間」が誕生していると見ることができる。

『人間本性論』は「知性論」、「情念論」、「道徳論」の3巻からなり、そこで展開された「因果性」、「蓋然性(確率)」、「人格の同一性」、「動物の知性と情念(共感)」、「人格と間主観的世界の構成」、「道徳感覚と正義」などに関する議論は、後代の哲学と人間科学にもきわめて大きな影響を与えた。ここでそのすべてを論ずることはできないので、いくつかの項目の要点のみを述べたい。

(1) 論理学・道徳学・批評学・政治学：「人間の科学」を構成するもの

先述した通り17世紀は科学革命の世紀であり、自然の物理的作用に関する理解は飛躍的な進歩を遂げていた。それに対して「道徳哲学者」たちは、18世紀になってもそれらに匹敵するような成果を上げることはできなかった。ただヒュームは、それでもなお「人間の科学」のほうが優位にあると信じていた。なぜなら、「科学」とは人間そのものに深く関わるものであるという意味において、すべて「人間の科学」だからである。ヒュームは『人間本性論』の序論で次のように述べている。

あきらかにすべての科学(all the sciences)は多かれ少なかれ人間本性(human nature)に関係があり、たとえそれらのうちには人間本性から、はるかに遠く離れ去っているようにみえるものがあるとしても、すべての科学はやはりいずれかの道筋をたどって人間本性にたちもどる。数学や自然哲学、自然宗教ですら、ある程度まで人間の科学(science of man)に依存する。なぜなら、それらの科学は人間の認識力に依存し、人間の能力と機能によって真偽を判定されるからである。(Hume [1739-40]2000: 4 = [1995]2011(1): 6-7)

ヒュームによれば、数学、自然哲学、自然宗教よりも

「人間本性（人間的自然）」にさらに密接に関わる論理学（Logic）、道徳学（Morals）、批評学（Criticism）、政治学（Politics）の4つの「科学」（sciences）には、われわれにとって知る価値のある事柄、人間の精神を高めること、あるいは飾ることに寄与しうる事柄のほとんどすべてが含まれている。それゆえ、われわれが哲学的探究において成功を収めようとするならば、「科学」（sciences）の中心である「人間本性」そのものに眼を向けるべきなのである（Hume [1739-40]2000: 4 = [1995]2011(1): 7）。

（2）ニュートンからの影響とアインシュタインへの影響

ヒュームは1723年2月、11歳10ヶ月でスコットランドのエディンバラ大学に入学登録したが、当時エディンバラ大学では、ニュートン理論の継承者であることを自認する数学者マクローリン（C. Maclaurin, 1698-1746）をはじめとする「ニュートン主義」の諸教授が講義を行っていた（渡部 1985: 30; 長尾 2001: 18-23）。ヒュームは「モラル・サイエンス」におけるニュートンとなることを標榜し、『人間本性論』においても、人間がいだく観念のあいだの関係を「引力」（attraction）になぞらえて説明している（Hume [1739-40]2000: 14 = [1995]2011(1): 24）。

ただその一方でヒュームは、ニュートン物理学においても物体の位置関係の本性は知られていないとし、自然哲学においても、人間の認識能力の限界を正しく理解すること、ならびに「適度の懐疑」が認められなければならないと述べている（Hume [1739-40]2000: 47 = [1995]2011(1): 82）。

「空間と時間の観念は対象から分離され独立した観念ではない」とするヒュームの洞察はマッハ（E. Mach, 1838-1916）に受け継がれ、物理学における「絶対空間・絶対時間の観念」の否定へとつながった。「実験心理学」におけるさまざまな実験から人間の「感覚」を分析し、「心理学」と「物理学」を統合する理論を構築しようとしたマッハの試みは、ヒュームの主張の延長線上にある。アインシュタイン（A. Einstein, 1879-1955）は『自伝』において、「特殊相対性理論」の確立にいたるまでの過程で、ヒュームとマッハの議論から重要な示唆を受けたと述べている（19）。

（3）因果分析と蓋然性（確率）論

ヒュームが「神の存在証明」との関連において提起した「因果性への懐疑」は、カントをはじめ多くの論者に衝撃を与え、さまざまな解釈が行われてきた。ただヒュームが異議を唱えたのは、実在における因果関係の成立を正当なものとして論理的に示しようという議論であり、かれは因果関係が成立しないとは述べていない。むしろヒュームは、因果関係は自然と人間の本性を解明する鍵となるものであると考えていた。かれの考察の目的は、人間がある対象を認識するとき、「想像力」（imagination）によってそれを因果関係の枠組みのなかにおくという「心の習性（習慣）」、ならびに、印象から観念、そして信念（信仰）へとつながる心のメカニズムの解明にあったと言える。ヒュームはホップズと同様、人間が熟を感じたとき、過去の経験に基づき想像力によってその原因が炎にあると「推理する」（infer）ということを「人間本性」と捉え、その解明を「人間の科学」の重要課題のひとつとしたのである（20）。

ヒュームの「因果分析」の妥当性に関する議論については、その後、多くの論者によってさまざまな解釈が行われてきたが、「人間科学の方法論」という点で重要なのは、「帰納推論」（inductive reasoning）とヒュームの因果分析との関連であろう。ポパーをはじめ多くの論者は、科学の方法としての「帰納法」（induction）の妥当性をめぐる議論において、ヒュームにも言及している。ポパーによれば、ヒュームはわたしたちがかつて経験した事例からまだ経験していない他の事例を推論することを正当化されているかという論理的問題を提出したうえで、反復の数がどれほど多かったとしてもそれは正当化できない、と結論したとされる（Popper 1972: 4 = 1974: 6）。

ヒュームの因果分析が帰納の問題と結びつくのは、かれが事実に関する推論はすべて因果関係に基づくとしていることによる。これによってヒュームの因果性についての懐疑的分析と呼ばれるものは、演繹的でない推論のすべてについて疑念を呈するものとされるのである。ただここで留意すべきなのは、ヒュームが「帰納」という言葉をほとんど用いていない点である（神野 [1984]1998: 258）。『人間本性論』におけるヒュー

ームの主な目的は、人間本性から導かれる人間の行動様式を描くことにあり、その際には「蓋然性（確率）」の概念が極めて重要な意味をもつものであるように思われる（21）。

（4）情念（感情）と道徳

「理性は情念の奴隷である」というヒュームの言葉は良く知られている。ヒュームはプラトンやアリストテレスらの古代哲学者から、スコラ学派、デカルトに至るまでの西欧哲学者たちが、「理性によって情念を制御する」という観点から「道徳」を論じたことを誤りであると断言した。ヒュームによれば、理性だけでは意志のどんな働きの動機となることもできないし、理性は意志に指示するという点において情念と対立することは絶対でありえない（Hume [1739-40]2000: 265-8 = 2011(2): 160-6）。

ヒュームはホップズと同様、「情念」を人間の行動を導く根源的存在であると理解した。ヒュームがホップズと異なるのは、人間本性としての「利己心」の優位性を認めながらも、人間は「共感」（情念の受容とコミュニケーション）する能力を併せもつことを主張した点である。ヒュームは「誇り」と「卑下」、「愛」と「憎しみ」などの具体的な感情（間接情念）と「人格」の生成、社会的（間主観的）世界の構成について論じているが、その考察は後の社会学を先取りするものであった。

（5）動物の理性と情念（共感）

ヒュームの「動物論」はこれまであまり取り上げられていない（22）。しかし、ヒュームは『人間本性論』の「知性論」と「情念論」、ならびに『人間知性研究』において、「動物の理性」、「動物の情念」という独立の節を設け、人間と人間以外の動物を比較し「人間本性」に関する洞察を深めようと試みている。先に見たホップズは、人間と同様に動物（獣）もまた「知性」と「情念としての意志」をもつとしたが、ヒュームはさらに動物の「理性」と「共感」について考察している。

ヒュームは『人間本性論』第1巻「知性論」第3部第16節「動物の理性について」のなかで、動物の外的行為はわたしたち人間の外的行為に類似しているから、動物の内的行為（心的作用）もまたわたしたちの

内的な行為に類似していると判断できるとし、さらに犬の行動についての観察から次のように述べている。

犬が現前している印象から引き出す推理（inference）は、経験にすなわち過去の事例における対象の随伴の観察に基づいている。この経験を変えてやれば、犬は推論（reasoning）を変える。しばらくはある身振りまたは運動に続いて犬を叩き、後には別の身振りまたは運動に続いて犬を叩くようにしてみよ。犬は、もっとも最近の経験に応じて、異なる結論を順次引き出すであろう。（Hume [1739-40]2000: 119 = [1995]2011(1): 208, 強調点は引用者）

このようにヒュームは、犬もまた人間と同様に、かれの経験に基づき「推理」と「推論」を行っている論じている（推理と推論の違いについては注21を参照されたい）。

そしてさらにヒュームはホップズと同様に、自らの「情念論」（『人間本性論』第2巻第1部第12節）において、「動物」の誇りと卑下に関連して次のように述べている。

解剖学者にとっては、人間の身体に関する自分たちの観察や実験を、動物に関する観察や実験とつき合わせて、それらの実験（経験的事実）が合致することから、何か特定の仮説にたいして証拠を追加するのはごく普通のことである。実際、獣類の〔身体の〕諸部分の構造が人間のそれと同じであり、これらの部分の作用もまた同じである場合には、その作用の原因が異なることはあり得ないということ、すなわち、一方の種について真であるとわれわれが見いだしたことはすべて、他方についても確実だと躊躇なく結論できるのは確かである。（Hume [1739-40]2000: 211 = 2011(2): 61）

3-1. で見たようにルネサンス期以降、「解剖学」は目覚ましい発展を遂げたが、ヒュームはその知見に基づき、動物もまた人間と同様、理性と感情をもち、共感する能力を兼ね備えているはずだと考えていたと

思われる。

3-5. カント：自然研究と人間学

カント (I. Kant, 1724-1804) は『プロレゴメナ』(1783)において、「ヒュームの警告こそが、十数年前にはじめてわたしの独断のまどろみを破り、思弁的哲学の分野におけるわたしの研究に全く別の方向を与えた」(Kant [1783]2001: 9 = 1977: 19-20) と述べている。カントは、理性によっては「原因と結果のあいだの必然的結合」を明らかにすることはできないとするヒュームの議論から大きな衝撃を受け、『純粹理性批判』(1781)を執筆した。ヒュームの『人間本性論』第1巻「知性論」ならびに『人間知性研究』(1748)とカントの『純粹理性批判』を対照すれば、カントがヒュームの議論を詳細に検討していることがわかる。

一般にカントにたいするヒュームの影響が語られるのは『純粹理性批判』に関してであるが、ここで検討を加える『実用的見地における人間学』(1798; 以下『人間学』と略記)においても、カントはヒュームを念頭に置きながら議論を展開していると考えられる (23)。

(1) 前批判期の自然研究：ニュートンからの影響

カントは1746年、出生地であるケーニヒスベルク大学を卒業したが、卒業論文は『活力の真の測定についての考察』であり、1749年に出版され最初の著作となった。この論文は、「力の測定」をめぐる当時激しく争われていたデカルト派とライブニッツ派の論争にたいして、調停的解決を試みたものであった。1755年カントは母校の私講師となったが、初年度の担当科目は「論理学」、「形而上学」、「数学」であり、翌年の夏学期からは「自然学」、「自然地理学」、冬学期からは「倫理学」が加わった。

カントの自然研究は文献の渉猟と読解に基づくものであるが、その研究に大きな影響を与えたのはニュートンであった。前批判期の諸著作のなかで最も重要なものと言われている『天界の一般自然史と理論』(1755)の副題は「ニュートンの原理にしたがって宇宙全体の構造と機械的起源を論じる試み」であり、カントはこの著作でニュートンの宇宙論に依拠しながら、機械論的宇宙論を展開している。

(2) 「自然地理学」と「人間学」：フーコー『カント

の人間学』について

(1) で見た通り、カントは1756年の夏学期から「自然地理学」の講義を始め、1802年に『自然地理学』を出版した。また「人間学」の講義は1772-3年の冬学期から始められ、『人間学』が出版されたのは1798年である (24)。自然研究から始まったカントの研究活動は1770年ごろヒュームの影響によって大きく転換し、1780年代の3つの批判書を生んだが、大学における「自然地理学」と「人間学」の講義は、その時期を通じて続けられていた。

前批判期から批判期において出版された著作群とは異なり、『人間学』と『自然地理学』の2つの著作は、カントが長年続けた講義をまとめたものであり、フーコーに倣って言えば、『人間学』のテキストには様々な思考の地層が堆積している。フーコーは、カントにはすでに1772年から『純粹理性批判』の根底にある特定の具体的な人間像が存在し続けていて、その人間像は批判期を経ても変わらなかった可能性があるとして述べている (Foucault [1964]2008: 12 = 2010: 16)。カントがヒュームの議論から大きな衝撃を受けたと告白している時期と「人間学」の講義を始めた時期が重なることから、『人間学』もやはりヒュームからの影響を受けていると見ることができるように思われる。

(3) 『人間学』の検討項目：自己意識の始まりから人類の特質まで

『人間学』は、第1部「人間学的な教訓論：人間の内面と外面を認識する方法について」と第2部「人間学的な性格論：人間の内面を外面から認識する方法について」の2部構成をとっている。第1部では、第1編「認識能力について」において「自己意識」、「人格」、「想像力」などを論じ、第2編で「快と不快の感情」、第3編で「欲求能力」を論じている。第2部では、「個人の性格」、「男女の性格」、「国民性」、「人種の性格」、「人類の性格」について考察している。

実用的見地におけるという言葉が添えられた『人間学』は、カントがおよそ25年にわたって続けた「人間学」の講義の内容をまとめたものであり、幅広い層の聴講者の共感を得るためであろう、具体的な事例を挙げながら、人間の特質が述べられている。たとえば「女性は結婚によって自由になり、男性は自由を失

う」(Kant [1798]2000 : 241 = [2003]2017 : 292) といった言葉は、聴講者の関心を引くものであったに違いない。カントの「女性論」は偏見に満ちたものであるが、生涯独身であったカント自身の人生と当時の時代背景について考えるうえでも重要な意味をもつと思われる(25)。

カントは第1編において、まず人間存在の固有性を「自己意識」に見て、次のように述べている。

人間が自分というものを表象 (Vorstellung) することができるということ、このことが地球上の他のあらゆる生物を凌駕して人間を無限に高めるのである。これによってこそ人間はひとりの人格 (Person) であり、外からどんな変化が及んでこようと意識を統一していることで人間は変わることのない同一の人格であって、人間が好き勝手にあつかい管理することができる理性の欠けた獣のようなものから、等級と価値からいって完全に区別された生物なのである。(Kant [1798]2000: 9 = [2003]2017: 23)

カントはこれに続けて、幼児が一人称でしゃべりはじめたときにはすでに「知性 (理解)」(Verstand) (26) によって、自分というものを考えているはずだと述べている。

以上のようなカントの認識が、ホップズとヒュームのものとは決定的に異なるものであることは明らかである。先に見た通り、ホップズとヒュームは、知性・理性と情念 (感情) との関係について検討を加え、理性ではなく情念 (感情)こそが人間の行動を導くと主張した。カントもまた理性と感情との関係を論じているが、それを「知性」と「感性」(Sinnlichkeit) との関係と捉え、知性を「上位の認識能力」、感性を「下位の認識能力」であるとしている (Kant [1798]2000: 26-7 = [2003]2017: 43)。それゆえ、カントにおいてはやはり知性 (理性)こそが人間の行為を導くべきものであると考えられていることがわかる。

ただその一方でカントは、注においてライブニッツ = ヴォルフ派を批判し、認識が生ずるさいに感性は重要な役割を果たすとも述べている。カントは感性を

「感覚」(Sinn) と「想像力」(Einbildungskraft) に分け、感覚を対象が現存しているときの直観の能力、想像力を対象が現存していないときにも働く直観の能力であるとし、感覚には外的な感覚と内的な感覚 (*sensus internus*) があると述べている (Kant [1798]2000: 42-3 = [2003]2017: 62)。人間に固有の能力として「想像力」を重視することは、ホップズとヒュームにも見られる共通の特徴である。

カントは『人間学』を人類 (Menschengattung) の特徴に関する考察で締めくくっている。カントによれば、人間 (Menschen) は「技術的」・「実用的」・「道徳的」という3つの資質によって他の動物から区別される (Kant [1798]2000 : 258 = 2003 : 313)。カントはここで、ルソー (J.-J. Rousseau, 1712-78) の『人間不平等起源論』(1755) における議論に依拠しながら、人類の特徴を論じている。また本稿におけるこれまでの考察との関連から重要であるのは、カントがパドゥア大学の「解剖学者」モスカティ (P. Moscati, 1740-1824) やリンネ (C.v.Linné, 1707-78) について触れながら、議論を展開している点である。リンネは類人猿と人間との類似性を主張したが、18世紀においてもすでに生物の変容を進化論的に捉えようとする理解は存在しており、カントもまたリンネの「自然の考古学」(Archäologie der Nature) に依拠した見解を示している (Kant [1798]2000 : 259 = 2003 : 314-5)。

(6) ヒュームとカントにおける「人間の科学」と「人間学」の位置づけ

周知の通り、カントは哲学の根本的な問いを、「わたしは何を知ることができるか」(認識論的問題)、「わたしは何をなすべきか」(道徳的問題)、「わたしは何を望んでよいか」(宗教的問題)、「わたしは何であるか」(人間学的問題) という4つの問いであるとしたうえで、根本的にはこれらすべての問いは「人間学」に集約されるとした。それゆえカントの言う「人間学」は、ヒュームの「人間の科学」と同様、全体を総合する学問として想定されている。

ヒュームは『人間本性論』において、論理学、道徳学、批評学、政治学からなる「人間の科学」の構想を示したが、『人間本性論』以後の著作はその構想にしたがって書かれたものだと見ることができる。自信作

であったにもかかわらず、世間からは無視された『人間本性論』に比べ、ヒュームのその後の諸著作、『道徳・政治論集』（1741-2）、『人間知性研究』（1748）、『道徳原理研究』（1751）、『道徳・政治・文学論集』（1758）は好評を得て、フランスやドイツにおいても読まれることとなった。

カントは『人間学』において、ヒュームの『道徳・政治・文学論集』におけるいくつかの論述に言及しながら議論を展開しているが、人間を詳細に観察し、その自然本性を明らかにすることを目的とする点において、ヒュームの「人間の科学」とカントの「人間学」は共通の意図をもつものであると言える（27）。

【注】

(1) わが国の先行研究としては、徳永恂（1989）、奥谷浩一（1997）、田畑稔（2004）があり、本論はこの3者の研究に多くを負っている。なお筆者は（長谷川2006）において、社会科学との比較の観点から、人間科学の歴史についての検討を試みたが、「人文学」から「人間の科学」・「人間学」、そして「人間科学」への変容という認識をもってはなかった。

(2) この点については、Gutting（1989: 175-9 = 1992: 267-74）、ならびに中山元（2010: 176-80）を参照されたい。

(3) 戦後の日本における「人間科学」という言葉の曖昧さについての検討は、文献と組織（学部）に関して行われるべきものである。この点については、長谷川（2010）を参照されたい。

(4) 翻訳語としての「科学」については、次の文献を参照した。飛田良文（[2002]2019: 226-36）、野家啓一（2008: 36-8）、中山茂（2013: 280-6）。「科学」が“sciences”の翻訳語であるという理解は、野家（2008: 36-8）によるものである。

(5) これに対して、クーン（Th. Kuhn, 1922-96）のパラダイム論で言われる「科学革命」は、“science revolutions”と小文字の複数表記である。この点については、Kuhn（[1962]2012 = 1971）を参照されたい。

(6) この点については、Kuhn（1977: 147 = [1998]2018: 183-4）、佐々木力（[1985]1995: 328-34）、古川安（2018: 129）を参照されたい。

(7) カントはケーニヒスベルク大学哲学部の教授であ

ったが、2度（1886/8）学長を務めている。カントは哲学部において「自然地理学」、「数学」、「倫理学」などの多様な講義を担当していたが、他の諸学部に対する哲学部の意義を説いている。

(8) この点については、村上陽一郎（1994: 34-40）、ならびに古川（2018: 174-6）を参照した。

(9) カーナン（1997 = 2001）については、邦訳のみ参照した。

(10) ここでの論述に関しては、池上俊一監修（2017）を参照した。

(11) ロンドン王立協会は、1662年に国王チャールズ2世の勅許を受けて「自然についての知識を改良するためのロンドン王立協会」という正式名称で発足した。王立とはいえ、会の財政はほとんど会員の会費だけで賄われた私立の学会であった（古川2018: 79）

(12) ベーコンはケンブリッジ大学卒業後、法律を学び1582年に下級法廷弁護士となり、1584年には議員となって政界における活動を始めた。1603年にエリザベス女王が逝去し、スコットランド王ジェームズ6世がイングランド王ジェームズ1世として即位すると、ベーコンは国王の物心両面の支持を得るために1605年に『学問の進歩』を英語で書いたのである。その後ベーコンは、1612年に特許裁判所の判事、1613年には法務長官、1618年には大法官となっている。ベーコンの執筆活動はこのような多忙な公務の合間を縫って行われたものであるが、かれの「学問（科学）論」には法律家・政治家としての一面が色濃く表れている。ベーコンの経歴については、（伊藤2007: 630-40）を参照した。

(13) ポパーによれば、「ベーコンの神話」とは、観察を科学的知識の真の源泉とすることによって、科学的叙述の真理性を説明する機能をもっていると信じることである（Popper [1963]2002: 186 = [1980]2014: 224-5）。

(14) この点については、植木哲也（1993: 283-92）を参照した。

(15) この点については、Russel（1985）および長谷川（2021）を参照されたい。

(16) この点については、（梅田2005: 43）ならびに（伊豆蔵2007: 51）参照した。

(17) この点については、梅田百合香（2005: 41-54）、

伊豆蔵好美 (2007: 61-74) を参照した。

(18) ヒュームは次のように述べている。「たとえば、わたしたちは炎と呼ぶ種類の対象を見たこと、そしてわたしたちが熱とよぶ種類の感覚を感じたことを覚えている。わたしたちはまた、これら2種類の対象が過去のすべての事例において恒常的に随伴していたことをも覚えている。わたしたちは、それ以上の手続きを何ら要さずに、一方を原因、他方を結果と呼び、一方の存在から他方の存在を推理する (infer) ののである」(Hume [1739-40]2000: 61 = [1995]2011(1): 109)。

(19) これらの点については、(Mach[1906]1923 = [2002]2008: 3-4)、(Einstein 1979:12-3, 18-21)、(廣松渉 [2002]2008:136-7)、(松井彰彦 2007: 112-3) を参照した。なお、マッハについては邦訳のみ参照した。

(20) ヒュームの議論において、推理 (inference) と推論 (reasoning) の区別は重要な意味をもっている。推理とは、炎 (原因) が熱 (結果) を伴うことを見いだすということであり、推論とは、外見上類似する他の対象が類似する結果を伴うことを予測するということである (Hume [1748]2000: 32 = [2004]2020: 31)。

(21) この点については、萬屋博喜 (2018: 37-70) を参照されたい。

(22) 西欧思想における「動物の心 (魂)」に関する考え方の変遷を論じたもの文献としては金森修 (2012) があるが、ヒュームの動物論はとりあげられていない。

(23) カントは「男女の性格」や「国民性」についての考察のなかで、ヒュームの議論に言及している。

(24) カント自身は『人間学』の注において、「人間学」(冬学期) と「自然地理学」(夏学期) の2つの講義を30年以上にわたって担当してきたと述べている (Kant [1798]2000: 6 = [2003]2017: 15)。

(25) この点については、中島義道 (1998: 191-219) を参照されたい。

(26) 従来わが国では、カント哲学の基本概念である“Verstand”に「語性」という訳語があてられてきた。しかし、独語の“Verstand”と英語の“understanding”の意味はともに「理解すること」であり、語源はラテン語の“intellectus”である。それゆえ本論ではホップズとヒュームの“understanding”と同様に、「知性」という言葉をあてることにする。この点については、

『カントの人間学』の邦訳者王子賢太によるカントの基本用語解説を参照した。

(27) この点については、高田純 (2012: 109-25) を参照した。

【文献】

Bacon, F., [1605]1895-8, *The Advancement of Learning, Book I · II*, ed. F. G. Selby, New York: Macmillan and Co. (服部・多田訳, 1974, 『学問の進歩』岩波書店。)

———, [1620]2018, *Novum Organum: Or True Suggestions for the Interpretation of Nature*, C. Janarthanan. (林寿一訳, 1978, 『ノブム・オルガスム』岩波書店。)

Butterfield, H., [1949]1957, *The Origins of Modern Science: 1300-1800*, London: G. Bedill & Sons Ltd. (渡辺正雄訳, 1978, 『近代科学の誕生』(上)(下) 講談社。)

Einstein, A., 1979, *Autobiographical Notes*, ed. P. Schilpp, Open Court.

古川安, 2018, 『科学の社会史——ルネサンスから20世紀まで』筑摩書房。

Gutting, G., 1989, *Michel Foucault's archaeology of scientific reason*, New York: Cambridge University Press. (成定・金森・大谷訳, 1992, 『理性の考古学——フーコーと科学思想史』産業図書。花田圭介編, 1993, 『フランシス・ベイコン研究』御茶の水書房。

長谷川幸一, 2006, 『人間諸科学の形成と制度化——社会諸科学との比較研究』東信堂。

———, 2010, 「総合人間科学学会設立記念講演録: 総合人間科学学会のミッションに関する私見」常磐大学人間科学部紀要『人間科学』27(2): 29-45。

———, 2021, 「ヒューマニズムと人間の科学 (2) —— 2つの人間本性論: ホップズとヒューム①」常磐大学人間科学部紀要『人間科学』38(2), 17-34。

Henry, J., [1997]2008, *The Scientific Revolution and the Origins of Modern Science, 3ed.*, Palgrave Macmillan. (東慎一郎訳, 2005, 『十七世紀科学革命』岩波書店。)

- 廣松渉, [2002]2008, 「マッハの哲学と相対性理論—ニュートン物理学に対する批判に即して」『認識の分析』（記者解説）法政大学出版局, 136-73頁.
- Hobbes, Th., [1640]1969, *The Elements of Law, Natural and Politic*, ed. Friedrich Tönnies, Frank Cass. (田中・重森・新井訳, 2016, 『法の原理』岩波書店.)
- , [1651]2012, *Leviathan*, ed. N. Malcolm, Oxford University Press. (水田洋訳, 1954-1985, 『リヴァイアサン』(1)~(4)岩波書店.)
- Horkheimer, M./Adorno, Th., [1947]2020, *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*, Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch. (徳永恂訳, 2007, 『啓蒙の弁証法—哲学的断層』岩波書店.)
- Hume, D., [1739-40]2000, *A Treatise of Human Nature*, ed. D. F. Norton/M. J. Norton, Oxford University Press. (木曾好能他訳, 2011-2, 『人間本性論』[第1巻~第3巻]法政大学出版局.)
- , [1748]2000, *An Enquiry Concerning Human Understanding*, A Critical Edition, ed. T.L. Beauchamp, Oxford University Press. (神野・中才訳, 2018, 『人間知性研究』京都大学学術出版会.)
- 伊藤博明, 2011, 「フランシス・ベーコン」『哲学の歴史4』中央公論新社.
- 伊豆蔵好美, 2007, 「ホッブズ」小林道夫編『哲学の歴史5』中央公論新社.
- 神野慧一郎, [1984]1998, 『ヒューム研究』ミネルヴァ書房.
- 金森修, 2012, 『動物に魂はあるのか』中央公論新社.
- Kant, I., [1783]2001, *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können*, hrs. K. Pollok, Hamburg: Felix Meiner Verlag. (篠田英雄訳, 1977, 『プロレゴメナ』岩波書店.)
- , [1798]2000, *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*, Hamburg: Felix Meiner Verlag. (渋谷治美訳, [2003]2017, 『実用的見地における人間学』岩波書店.)
- Kernan, A., ed., 1997, *What's Happened to the Humanities ?*, Princeton University Press. (木村武史訳, 2001, 『人文科学に何が起きたか—アメリカの経験』玉川大学出版部.)
- Kuhn, Th., [1962]2012, *The Structure of Scientific Revolutions*, Chicago and London: The University of Chicago Press. (中山茂訳, 1971, 『科学革命の構造』みすず書房.)
- , 1977, *The Essential Tension: Selected Studies in Scientific Tradition and Change*, Chicago and London: The University of Chicago Press. (安孫子・佐野訳, [1998]2018, 『科学革命における本質的緊張』みすず書房.)
- Mach, E., [1906]1923, *Über den Zusammenhang zwischen Physik und Psychologie, Populär-wissenschaftliche Vorlesungen, 5. Aufl.* (廣松渉訳, 2008, 『認識の分析』法政大学出版局, 3-27頁.)
- 松井彰彦, 2007, 「人間の科学としての経済学」東京大学編『学問の扉』講談社, 108-20.
- 村上陽一郎, 1994, 『科学者とは何か』新潮社.
- 長尾伸一, 2001, 『ニュートン主義とスコットランド啓蒙—不完全な機械の喩』名古屋大学出版会.
- 中山元, 2010, 『フーコー思考の考古学』新曜社.
- 中山茂, [1974]2013, 『パラダイムと科学革命の構造』講談社.
- 野家啓一, 2008, 『パラダイム革命—クーンの科学史革命』講談社.
- 奥谷浩一, 1997, 「人間科学の系譜と方法の問題」札幌学院大学『人文学会紀要』60:71-91.
- Popper, K., [1963]2002, *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge*, London and New York: Routledge. (藤本・石垣・森訳, [1980]2014, 『推測と反駁—科学的知識の発展』法政大学出版局.)
- , 1972, *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, Oxford: Clarendon Press. (森博訳, 1974, 『客観的知識—進化論的アプローチ』木鐸社.)
- Russell, P., 1985, *Hume's Treatise and Hobbes's the*

- Elements of Law, in; *Journal of the History of Ideas*, Vol.46, No.1 (Jan. - Mar.) :51-63.
- 佐々木力, [1985]1995, 『科学革命の歴史構造 (上) (下)』講談社.
- 田畑稔, 2004, 「人間科学の概念史のために」『大阪経大論集』 54(5): 99-129.
- 高田純, 2012, 『カント実践哲学とイギリス道徳哲学——カント・ヒューム・スミス』 粹出版社.
- 徳永恂, 1989, 「人間科学とは何だろうか」『大阪大学人間科学部紀要』 15: 1-15.
- 植木哲也, 1993, 「帰納法のベーコンとベーコンの帰納法——現代科学哲学におけるベーコン像」花田編『フランシス・ベーコン研究』 御茶の水書房.
- 梅田百合香, 2005, 『ホッブズ——政治と宗教』 名古屋大学出版会.
- 渡部峻明, 1985, 『ヒューム社会哲学の構造』 新評論.
- 萬屋博喜, 2018, 『ヒューム——因果と自然』 勁草書房.

「フェイクニュース」とメディア・リテラシー教育に関する研究の概観

石川 勝博 (常磐大学人間科学部)

A Review of Research on “Fake News” and Media Literacy Education

Masahiro ISHIKAWA (*Faculty of Human Sciences, Tokiwa University*)

Abstract

Recently, the spread of fake news has become a social problem due to the proliferation of social media. While the term “fake news” is often used in Japan, the term “disinformation” is generally used among media researchers. However, in this paper, the term “fake news” is basically used with the meaning of “so-called.” This paper reviews research on “fake news” in terms of its definition and spread mechanisms, as well as media literacy education for fighting it. There are various types of disinformation including satire, parody, and misleading or fabricated content, among others. Media literacy programs are expected to be taken for each type of disinformation. However, this is difficult in the current situation where a large amount of information is spread out. The spread mechanism of “fake news” can be explained by human cognitive traits, filter bubbles and echo chambers, and context in the current media landscape. These perspectives on research on the effects of media should be incorporated into media literacy education. In media literacy education, the studies of educational activities were overviewed in terms of information literacy, news literacy, media literacy in the narrow sense, and fact-checking. Its teaching style is considered to be better in a workshop format combining lectures and discussions. On the other hand, it is the media industries, including the press, that are responsible for the creation and spread of fake news. Therefore, it is important to note that media literacy education is only one of the solutions.

はじめに

2022年5月現在の報道は、「新型コロナウイルス」と「ロシアによるウクライナ侵攻」一色と言ってよいほどである。こうしたなか「フェイクニュース」に接する機会が増えている。みずほ情報総研株式会社(2020)の調査では、この用語を「知っている」人は約8割(78.7%)、「週1回以上、見かける」という回答は、「インターネット上のメディア(SNSやブログなど)」で26.1%、「インターネット以外のメディア(テレビや新聞など)」では24.1%であった。

この用語は政治的な意図を持ったレッテル貼りに用いられることもある。例えば、トランプ前アメリカ大統領は自らに批判的な報道機関に対して、ロシアはウクライナにおける民間人の被害報道などに対して、「フェイクニュース」であると批判している。こうした「レッテル貼り」と区別するために、学術論文や政策文書においては「偽情報(Disinformation)」という語が用いられるようになってきている。

しかし、「フェイクニュース」という用語が人口に膾炙していることもあってか、専門書や学術論文にお

いて、この語が用いられる例も多い（笹原, 2018；清原編, 2019；藤代編, 2021 など）。その他、「フェイクニュースや偽情報（総務省, 2021）」、「虚偽情報（フェイクニュース）（西田, 2021）」と表記される場合もある。本稿では、カギ括弧つけ「所謂」という意味を含めた「フェイクニュース」という表記を用いることにしたい。

「フェイクニュース」への対抗策としてしばしば目にするのが「情報を鵜呑みにせず自分でクリティカルに考える『メディア・リテラシー』を身につける」という意見であろう。MMD 研究所 (2020) の調査で「フェイクニュースを見破る自信はあるか」を尋ねたところ、「自信がない」が 23.3%、「やや自信がない」が 43.1% となり、計 66.4% が「フェイクニュース」を見破る自信がないと回答していた。先のみずほ情報総研株式会社 (2020) の調査結果をあわせて考えると、「フェイクニュース」を目にする機会は増えているが、それを見破る自信がないという現状が見て取れる。

そもそも「フェイクニュース」に対して「メディア・リテラシーで対抗できるのか」という議論もある。藤代 (2021) は「フェイクニュースは見抜けない」とし、「フェイクニュースを取り巻く状況は、もはや個人で対処できる範囲を超えている (p.14)」とまで述べている。その理由としてメディア側の「ニュースの汚染された生態系」の問題が大きいと捉えているからである。これは、メディア側の問題を軽視して「フェイクニュースに騙された」ことを個々人の責任に帰すことを問題視しているのであり、メディア・リテラシーそのものの重要性まで否定しているわけではない。

坂本 (2022) は、「情報の真偽を見分ける能力としてメディア・リテラシーが取り上げられることが多いが、一般的にメディア・リテラシー研究者はメディア・リテラシーをそのような能力とはみなさないし、情報の真偽を見分けること自体について懐疑的である (坂本, 2022, p.79)」と指摘している。

このように「フェイクニュース」を見破ることはたやすいことではないが、2022 年 6 月に Google 上で「フェイクニュース 見破る」を検索したところ、約 79 万件がヒットした。その必要性に対する社会的関心が高いことは明らかであろう。そして、さまざまな情報

が溢れる現代において喫緊の問題の 1 つであると考えられる。

以上に鑑み、本稿では「フェイクニュース」に対するメディア・リテラシー研究の現状を整理することとする。そこで、「フェイクニュース」の定義、「フェイクニュース」の拡散の仕組み、「フェイクニュース」へのメディア・リテラシー教育の 3 点に関する研究を概観し、今後の課題を検討したい。

1. 「フェイクニュース」とは何か

1.1. 「フェイクニュース」の例

「フェイクニュース」の拡散は大きな社会問題となっており、Information と Pandemic からなる「インフォデミック (Infodemic)」という造語もあらわれた。これは、感染症がパンデミックをもたらす世界に拡散するように、インターネットやソーシャルメディア上で真偽不明の情報が、大規模に拡散することを指している。

「フェイクニュース」という語は、2016 年のアメリカ大統領選挙の頃から、人口に膾炙するようになった。ドナルド・トランプ候補とヒラリー・クリントン候補に関するさまざまな情報が錯綜した。例えば、「ローマ教皇がトランプ候補の支持を表明した」、「ヒラリー候補がイスラム国への武器売却を認めた」といったものである。ヒラリー候補の関係者である小児性愛者の集団がピザ店で活動しているという情報が流布し、これを信じた者が、実際にその店を銃撃するという「ピザゲート事件」まで起こっている。

日本においては、2016 年 4 月熊本地震の直後に「動物園からライオンが放たれた」という情報が SNS 上で拡散されるという事件があった。同年、株式会社 DeNA が運営するキュレーションサイト「WELQ」に医学的に根拠がない記事が掲載されていることが問題となり、閉鎖に追いこまれた。これらは一部の例に過ぎず、「フェイクニュース」に関する事件は、枚挙にいとまがない。

以上のように、一般化した「フェイクニュース」という語であるが、「一言でフェイクニュースといっても、意図的に作成した偽情報、だます目的で作られたのではないが誤った情報、プロパガンダ、陰謀論、う

わざ・流言、メディアによる誤報、などさまざまな種類の情報を指して使われている(耳塚, 2021, p.23)のが現状である。みずほ情報総研株式会社(2020)の調査では、「定まった定義はないが、何らかに利益を得ることや意図的に騙すことを目的としたいわゆる「偽情報」や、単に誤った情報である『誤情報』や『デマ』などを広く指すものである」とされている。すなわち「フェイクニュース」は、偽情報、誤情報、デマなどを包含したものと捉えられている。

福田(2022)は、「デマ」や「流言」という現象に関してさまざまな研究がなされてきたが、現在はこのような概念が使われなくなってきたとする。それは、「フェイクニュース」という概念が一般化し、半ば流行語のように世界的に使用されるようになったからであると指摘している。

一方で、福長(2018)は、「フェイクニュース」を「何らかの意図で作られ、拡散している虚偽情報の総称」と捉え、デマや流言はうわさ系に含まれるとして区別している。新聞報道などで「デマ」や「誤情報」という用語が使われる例もある。新聞記事「デマを信じてしまうおそれ(読売新聞 2020年3月9日)」では、主にメールやSNSで広まった「お湯を飲めば新型コロナウイルスが死ぬ」という情報は「デマ」と表現されている。NHK for Schoolの記事のタイトルは、「ワクチン『誤情報』や『デマ』私はこうして抜け出した(2021年9月27日)」であり、誤情報とデマという語が用いられている。

このようにさまざまな用語が用いられているが、「フェイクニュース」という語が人口に膾炙している一方、専門家の間では「フェイクニュース」ではなく、より正確な用語を用いる方向にある。この点を次節でより詳しく説明したい。

1.2. フェイクニュースの区分

諸外国の政策文書では「フェイクニュース」ではなく「虚偽情報(Disinformation)」や「誤情報(Misinformation)」を用いるのが、現在の潮流である(三菱総合研究所デジタル・イノベーション本部, 2019)。前者は、嘘だと分かっている情報を意図的に創ったり広めたりすることであり、後者は意図せず

に間違った情報を共有してしまうことである。なお、Disinformationの訳として「虚偽情報」「偽情報」「虚偽情報」が用いられるが、本稿では出典における表記をそのまま用いることとする。

UNESCO(2018)は、ディスインフォメーション(Disinformation)とミスインフォメーション(Misinformation)に、マルインフォメーション(Malinformation)を加えた情報区分を示している。耳塚(2021)は、ディスインフォメーションは害を与える意図で作成された偽情報であり、ミスインフォメーションは、間違っただけで害を与える意図がない誤情報であるとする。そして、マルインフォメーションは、間違っただけではないが、害を与える意図がある情報流出を指すと解説している。

さらに細分化した区分も見られる。ファーストドラフトという市民団体は、騙そうとする意図の大きさによって誤情報・偽情報を7つに分けている(Wardel, 2017)。意図の小さな順に、風刺・パロディ、誤った関連付け、ミスリーディングな内容、嘘の文脈、偽装された内容、操作された内容、ねつ造された内容となっている(笹原, 2018)。その他の区分として、福長(2018)による誤情報・虚偽情報の4類型が挙げられる。すなわち、(1)うわさ系(うわさ、流言、デマ、ゴシップ、伝説、都市伝説)、(2)マス・メディアの誤報・虚偽報道、(3)行政機関の誤報・虚報、(4)フェイクニュース、である。

このうち、一般的に用いられる「フェイクニュース」に最も近い概念はディスインフォメーションであろう。西田(2021)は、「日本語圏におけるメディア実務においては、偽情報(disinformation)とフェイクニュースはほぼ同義か、明確に区別されることなく使用されている(p.13)」と述べている。

ただし、こうした情報の区分は確立したものとは言いがたい。プラットフォーム研究会(2020)は、既に示されている情報区分にしても、国際的に確立したものがあるわけではなく、まちまちに用いられることに留意が必要であるとする。そして、分類作業を進めるため課題の例として、次の4点を示している。(1)インターネット上の情報に限られるのか、あるいは、それ以外のメディアにおける情報も含むのか。(2)ニュー

スの形式に限定されるのか、あるいは、それ以外の単なる情報を含むのか。(3) 政治、経済、個人的な利益を得ることを目的とするなど、何らかの意図をもった情報に限るのか、あるいは、単なる誤った情報を含むのか。(4) 明確に虚偽である情報に限られるのか、あるいは、部分的に不正確、根拠が不明、ミスリードであるといったケースも該当するのか(プラットフォーム研究会, 2020, p.17)。

このように情報区分はさまざまであり、区分の方法についても課題が多い。しかし、「問題に対処するための前提として、フェイクニュースをひとくりにせず、区別して考えることが重要だ」という点では、国際的なコンセンサスが形成されている(耳塚, 2020, p.33)」とされている。

さらに、「『フェイクニュース』という言葉の使用や情報区分を明確にしないままおこなわれる議論がユーザーに与えるネガティブな影響が明らかになっている(耳塚, 2020, p.34)」といったことから、区分を明確にしていくことの重要性が指摘できよう。したがって、坂本(2021)が指摘するように「偽情報は多様であり、それらを分類し、その上でそれらの情報への対策を考える(p.58)」という視点が重要であろう。

2. 「フェイクニュース」が拡散する仕組み

「フェイクニュース」拡散の背景には、社会における「ポスト真実(post-truth)」がある。これは、「世論の形成に客観的事実が感情的個人的心情へのアピールほど影響力を持たなくなった環境(総務省, 2019)」と定義される。換言すれば、接した情報が客観的な事実か否かよりも、感情的個人的心情にあうかが優先され、その影響を受けやすい社会状況と言えよう。

それでは、「フェイクニュース」はどのように拡散するのであろうか。笹原(2018)は「人間の認知特性」「情報環境」「文脈」の点からまとめている。まず、「人間の認知特性」の問題がある。自分の見たいものだけ見ようとする認知バイアスによって偏った情報を目にしてしまうと、「みんなもそう思っている」という社会的影響から、ある情報を信じ込んだりする。次が「情報環境」であり、エコーチェンバーやフィルターバブルを例に挙げている。そして最後が「文脈」で

ある。これはAIやソーシャルロボットを活用した情報発信による情報過多によって人間が処理できる情報量を超えることや、人間の注意をなるべくひこうとする「ミーム」としてのフェイクニュースが挙げられている。

「プラットフォームサービスに関する研究会最終報告書」では、偽情報が流布する背景が次のようにまとめられており(総務省, 2020, p.15)、笹原(2018)と比較して、SNSの機能、プラットフォーム、フィルターバブルやエコーチェンバーといった情報環境により着目したものとなっている。

- ① SNSでは一般の利用者でも容易に情報発信(書込み)や拡散が可能であり、偽情報も容易に拡散されやすいこと
- ② 多くの利用者がプラットフォームサービスを通じて情報を収集・閲覧していることから、情報が広範囲に、かつ、迅速に伝播されるなど、影響力が大きいこと
- ③ 偽情報は、SNS上において正しい情報よりもより早く、より広く拡散する特性があることや、SNS上の「ボットアカウント」が拡散を深刻化させていること
- ④ 自分と似た興味・関心・意見を持つ利用者が集まるコミュニティが自然と形成され、自分と似た意見ばかりに触れてしまうようになる(=「エコーチェンバー」)、パーソナライズされた自分の好み以外の情報が自動的にはじかれてしまう(=「フィルターバブル」)などの技術的な特性があること
- ⑤ 各利用者の利用者情報の集約・分析によって、個々の利用者の興味や関心に応じた情報配信(例: ターゲティング広告)が可能であるなど、効果的・効率的な利用者へのアプローチが可能であること

ここで、「エコーチェンバー」と「フィルターバブル」について、より詳しく触れておきたい。「エコーチェンバー」とは、「ソーシャルメディアを利用する際、自分と似た興味関心をもつユーザーをフォローす

る結果、意見を SNS で発信すると自分と似た意見が返ってくるという状況を閉じた小部屋で音が反響する物理現象にたとえたもの (総務省 2019, p.102) である。自分の考えと類似した情報が反響しあう状況におかれると、「自分の考えは正しい、支持されている」と感じて、自分の考えを一層強化することとなり、その結果、集団極化が生じるという懸念がある。

「フィルターバブル」とは、「アルゴリズムがネット利用者個人の検索履歴やクリック履歴を分析し学習することで、個々のユーザーにとっては望むと望まざるとにかかわらず見たい情報が優先的に表示され、利用者の観点に合わない情報から隔離され、自身の考え方や価値観の『バブル (泡)』の中に孤立するという情報環境 (総務省 2019, p.103)」のことである。フィルターによって情報が濾過・除外され、自分の興味関心のある情報というバブルに包まれて孤立し、分断されてしまうことをイメージしている。

「フェイクニュース」への接触を例にすれば、「エコーチェンバー」によりその情報に対する自分の考えを強化しより極端に走り、「フィルターバブル」によって他の考えを持った人達との分断が生じることになる。その結果、情報の検証をせずに「フェイクニュース」を信じ込んでしまったり、拡散してしまったりするおそれがある。

「フェイクニュース」の拡散を説明するにあたり、ソーシャルメディア上の例を挙げてきたが、テレビなどマス・メディアが関わっている場合もある。記憶に新しい「フェイクニュース」として「コロナ禍によって、製造元が中国であるトイレットペーパーが品薄になる」がある。この情報は Twitter が出所であるが、Twitter 上ではそれほど拡散せず、マス・メディアを介して広まったことが明らかにされている (日経クロステック, 2020; 鳥海, 2021)。テレビ番組が、トイレットペーパーが品薄になっている店の様子を伝えることで、この情報が拡散したのである。これは、メディアの効用としての「世の中の出来事を知る」において、テレビの評価が他メディアを引き離している (齊藤・平田・内堀, 2021) こととも整合する結果と解釈できる。

テレビや Twitter といったメディア間の「フェイク

ニュース」の流れを藤代・川島 (2021) は「ニュースの汚染された生態系」と表現している。マス・メディア、ミドルメディア (まとめサイト、ソーシャルブックマークなど)、ソーシャルメディアの間で情報が生成され、循環する。そして、メディア間の相互作用により成長した「フェイクニュース」は、記事配信を通して大きな影響力を持つポータルサイトに到達する。ポータルサイトから、ミドルメディアやソーシャルメディアに拡散する。これが、「フェイクニュース・パイプライン」である (藤代・川島, 2021)。その一因として現場に取材に行かずにソーシャルメディアの情報をそのまま取り上げる「こたつ記事」があり、これが出発点となり他のメディアや地域に影響を与えフェイクニュースを生み出しているという (藤代, 2022)。こうした「ニュースの生態系」から生み出される「フェイクニュース」を読み解き、真偽を見極めることは、決して容易ではない。

メディアの仕組み (「フェイクニュース」を拡散させる仕組み) を理解することは、メディア・リテラシー教育の一助になるになると考えられる。なぜならば、メディア・リテラシー教育における留意点を洗い出すことに繋がるからである。例えば、「人は自分が信じたいと思うものを信じる傾向にあること (認知特性)」、「インターネット上は自分が欲しい情報だけが集まる環境ができてしまうことに留意する (フィルターバブル)」、「自分の発言に『いいね』がついても、それは偏った集団内でのことに過ぎないおそれがあること (エコーチェンバー)」などである。同様の指摘は、『Disinformation 対策フォーラム報告書 (2022年3月)』においてもなされており、被害の発生に繋がる行動を自ら抑制することが期待できるとしている。以上のように、メディア効果研究の結果に基づき、こうした点に留意する必要性を学ぶことは重要と考えられる。

3. フェイクニュースに対抗するメディア・リテラシー教育

メディア・リテラシーとは、雑駁に言えば「メディアと上手に付き合っていく能力」である。メディア研究 (とりわけカルチュラル・スタディーズ)、メディア教育 (教育工学、情報教育)、図書館情報学、国語

教育などのさまざまな領域で検討される学際的分野である。

従来のメディア・リテラシーの「メディア」が意味するのは、テレビや新聞、ラジオといったマス・メディアであった。マス・メディアから一方的に送られてくるメッセージを読み解くことが、メディア・リテラシーであった。インターネットの発達により、人びとが、ソーシャルメディアなどを用いて、メッセージを一方的に受け取るのではなく、より積極的に情報を検索したり、発信したりできるようになると、これらの能力もメディア・リテラシーに含まれるようになった。すなわち、メディア・コミュニケーションの変化にともない、メディア・リテラシーの概念は拡張したのである。

「フェイクニュース」に対抗するメディア・リテラシー教育に関して、インターネット上を検索すると、セキュリティ通信 (2019) のような例を見つけることができる。ここでは、「フェイクニュースを見抜く3つのポイント」と次のものが挙げられている。(1) まずは情報の出どころを確認すること、(2) 複数の情報を見比べること、(3) 正しいと思って誤った情報を発信してしまうこともと頭に入れておく、である。教育番組のテーマとして扱われる例もある。NHKの「メディアタイムズ」という番組では「フェイクニュースを見抜くには」という回が設けられている。その方法として、(1) 発信元を探る、(2) 他のメディアも調べてみる、(3) 文章の表現に注目、の3つのポイントが挙げられている。

坂本 (2019) は、ソーシャルメディアの虚偽情報に対抗するには3つの教育論があるとする。すなわち、(1) 情報リテラシー論、(2) ニュースリテラシー論、(3) メディア・リテラシー論である。そして、リテラシー論ではないが真偽検証としての「ファクトチェック」にも着目している。

(1) 情報リテラシー論は、図書館情報学が土台であり情報収集や整理、評価、発信などのプロセスに係わるものである (坂本, 2021; 坂本, 2022)。坂本 (2021) は、情報リテラシーの一部である情報評価スキルを養成し、情報源の意識化を図る方法として、情報源の信頼性を判断するチェックリスト (CRAAPテストな

ど) を活用することを挙げている。CRAAPとは、Currency (情報の公開時期)、Relevance (著者と情報との関連性)、Authority (著者はどんな人物か)、Accuracy (情報の正確さ)、Purpose (その目的) の頭文字をとったものである。ここには、メディアの表現の仕方と情報の中味 (情報の評価、分析、発信といった一連の流れ) に焦点を当てられており、メディア・リテラシーと情報リテラシーの両方の観点が含まれているとする。

チェックリスト方式には、次のような問題点もある (耳塚, 2021)。(1) 図書資料を見つけるための基準でありソーシャルメディアやウェブの情報確認に適さないこと。(2) スマートフォンなどで目にする大量の情報を確認するのは実用的方法ではないこと。(3) チェック項目が、発信者によって偽造・改竄できること。チェックリストによる情報の真偽判断については、「真実と虚実との境目は複雑で、簡単に『真実か虚実であるか』とは判定できるものではない (坂本, 2019)。」という問題点も指摘されている。

(2) ニュースリテラシー論は、ジャーナリズムやジャーナリスト組織を土台としたニュースに関するリテラシーを対象とする (坂本, 2021; 坂本, 2022)。ニュースリテラシーも情報リテラシーの一部であり、情報を対象としているが、ジャーナリズムを基礎としたニュース情報の専門性を基礎とする点に特徴がある (坂本, 2019, p.58)。すなわち、単なるニュース情報の読み解きではなく、ニュース情報の発信者としてのジャーナリズムの基礎を学ぶものであり (坂本, 2021)、ジャーナリズムの基礎知識とニュースを中心とした多様なオンライン情報を読みとく能力である (坂本, 2022)。

坂本・山脇 (2022) による編著『メディアリテラシー 吟味思考 (クリティカルシンキング) を育む』では、ジャーナリストの視点と実践として、さまざまな取り組みが紹介されている。同書において宮地 (2022) は、アメリカのニュース・リテラシー・プロジェクト (NLP) によるウェブ教材「Checkology」や教員向けの研修といった取り組みを紹介している。その上で、日本においても新しいSNSが登場し、生徒が教師よりも使いこなしているようなケースも見ら

れる現状からすれば、教員がある程度の解を用意して教える授業は通用しないと指摘している。さらには、アメリカの事例のように実際の報道機関などがパートナーとなって記者による授業を実践する体制をつくることを提案している。

(3) メディア・リテラシー論は、カルチュラル・スタディーズを土台としたマス・コミュニケーション研究や教育学を土台とするものであり、メディア、メディア・コンテンツ、メディアの表現の仕方が分析の対象となる(坂本, 2020)。坂本(2019)によれば、情報リテラシーの分析対象は情報であるが、メディア・リテラシーの観点は「コミュニケーションを前提としたメディア・メッセージ」を批判的に読み解き、創造することにある。こうした観点から、情報への心構えや視点を意識化させる試みとして、下村の実践事例「ソウカナ」を挙げている。これは、情報を判断する際に、「ソ: 即断しない、ウ: うのみにしない、カ: 偏らない、ナ: 中だけ見ない」ことに留意させるための取り組みであり、主に小学校で授業実践がなされている(下村, 2022)。

そして、「ファクトチェック」がある。「ファクトチェック」とは、「すでに公表された言説を前提に、その言説の内容が正確かどうかを第三者が事後的に調査し、検証した結果を発表する営み(立岩・揚井, 2018, p.3)」である。その特徴として、政治家などの発言、ニュースやネット記事に載っている事実が分析対象であり意見は対象外であること、単なる事実確認ではなく正確さの度合いを評価し、裏づけとなる根拠を積極的に公表することがあげられる。日本では、「ファクトチェック・イニシアティブ(F I J)」が活動し、日々、検証の結果をHP上に公開している。

坂本(2018)は、オンライン情報評価スキル育成の方法としてのファクトチェックに着目し、大学の図書館司書・司書教諭資格科目を利用して実践教育をおこなった。この授業では、対象言説の特定、認定事実と結論の明示、判断根拠と情報源の明示、わかりやすく誤解を与えない見出し、記事の公開日・作成者、訂正情報の開示の5つの基準から、受講生にファクトチェックに取り組みさせた。対象メディアは政党のTwitterやTwitter記事、新聞記事である。課題提出後には、

ファクトチェックの結果を授業内で検証させるなどしている。いわば、ワークショップ形式をとっている。

ファクトチェックの専門家が用いる技法「横読み(Reading Laterally または Lateral Reading)」は、フェイクニュース対策として有用とされる(耳塚, 2020; 坂本, 2019; 坂本, 2021)。これは、「ウェブページを読むとき、普通は上から下へとスクロールさせて読むが、ブラウザのタブを横に次々と開いて元のサイトの信頼性を調べる方法(坂本, 2019, p.53)」である。ある記事を見つけた際に、その記事を読み込むのではなく、他のサイトを調べその記事の情報源の信頼性を見極めたり、内容を吟味したりすることと言えよう。

「横読み」をより効果的にする技法として Coufield(2017)による「SIFT」がある。これは、Stop(コンテンツを読む前に、どんなサイトなのかを立ち止まって考える)、Investigate the source(情報源を確認する)、Find Better Coverage(他の情報源にあたり、より信頼できる記事を探す)、Trace Claim Quotes and Media to the Original Context(オリジナルのソースをたどる)を意味している。情報をじっくり見極めるというよりも、怪しい情報から距離を置くことを目的とする点が特徴である(耳塚, 2021)。

ここまでは、坂本(2019)に依拠し、ソーシャルメディアの虚偽情報に対抗する3つの教育論および「ファクトチェック」の観点から、「フェイクニュース」に対抗するメディア・リテラシー教育を紹介してきた。多くの取り組みがワークショップ形式をとっていることが分かる。第2節において「メディアの仕組み(拡散させる仕組み)を理解することは、メディア・リテラシー教育にも寄与する」と指摘したが、こうした「フェイクニュース」拡散の仕組みを学んだ上でワークショップをおこなう取り組みがあるので、以下に紹介したい。

野村(2018)は、大学生を対象に新聞を用いたメディア・リテラシー教育の実践の結果をまとめている。授業では、まず、フェイクニュースが生成・拡散される仕組みについて教授した。その内容は「フェイクニュース」の影響力の事例、その類型と意図、拡散の仕組み(フィルターバブルなど)、ニュース発信する情

報事業者の仕組みなどである。その結果、学生の間には危機感が生まれ、ニュースについて学ぶモチベーションが高まった。ついで、協働学習により新聞を核としたニュースの調査研究をおこなわせた。自身が関心のあるニュースを発表、その理由など討議させたり、ニュースの背景を掘り下げて考えさせたりするなどした。その結果、メディア受容能力（必ず出典を確認する、ひとつの記事を鵜呑みにしない）の高まりがみられた。最後に、ニュースリテラシーを育むための授業案を作成させ、授業で発表させている。このようにレクチャーに加えて、ディスカッション、プレゼンテーションを用いたワークショップ形式を採用している。

みずほリサーチ テクノロジーズ（2021）は「EUによるメディア・リテラシー向上の取組を支援する目的のプログラム（GET YOUR FACTS STRAIGHT!（GETFACTS）」を紹介している。ワークショップ形式による合計10時間のトレーニングであり、若者から高齢者まで幅広い年齢層のメディア・リテラシーの向上を図るためのプログラムである。その内容は、次の通りである。

「第1部 偽情報とは（80分）」では、偽情報の定義などを紹介し、ペアワークによる分類作業をおこなう。「第2部 ソーシャルメディアはどのように収益を上げているのか、そしてなぜ偽情報やプロパガンダがソーシャルメディアに広く存在しているのか（190～220分）」では、架空のレストランで偽情報を信じてしまった人物の動画を視聴したり、「フェイクニュース」投稿の影響に関するゲームを行ったりする。さらに、トレーナーがフィルターバブルの仕組みについて説明する。いずれもグループ作業やディスカッションを組み合わせたかたちをとっている。「第3部 偽情報を認識し対応する方法（220分以上）」では、トレーナーが加わってさまざまなグループワークが行われる。信頼できる情報源についてグループで共有したり、トレーナーから情報の確認方法や自己防衛の方法を学んだりする。そして、「最終評価（90分）」では、ゲーム、クイズを通じて、これまでの学習成果を確認し、参加者にフィードバックをして終了となる。ここでも、レクチャーに加えて、ディスカッションなどさせるワークショップ形式を採用している。

最後に、直接的に「教育」を扱ってはいないが、それに資する調査結果を示している山口（2021）および山本（2022）の研究を取り上げたい。山口（2021）の調査では、フェイクニュースの真偽判定能力に寄与する要因が明らかにされている。それは次の通りである。（1）情報リテラシー（読解力・国語力に近い能力）が高いとフェイクニュースに騙されにくい傾向がある。（2）ソーシャルメディアやメールへの信頼度高いとフェイクニュースに騙されやすい傾向がある。（3）マス・メディアへの不満・自分の生活への不満が強いと偽情報と判断しづらい傾向がある。さらに、彼は、フェイクニュース（新型コロナ関連、国内政治）への対策としての9つの情報検証行動について、フェイクニュースの種類によって有効な行動は異なることを明らかにしている。

この結果から、フェイクニュースに騙されないようにするには、情報リテラシーを高めることで、ソーシャルメディアや過度を信頼しないことが肝要であり、そうした教育を検討する必要性が示唆されると考えられる。さらに、フェイクニュースの種類（新型コロナ関連、国内政治）によって求められる情報検証行動が異なるのであれば、それぞれに応じた教育が求められる可能性を示唆するものと解釈することができよう。

山本（2022）は、（1）インターネット上の真偽の疑わしい情報の確認、（2）誤った情報の拡散について正しい情報と思った場合と誤った情報とした場合、そして、（3）誤った新型コロナウイルス情報の拡散について正しい情報と思った場合と誤った情報とした場合、それぞれの規定要因を検討している。ここであげられた規定要因とは、ネットニュース接触、ニュース・情報番組の接触、政治志向性（保守的）、SNSの積極的利用、オンライン上の交流、情報リテラシー（正しい情報を選択させて測定）、メディア・リテラシー（批判的に読み解くことを意味し「明示的なメッセージや暗黙のメッセージに気づくことができる」などの項目で測定）である。

本稿に関わるメディア・リテラシーに関していえば、情報の確認、拡散に正の関連があることが明らかになり、情報の拡散に関わる可能性が示唆されている。この結果については、メディアを批判的に読み解くとい

うメディア・リテラシーの限界を示すものか、あるいは今後のメディア状況に合ったメディア・リテラシー概念の再考を促す結果であるのかは、今後の検討課題であるとされている。なお、情報リテラシーは情報の確認には正の関連、拡散には負の関連があることが明らかになった。今後、こうした実証研究の積み重ねが期待される。

おわりに

本稿の目的は、「フェイクニュース」をめぐる昨今の問題を概観し、メディア・リテラシー教育の観点から今後の課題を提示することであった。そのため、(1)「フェイクニュース」の定義、(2) フェイクニュースが拡散する仕組み、(3) フェイクニュースに対抗するメディア・リテラシー教育、の3点からの検討を試みた。その内容は、次のようにまとめられる。

(1) 「フェイクニュース」の定義

政治家の意に沿わない報道が「フェイクニュース」とレッテルが貼られたことなどから、より厳密な表現を用いることが求められている。そこで、先行研究では情報区分が示されている。そのうち「偽情報」、すなわち「害を与える意図で作成された情報」という用語がより適切である。さまざまな情報が流布している現状からすれば、十把一絡げに「偽情報」と言い換えるのではなく、Wardel (2017) のように、より厳密に区分することが必要となる。ただし、現時点では情報区分には定まった定義があるわけではなく、課題も多い。

(2) フェイクニュースが拡散する仕組み

笹原 (2018) は、人間の認知特性、情報環境としての「エコーチェンバー」や「フィルターバブル」、拡散する「文脈」などからその仕組みをまとめている。総務省 (2018) は、情報環境の問題をより詳細に示している。フェイクニュース拡散の仕組みを明らかにすることは、メディア・リテラシー教育を実践する際に求められる教育内容を洗い出すことに繋がる。メディア効果研究の知見をメディア・リテラシー教育に活かすという観点が重要であると考えられる。

(3) フェイクニュースに対抗するメディア・リテラシー教育

今回、紹介した取り組みの多くは、レクチャーにディスカッションなどを加えたワークショップ形式で実践されている。「EUによるメディアリテラシー向上の取組を支援する目的のプログラム」は、「偽情報」「誤情報」の意味を学ぶといったレクチャーとディスカッション、「フェイクニュース」が拡散する仕組みなど複数のワークショップで構成されている。メディア・リテラシーの育成におけるワークショップ型の学習プログラムの重要性が、たびたび指摘されていること(水越ら, 2020 など)に鑑みるに、様々なプログラムを組み合わせたワークショップ形式にすることが望ましいと考えられる。

最後に、山口 (2021) および山本 (2022) による実証研究を紹介した。「フェイクニュース」の種類(新型コロナ関連、国内政治)によって有効な情報検証行動が異なることが示された(山口, 2021)。したがって、それぞれの情報区分に応じたメディア・リテラシー教育が求められる可能性が示唆されよう。ただし、それによって教育方法が細分化され、標準化された方法の確立が困難になるおそれもあるだろう。

本稿では、「フェイクニュース」に対抗するメディア・リテラシー教育においては、偽情報、誤情報といった情報区分を明確にすること、メディア効果研究の観点を加えること、レクチャー形式よりもワークショップ形式が望ましいことを示してきた。

一方で、メディア側の問題をなおざりにしたまま、個人個人のメディア・リテラシー向上によって、「フェイクニュース」に対抗するには無理があり、プラットフォーム側も対策をとるようになってきている。例えば、Facebook では、「Facebook はフェイクニュースの拡散抑制に全力で取り組んでいます。その方法として、偽アカウントを削除したり、偽情報を発信する人のインセンティブを排除したりしています」としている。さらに、「フェイクニュースを見分けるためのアドバイス」として、10項目を挙げ注意を喚起している。

Twitter では、ある記事をリツイートしようとするとその記事を読むかどうか尋ねるメッセージがあらわれる。Twitter ヘルプセンターでは、「内容を十分に把握し、十分な情報が含まれていない共有を減らすためにこのようなメッセージが助けになると考えていま

す」と解説している。こうした取り組みは必要であろう。

しかし、藤代(2021)が指摘する「フェイクニュース・パイプライン」のような、メディア側の構造的問題は、一朝一夕に解決できるものではない。「フェイクニュース」へのメディア・リテラシーの問題は、個々人の能力を超えたところにもあることにも留意すべきである。

引用文献

Coufield, M. (2017). Yes, Digital Literacy, But Which One. <https://teachinginhighered.com/podcast/yes-digital-literacy-one/> (2022年4月16日取得)

Disinformation 対策フォーラム (2022). Disinformation 対策フォーラム 報告書 2022年3月 https://www.saferinternet.or.jp/anti-disinformation/disinformation_report/ (2022年5月6日取得)

Facebook ヘルプセンター フェイクニュースを見分けるためのアドバイス <https://www.facebook.com/help/188118808357379> (2022年4月13日取得)

ファクトチェック・イニシアティブ <https://fij.info/about/outline> (2022年3月11日取得)

藤代裕之(編)(2021). フェイクニュースの生態系 青弓社

藤代裕之(2021). はじめに 藤代裕之(編)(2021). フェイクニュースの生態系 青弓社, pp.13-20.

藤代裕之・川島浩誉(2021). フェイクニュースはどのように生まれ、広がるのか 藤代裕之(編) フェイクニュースの生態系 青弓社, pp.46-83.

藤代裕之(2022). ニュース汚染の元凶、「こたつ記事」を撲滅せよ *Journalism*, 380, 20-25.

福田充(2022). リスクコミュニケーション 多様化する危機を乗り越える 平凡社新書.

福長秀彦(2018). 流言・デマ・フェイクニュースとマスメディアの打ち消し報道 *放送研究と調査*, 68(11), 84-103.

清原聖子(編)(2019). フェイクニュースに震撼する民主主義 大学教育出版.

耳塚佳代(2020)「フェイクニュース」時代におけるメディアリテラシー教育のあり方 *社会情報学*, 8(3),

29-45.

耳塚佳代(2021). フェイクニュースとは何か 藤代裕之(編)(2021). フェイクニュースの生態系 青弓社, pp.29-45.

三菱総合研究所デジタル・イノベーション本部(2019). 諸外国におけるフェイクニュースおよび偽情報への対応 プラットフォームサービスに関する研究会(第8回) 資料 https://www.soumu.go.jp/main_content/000621621.pdf (2020年8月10日取得)

宮地ゆう(2022). アメリカのニュース・リテラシー・プロジェクト(NLP)を解剖する 坂本旬・山脇岳志(編) *メディアリテラシー 吟味思考(クリティカルシンキング)* を育む 時事通信社, pp.266-267.

みずほ情報総研株式会社 経営・ITコンサルティング部(2020). 日本におけるフェイクニュースの実態等に関する調査研究ユーザのフェイクニュースに対する意識調査-報告書 https://www.soumu.go.jp/main_content/000715293.pdf (2022年2月9日取得)

みずほリサーチ テクノロジー株式会社 経営・ITコンサルティング部(2021). EUにおける偽情報対策教育プログラムについて プラットフォームサービスに関する研究会(第27回) 資料 https://www.soumu.go.jp/main_content/000749425.pdf (2022年2月9日取得)

水越伸・宇田川教史・勝野正博・神谷説子(2020) *メディアインフラのリテラシー:その理論構築と学習プログラムの開発* 情報学研究 学環:東京大学大学院情報学環紀要, 98, 1-30.

MMD 研究所(2020). 「2020年 フェイクニュースに関する意識調査」 https://mmdlabo.jp/investigation/detail_1889.html (2022年2月21日取得)

NHK for School メディアタイムズ <https://www.nhk.or.jp/school/sougou/times/> (2022年3月25日取得)

NHK for School ワクチン“誤情報”や“デマ”私はこうして抜け出した <https://www.nhk.or.jp/gendai/comment/0016/topic032.html> (2022年3月25日取得)

日経クロステック(2020). 「新型コロナのSNSデマはマスメディアが拡散」、東大の鳥海准教授

- が分析 <https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/01353/070100001/> (2022年4月20日取得)
- 西田亮介 (2021). 近年の日本における偽情報(フェイクニュース)対策と実務上の論点 情報通信学会誌, 39 (1), 13-18.
- 野村浩子 (2018). 大学におけるメディアリテラシー育成のための授業のあり方: フェイクニュースが蔓延するなか、求められる教育を探る 淑徳大学人文学部研究論集, 3, 15-27.
- プラットフォームサービスに関する研究会 (2020). プラットフォームサービスに関する研究会 最終報告書 https://www.soumu.go.jp/main_content/000668595.pdf (2022年2月9日取得)
- 斉藤孝信・平田明裕・内堀諒太 (2021). 多メディア時代における人々のメディア利用と意識: 「全国メディア意識世論調査・2020」の結果から 放送研究と調査, 71 (9), 2-41.
- 坂本句 (2018). メディア情報リテラシー教育におけるファクトチェック実践の可能性 法政大学キャリアデザイン学部紀要, 15, 221-253.
- 坂本句 (2019). 虚偽情報時代の情報リテラシーとメディア・リテラシー教育の新たな展開 — ニュース・リテラシーから現代プロパガンダ まで —、生涯学習とキャリアデザイン, 17 (1), 51-72.
- 坂本句 (2020). 偽情報時代のメディア情報リテラシーと学校図書館 メディア情報リテラシー研究, 1(2), 83-100.
- 坂本句 (2021). 偽情報・陰謀論時代のオンライン情報評価と多元的リテラシーとしてのメディア・リテラシー 法政大学キャリアデザイン学部紀要, 18, 53-90.
- 坂本句 (2022). メディアリテラシーの本質とは何か 坂本句・山脇岳志 (編) メディアリテラシー 吟味思考(クリティカルシンキング)を育む 時事通信社, pp.72-94.
- 笹原和俊 (2018). フェイクニュースを科学する 拡散するデマ、陰謀論、プロパガンダのしくみ DOJIN 選書.
- セキュリティ通信 (2019). フェイクニュースを見抜くには? 3つのポイントを徹底解説 https://securitynews.so-net.ne.jp/topics/sec_20021.html (2020年10月14日確認)
- 下村健一 (2022). 想像力を働かせよう 「朝の会」やホームルーム、授業で使える《ソ・ウ・カ・ナ》チェック 坂本句・山脇岳志 (編) メディアリテラシー 吟味思考(クリティカルシンキング)を育む 時事通信社, pp.316-319.
- 総務省 (2019). 令和元年版 情報通信白書
- 総務省 (2020). 令和2年版 情報通信白書
- 総務省 (2021). 令和3年版 情報通信白書
- 立岩陽一郎・揚井人文 (2018). ファクトチェックとは何か 岩波ブックレット.
- 鳥海不二夫 (2021). データから見るフェイクニュース プラットフォームサービスに関する研究会 (第26回) 配布資料 https://www.soumu.go.jp/main_content/000745175.pdf (2022年2月9日取得)
- Twitter ヘルプセンター <https://help.twitter.com/ja/using-twitter/how-to-retweet> (2022年4月13日取得)
- UNESCO (2018). Journalism, 'Fake News' and Disinformation: A Handbook for Journalism Education and Training <https://en.unesco.org/fightfakenews> (2022年2月14日取得)
- Wardle, C. (2017). Fake news It's Complicated. First Draft. <https://firstdraftnews.org/articles/fake-news-complicated/> (2022年2月14日取得)
- 山口真一 (2021) わが国における誹謗中傷・フェイクニュースの実態と社会的対処 プラットフォームサービスに関する研究会 (第26回) 配布資料 https://www.soumu.go.jp/main_content/000745067.pdf (2022年2月9日取得)
- 山本明 (2022). 誤った情報の拡散とメディア・リテラシー メディア・コミュニケーション, 72, 117-131.
- 読売新聞社 (2020) 「デマを信じてしまうおそれ 読売新聞 2020年3月9日(11面)」

- 兵庫 可大○(半岱宛) (①62)
- 播磨 布舟△(③6安永二) 瓜坊□(③10)、□(五葉庵) (③63)
- 但馬 松主□(③43) 木卯△(③59) 馬吹△▽(③62)
- 松童△(④34)
- 備前 孤嶋□(③35安永六)
- 備中 宜朝△▽(③54) 桃左△(④39)
- 備後 古声△(③38) 聴雨△(④35) 李岱□(④41)
- 安芸 青雨△(④23) 安永五 支白△(④46) 宗斤□(④59)
- 石見 鯨度△(③19)
- 讃岐 履視◎(①31) 禹柳△(③29) 閑鷺△(③31安永四)
- 土佐 白許△(③16) 百和・度雄△(③18) 度雄△(④43)
- 豊前 李完△▽(③7) 素尾△(③14)
- 豊後 蘭里△▽(③39) 一幹△▽(③48)
- 筑前 漫々△▽(③60) 蝶酔△(④10) 斗圭△▽(④20)
- 日向 真彦◎(②29) 一橘□(②33)
- 肥前 鯨丈△▽(③3) 桃国?△(③44)
- 行脚 蚊牛□(①50) 蕪衛□(①51) 对竹□(②12)
- 閑齋□(②42)
- 不明 庄七▽(③20) 舍了△(③34) 見雅□(③46)
- 徐々△(③52) 潮波□(③55) 木蘭△(④11)、▽(④44)
- 順貞□(④16) 一掃□(④30) 良成□(④48)
- 羅葉△(④51) 雁門□(④56)

結び

関本家の来翰集(全四巻)は、一巻、二巻が如髮来翰集(文化文政期)、三巻、四巻が巨石来翰集(安永天明期)が中心になっており、句稿は書簡に同封されていたものが中心である。交通の不便な近世の会津において、広く全国の俳人との交遊を可能にしたのは、巨石、如髮が商用ルート(東海道)を活用

しながら関西に旅をして交流を深めた賜物である。

士由の跋文に、「巨石・如髮の二翁相繼て俳諧に名高く弥好みて家声を随せず弥好て益富り。其子直有、其孫半岱の人々又風雅の家声を随せず弥好て益富り。」とある通り、巨石と如髮は家業と俳諧の両立を成し遂げ、直有、半岱もまた家産を傾けることはなかった。関本家が遺した四巻の書簡群の存在は、今後近世中・後期の俳諧研究が進展していくことによって、俄然存在感を増していくことになるであろう。

〔付記〕

本稿の「31 雄上齋」、「34 松童」の二箇所発句の翻刻において、日本女子大学教授福田安典氏よりご教示を賜わった。

また、本稿に翻刻した「関本如髮集成来翰集」(第四巻 巨石宛)は、大阪公立大学総合図書館中百舌鳥所蔵資料「名家消息」第四巻である。今回資料掲載の許可をいただいた。

ここに記して各位に深謝申し上げる。

なお本稿は、科研費(基盤研究(C) 課題番号20K00345)の研究助成による成果の一部である。

- 新潟 鬼磨◎(①16)
 加賀 才え女▽(③22)
 北越 春室○(①64直有宛)
 下野 珍明△(④24)
 上野 素輪△▽(④27)
 常陸 湖中□(①59) 五峰(三日坊)□(③53)
 下総 大筈◎(②5) 玉斧△(③36) 麦雨△(③37)
 上総 碓嶺◎(②32)
 江戸 成美□(①5)、●(①57冥々宛 化八) 蕉雨◎(①7政二)
 護物□(①8) 久臧◎(①11) 春蟻□(①17)
 粗文□(①23) 且々□(①33政十一春 一峨◎(①52)
 茶静□(①60) 巢兆◎(②2化九) 白雄□(②6 安永期)
 夢南□(②15) 芝山◎(②18政元) 何丸◎(②26)
 湖十△◎(③13) 蓼太△(④2) 秋色△(④9)
 芋月△(④15) 完車△▽(④19) 田女□(④21)
 武蔵 国村◎(①37) 燕市□(①43) 柳几△(④13)
 相模 雉啄□(②24)
 信濃 素壁◎(①政二頃) ふと根□(①26) 太翠□(①27)
 石羊◎(①45) 雲帯◎(②17)
 飛騨 滄洲△(③33)
 遠江 仏卵◎(②38) 四朋△(④14)
 駿河 菅雅◎(②35化十二)
 伊豆 如髮△(③12)
 尾張 岳輅□(①3) 梅間◎(①14) 楚山◎(①20)
 大巢◎(①21) 呉山◎(①29) 逸人◎(①36)
 木老□(①41) 鱸亭◎(②10) 塊翁◎(②16)
 木天◎(②21) 雪居□(②28) 暁台□(③4)
 蝶羅△▽(③17) 蘿隱(也有)□(③47)、□(④1)
- 三河 吟山△(③50) 風石△(④12) 文樵△(④40)
 秋拳◎(①13) 樛老◎(①28) 木芽□(①41)
 卓池◎(②13) 米林△▽(③24 明和三)
 近江 垂溪□(①25) 千影◎(②14) 烏頂◎(②22)
 青岨△▽(③42) 莊河□(④57)
 伊勢 翠川□(①18) 桃林□(①32) 雨木□(①40)
 省吾□(①42) 六車□(①46) 野渡□(①56)
 宗古□(②48) きむ女◎(②45)
 二日坊(掃旧坊)△▽(③5)、□(③26) 許道△(③23)
 坐秋△(③27安永七) 樗良□(④8) 左竹△(④28)
 伊賀 笛人◎(①30) 李東□(①38) 寄流◎(②30)
 閑竹◎(②43) 無牛□(②49) 曾秋△(③28)
 桐雨△(④22)
 志摩 国馬□(④37)
 大坂 大江丸□(①9) 井眉◎(①19) 月居□(②8)
 長齋◎(②11) 星譜◎(②19) 霞中◎(②20)
 旧国△(③1明和八) 寸馬△(③32明和八) 半時庵□(④58)
 京都 蒼虬◎(①1化十三) 定雅◎(①10化十三)、□(②23)
 茂良◎(①22) 若夢◎(①24化九)
 春坡(初代)◎(①34化五) 佳山◎(①35)
 梅室◎(①63政六) 龍門司(関叟)◎(②9化十二)
 瓦全◎(②25) 四弦△(②34) 春坡(二世)□(②41)
 素玩◎(②47) 燕里◎(②50) 蝶夢△(③2安永二)
 文下△(③41明和七) 重厚△(④4) 闌更□(④6)
 諸九尼△(④18)
 丹波 似藻◎(②27)
 大和 醒上△(④33)
 伊丹 翠樹△(④26)

出人の特定はしにくかった。第三巻、四巻の書簡を誰が卷子に貼ったのかという点については判然としないが、巻頭から途中までは如髪で、後半部分を半岱が補ったようにも思われる。

第三巻、四巻の書簡内容から窺える巨石の動向は、巨石が度々関西を訪れ、京都の五升庵蝶夢に師事していたことである。そして蝶夢の助力を得て、『謡百番発句合』（原本未見）の編集を企てている。第三巻では1旧国（大坂）、2蝶夢（京都）、5二日坊（伊勢）、12如髪（伊豆）、18百和・度雄（土佐）、32寸馬（浪花）、36父斧（下総）、42青岬（近江）、54宜朝（備中）において、『謡百番発句合』編集に関する言及がみられた。

本稿で紹介した第四巻においても、10蝶醉（筑前）、14四朋（遠江）、15芋月（江戸）25麦蘿（陸奥）、34松堂（但馬）、40文樵（尾張）41李岱（備後）、42鸞窓（出羽）において『謡百番発句合』について述べられている。『謡百番発句合』は、明和八年（一七七二）頃から安永二年（一七七三）頃にかけて（さらに後年の可能性もあり）企画されていたようで、「夕顔」「錦木」「熊坂」「三井寺」といった謡曲の題に因んで詠んだ句を諸国の俳人に投句依頼していたことがわかる。

第四巻の末尾は、第二巻同様、地元陸奥俳人のものを中心になっている。具体的には、49竹堂（本宮）書簡而后・巨石・可直宛、50祇川（仙台）書簡巨石・可直宛、52竟志（会津）書簡巨石宛、53諱泊（会津）書簡巨石宛、54北鳥（本宮）書簡巨石宛、55芦笛（会津）句稿、60可直（会津）書簡巨石宛、61而后（会津）句稿、62土由（二本松）跋文である。

全四巻における差出人（句稿執筆者）の地域別分類は以下の通りである。なお、如髪宛書簡は○、巨石宛書簡は△、可直宛書簡は▽、而后宛は▲、関本家中の人宛は○、著名人宛は●、句稿及び宛名不明は□と記号化して示した。また、カッコ内に第一巻所収のものは①、第二巻所収のものは②として通し番号を添え、年代の推定できたものには年代を記した。その際「文化五年」のものは「化五」、「文政二年」のものは「政二」といった形で略号を用いた。

南部	平角○ (14)	卓堂○ (139)	素郷○ (23)	□ (311)
柴田	也斐△ (45)			
仙台	雄測○ (112)	百非○ (115)	日人□ (24)	
	巢居□ (27)	丈葉○ (237)	土由○ (244)	
	白居△▽ (38)	知昂△ (325)	祇川△▽ (450)	
	江山○ (251)	休粹△ (351)	五城坊□ (47)	
	士由□ (462)	天保十		
出羽	淋山○ (236)	鸞窓△ (442)		
米沢	瓊山○ (161)	半岱宛	稲丸○ (246)	舟山△ (357)
白石	乙二● (158)	冥々宛	化十一、△ (21)、△ (43)	
	春魯○ (254)	麦蘿△ (425)		
松川	絶階□ (39)	□ (429)		
本宮	冥々○ (16)	秋夫○ (147)	□ (438)	五陵□ (155)
	青龍□ (349)	篤甫△ (358)	萬象□ (417)	
	羅雲△ (437)	樗門△ (447)	竹堂△▲▽ (449)	
	北鳥△ (454)			
二本松与人	○ (148)	紫明□ (255)		
郡山	子容○ (252)	露秀□ (321)		
三春	旧臺□ (149)	掬明○ (253)		
会津	月歩○ (154)	文窓○ (256)	稲国（柳舎鳴露宛） (257)	
	香村○ (258)	寒蟬△ (330)	玄淳△ (345)	
	漣昔△ (361)	巨石○ (364)	竟志△ (452)	
	諱泊○ (453)	芦笛□ (455)	可直△ (460)	
	而后 (461)	明和六		
須賀川雨考	○ (231)	多代女○ (240)		
岩城	沾橘○ (153)			
越後	蓬袖○ (239)	牧之△ (315)	享和二	花桂△ (340)
	桃路△ (356)	山之△ (445)		

されている。しかし、実際に四巻すべてを半岱が配列したとは考えにくい。もしそうであれば第一、二巻に巨石宛書簡、第三、四巻に如髮宛書簡を配列し、自身宛の書簡を第四巻に付するのが自然である。だが、来翰集全体の構成からみて、集成の発端はやはり如髮であったらう。以下に全四巻の内訳を挙げてみよう。

○第一巻64点 如髮宛書簡33通、如髮以外に宛てた書簡5通、句稿26点。

○第二巻58点 如髮宛書簡39通、巨石宛2通、宛名不明、その他4通、句稿13点。

○第三巻64点 巨石宛書簡45通（そのうち巨石・可直両名宛12通、巨石・如髮両名宛1通）、可直宛書簡2通、宛名未詳書簡1通、句稿14点（そのうち巨石句稿1点）。

○第四巻62点 巨石宛書簡38通（そのうち巨石・可直宛5通、而后・可直・巨石宛1通）、而后・可直宛1通、可直宛1通、その他宛2通、句稿18点、跋文1点。

第一巻と二巻は如髮来翰集と名付けてよい内容である。如髮は『如髮集成染筆帖』（常磐大学情報メディアセンター蔵）に旅先の各地で揮毫をもらっており、その内容は第一、二巻の書簡と深く関連している（拙稿「化政期俳人の西国旅行・『関本如髮集成染筆帖』を中心に」2022年3月『連歌俳諧研究』第142号）。各地の俳人の名家の消息を卷子本にまとめるという作業は、蒐集癖のあつた如髮がいかに始めようとしたことである。

第一巻には如髮以外に宛てた書簡が5通ある。具体的には、57成美書簡冥々宛、58乙二書簡冥々宛、61瓊山書簡半岱宛、62可大書簡半岱宛、64春室書簡直有宛の5通である。そのうち、57、58は、如髮が師の冥々宛書簡をもらい受けたもので資料価値も高い。この二通を如髮自身が貼ったのか半岱が貼ったのかは特定できないが、61（半岱宛）、62（半岱宛）、64（直有宛）の三通は、第一巻末尾の余白部分に半岱のちに貼り加えたものとみてよいだろう。直有は如髮の子、半岱は如髮の孫にあたり、彼ら宛

ての書簡は幕末期のものである可能性が高い。如髮以外に宛てられた書簡5通が貼られたことよって、結果的に第一巻は第二巻に比べて資料が6点多くなっている。第二巻、四巻には直有、半岱宛書簡はなく、第一巻末尾の部分にのみ確認される。もし四巻全体を最初から貼り合わせたのが半岱であったならば、一巻、二巻が如髮宛書簡としてまとまっている中で、一巻の末尾のみに自身宛の書簡を貼ることはないはずである。

次に第二巻に着目しよう。第二巻も一巻同様如髮宛の書簡が中心であるが、巻末の51〜58までの差出人は陸奥俳人である。具体的には、51江三（仙台）書簡如髮宛、52、子谷（郡山）書簡如髮宛、53掬明（三春）書簡如髮宛、54春魯（白石）書簡如髮宛、55紫明（二本松）句稿、56文窓（会津）書簡宛名未詳、57稲国（会津）書簡柳舎・嶋露宛、58香村（会津）書簡如髮宛で、末尾になるほど身近な人物になっており、第一巻、第二巻が本来はひとまとまりの如髮来翰集になっていたことを物語っている。また、第一巻、第二巻の書簡、句稿の始めにはすべて住所・雅号等を記した付箋が付けられており、蒐集家としてのこだわりが表れている。

付箋に着目すると、第三巻、四巻には付箋なしの書簡、句稿が多くなる。第三巻で付箋がないのは、9絶階句稿（松川）、20庄七書簡可直宛、26帰旧（伊勢の二日坊）句稿、34舎了書簡巨石宛、44桃園（若翁か）書簡巨石宛、47羅隠（尾張の也有）句稿、52徐々書簡巨石宛、55潮波（越後）書簡宛名未詳、63五葉庵（瓜坊）句稿、64巨石句稿の10点である。また、46見雅には付箋があるが、「尽夕亭」とあるだけで住所等は特定できない。

第四巻で付箋がないのは、16順貞婦也庵の記、29絶階（松川）七言絶句・発句稿、30一掃句稿、38枕流舎（本宮の秋夫）書簡巨石宛、44木蘭（白河 11の木蘭には付箋あり）、48良成詩稿、51羅葉書簡巨石宛、56雁門句稿の8点である。第一、二巻のすべての資料に付箋が添えられていたのに対して、第三巻、四巻では合計18点に付箋がない。これは、第一、二巻が書簡を受け取った如髮本人によって集成されたものであるからだろう。そして第三、四巻はそれより古い安永・天明期のものが中心であったため差

61 家城而后句稿

会陽若松 號松柏庵 家城太良兵衛

明和六年三月末

七柳のぬし巨石松鷹行脚の後野のはなれ使道祖神の誘にや。那須やいかほへ
杖ひかんと今や可直を介抱して上野の花に風流人へしたひよりその色かし
この香をもとめてねかしま帰バやと止得ざる首途に只楮上まめやかにく頓
て他行の宿馬をまッ。

ことのはを筆にもものすなざくら狩

己丑季春末の日

竹芝睡

而后 印印

※而后は巨石の叔父にあたる。巨石と可直の松島旅行は明和五年頃か。

62 大屋士由跋文

仙台 狼河原處士 大屋氏

天保十年十月

世の末富の俗常にいへらく「俳諧八家産を妨げ事業を失ふの道也。」と。こ
は不幸にして家衰ひ、あるは風流に流蕩する者もあればなるべし。爰に小田
月の驛関本氏八代々家富族盤石、巨石・如髪の二翁相繼て俳諧に名高く弥好
ミテ家産を墮せず弥好て益富り。其子直有、其孫半岱の人々又風雅の家産を
墮せず弥好て益富り。これ家に家頭有て散る深蕩せざればなるべし。近ごろ
半岱二翁の世に「脚に物し燕の翅にかけてかよハセし所の消息いとゞ多か
るをはつかに一ひら二ひらを撰出つゝ事業の暇に手づから綴り合せて四巻と
なし彼遠地災を免かるゝ八元よりにて長く家に伝へて後裔をして祖先のミヤ
びを忘れず、且風流の念を失ハざらむ料とすとぞ。吁古へにいはずや、「礼
義あやまらずむハ何ぞ人のことばを恤マむ。」と。世の末富の俗是にいか
なる看をかなす。

天保己亥孟冬

仙台隱士

大屋士由撰

※大屋士由は陸奥国登米郡狼河原の人。本名は沼倉卓藏。初号は志由、別
号に塊然斎、信夫翁、採花遊人、花選樵夫、洗耳舎、好露がある。農家沼倉
新三郎の次男で、同じ村の大屋氏の法弟になる。高橋東臯門。福島岩代の二
本松に移り、奉行の大鐘義鳴、会津高田の田中月歩の庇護を受けた。晩年は
二本松大平村橋本の門人武藤伴藏宅に寄留し病死した。嘉永三年十二月五日
没、六十三歳。編著に『浦伝集』（文化十年）、『美佐古鮎』（文政元年）、『袖

塚集』（月歩追善集 天保十年）等がある。

士由の跋文によれば、関本家の巨石（越前屋初代）、如髪（二代目）の二
翁は俳諧に名高く、直有（三代目）、半岱（四代目）も家業と俳諧を両立し
て家産を傾けることがなかった。関本家当主は『会津俳諧史』（大槻眠童・
上野白濱子 吾妻書館、1982年）によれば、以下のように継承されてい
る。

関本慶壽 与右衛門直長 寛政六年（一七九四）没 八十九歳

関本巨石 与次兵衛直為 文化二年（一八〇五）没 七十歳 越前屋初代

関本如髪 与次兵衛直房 文政十二年（一八二九）没 八十一歳

関本直有 与次兵衛直有 安政二年（一八五五）没 七十九歳

関本半岱 与次兵衛直有 明治二年（一八六九）没 七十四歳

士由が跋文を草したのは天保十年（一八四〇）である。この時存命だった
のは直有（六十歳四歳）、半岱（五十九歳）であるが、士由の跋文によれば
半岱が二翁（巨石、如髪）宛の消息を綴り合わせて四巻にまとめたというこ
とである。しかし実際は、士由に跋文を依頼した半岱がすべての書簡・句稿
を配列したわけではなく、如髪が自身宛の書簡を集成しはじめた卷子本に、
半岱が関本家の宛の書簡等を貼り加えたものであると考えられる。

二、関本如髪集成来翰集考察

関本巨石、如髪宛の来翰集「名家消息」は、卷子本四巻に収録されている。
軸芯はもともと直径2.3糎のものであったが、大阪女子大所蔵時代に軸を
直径4.5糎に補強している。サイズは縦36糎。各巻見返し部分が50糎
程あり、縦15.16糎程度の書簡が上下二段（一部縦に長い物は一段）に
貼られている。

第四巻末尾の大屋士由跋文（天保十年十月）には、「近ごろ半岱二翁の世
に「脚に物し燕の翅にかけてかよハセし所の消息いとゞ多かるをはつかに
一ひら二ひらを撰出つゝ事業の暇に手づから綴り合せて四巻となし」とあ
り、半岱が二翁（巨石、如髪）宛の消息を綴り合わせて四巻にまとめた記

春興

飛さぎの梅や並木はつなづかず

追尾

煤竹も年もふしく有にけり

右 重真斎 芦笛

※芦笛は会津若松の人。家城圭介。重真斎と号す。家城而后・可直夫妻の親族か。「人相や仏の別れ日の別れ」「信夫山」のほか、『河上集』『傀儡師』にも入集する。

56 雁門句稿

月惑なきたゝずめば尾の梅くさき 雁門 印印

※雁門は不明である。

57 莊河句稿

江州吉高之人

瘦馬に乗て茨の花見哉 莊河

※莊河は近江国吉高の人。

58 半時庵（淡々）書簡槐巴逸主人宛

如訪書御好在欣歎之致奉存候。弊子至来少々不快いまだ平臥同前相催崖情之有事も存あきらめ候。

一、石製之良葉被遣候。尤心へ可申入候。病中是斗も諸承申候。佗は皆々代筆に申承候。不再。

六月廿五日 半時庵

穩巴逸主人

※半時庵は松木淡々の別号である。宝曆十一年（一七六一）十一月二日没、八十八歳。本書簡は没する五か月前の宝曆十一年六月二十五日のものである。

59 宗斤書簡一象宛

安芸広島之人

拝復

筆硯いよく御情間の段大賀申上げます。句作が事いぬる力を編に希望に上げます。小生症痾病に対して特効薬召有事ありがたく存じます。何分に手足が固くことに筆持つ時素直にかかめる八困ります。以下方の事にも正に乙吉ノ元耳底にて拝承御好意も正に有事。折々居りますが、覺不事にて心まずも遅れ／＼になつてゐます。夏葉り蛸壺との拙菴を御携下さると八旧知のものらんものかはづかしく思つてゐます。御希望子ハ此染描てかくてさしいれたくも思ひます。猶尊公もの事何時の夏ものすゞしきや。或八句など御なし下さる事も如何かと思ひます。春下る返事まで。早々。

五月五日 宗斤

一象様 玉案下

筥の土か机上にのこりけり

※宗斤は安芸国広島の人。一象は不明である。

60 家城可直書簡関本巨石宛

会陽若松家城氏 而后妻

歳旦を致見申候。左に書御めにかへ申候。先日詠由子も御つたへ之春の句仰被下候ゆへ漸二句いたし上申候。いかゞ相とゞき候哉。其後何の御いらへもなく心元なく存申候。さだめて御心にかない不申候ゆへと存候。申上度御事八山々候へども手元いそがしく早々申残しまいらせ候。めでたく申上候。

廿三日 可直

巨石様

尚々。春中八早々御こしのよしにて待暮申候。

歳旦

鶯のほめ出す空や花のはる

うつくしいかほほどおかしすゝはらひ

右何れも古めかしき御事、御一笑の上御直し／＼。

※会津若松の人。家城而后の妻。

表」に、「青燈下と号す。冷天門。近江日野人。」とあるのと同じ人物であるようだ。

51 羅葉書簡関本巨石宛

梅咲て昼はぬしなき巨燧かな
やぶ入や門口で先ツ母の顔

春風や女の足に野を一里

駟塞て寒サもひと夜二夜かな

右

かく申捨候。重便に御高評入御染筆奉希候。以上。

羅葉山人

七柳舎 巨石様

※羅葉は不明。

52 竟志書簡関本巨石宛

陸奥会津若松人

其地ハどなたへも心安存候而御挨拶の脇も不仕候。於于今御不礼と後悔仕候。是等之儀能々御執成可被下候。御地探題ハ此方ニ而好人江順殖いたし候所、城下ニ而歌及候由、皆々賞吟仕候。中ニも「子を連れて家にハ足らぬ日傘哉」皆々感心仕候。此句ハ愛情之随一萬代不易とも可申か。潮波丈のさらしの吟、洗石丈之浅間山渡秋の鴉舟、振蘭子之蚊遣り、運ニ早苗、保水子之苔之花涼の吟も相揃候由皆々感賞いたし候。於私ニ別而大慶いつ迄か之樂ニ相成可申と奉存候。猶々御連衆御ゆるみ無之能内々可付御心候。扱菊茂丈ニも近日可為御下向其内御登之砌貴辺ニ御礼旁可得御意乍艸々先如此御坐候。已上。

竟志 (花押)

五月十七日

巨石様 玉机下

※竟志は会津若松の人。尾張の木兎坊風石編『二度の笠』(安永四年)によ

れば、安永三年夏に木兎は会津若松の竟志、可直女らと交流している。「片袖に子あり母あり初真桑 会津竟志」(『二度の笠』)。「風の奥見果て、枯る、柳哉」(『雪あかり』)

53 謔泊書簡関本直為(巨石)宛

陸奥会津若松 自在院住職

先刻は乍早々得御意満足仕候。然は米沢金兵衛殿聲殿へ御酒成りとも会せ申度候得共下戸ニ被居候へハこと人成りとも致し会せ可申貴公御同道ニ而今夕飯ニ御光来被下度存候。右の形貴公よりも聲殿へ御用達可被下候。何れニも只今一寸と御出被下度存候。以上。

十月廿日

関本直為様

謔泊

※謔泊は会津若松自在院の住職。直為は巨石の本名である。

54 北鳥書簡関本巨石宛

奥州本宮

巨石様 是非庵北鳥

いまだ不(得)貴顔候得共益御清安珍重御事ニ候。野坊義当年ハ松島吟行ニ付すいと罷歸申候。一寸御文嘉申度候得共此度急ギ且又桃祖より文差障故懸差置申候。猶追便早々頓首。

七月廿八日 北鳥

巨石様

むしくと秋たツ雲のはやきかな

葬ハうつくしきものゝ哀れなり

右申捨候。御一笑可被下候。

※北鳥は陸奥国本宮の人。是非庵と号す。

55 家城昔笛句稿

会津若松 家城主助 號重真齋

識毫

真鶴の群ていたゞく初日かな

ふるさともしぐれなんとや寮の窓

右

御一笑可申候。

十月廿二日 本宮 樽門

巨石様 机下

※樽門は陸奥国本宮の人。「霰する是も夢なれけふの空」(達)

48 良成詩稿

留別 可直・巨石両雅君

醉唱驪歌此道君

賞心一日帳離群

到来旦待秋風起

寄贈山中一片雲

良成 拜 艸 印

※良成は不明だが、会津に来訪して留別の七言絶句を可直・巨石に贈っている。

49 菅田竹堂書簡家城而后・可直・関本巨石宛

奥州本宮 菅田氏

一、紫芝翁より度々華翰被下忝奉存候。是又例之いそがしさ二而其後及延引申候。先以先達而八当所様御平安御帰杖二而御満悦奉察此次八貴翁御遊杖之番にあたり申候。近来御下りまち入申候。当地より以北八甚俳諧はやり候而横目之児ことくく歌詠いたし候而水にすむ石班魚も朗吟玉のごとく御さ候。且玉音御聞セ被下忝感吟仕候。別而草ノ下絶調与奉存候。

一、休粹氏より一封懸御届ケ申上御落手可被下候。先日も八丁め五外子ノ一封相届候哉。爰元君より御頼之八丁自行さへ于今遣し不申候。一両日中二遣し可申候。尚亦御地御風雅の数々便之節御聞セ可被下候。不佞も一両日入高覧候。しかしおかしからず候。蛩のすりものも下申候間、是又懸御目候。右之外別而見舞書無御坐候条御承申上候。略章御用捨可被下候。書餘期後音候(申) 残候。恐惶謹言。

菅田竹堂(花押)、

七月十日

家 而后翁

可直様

関 巨石君 各格下

※竹堂は陸奥国本宮の人。菅田氏。

50 祇川書簡巨石・可直宛

號青燈下 住于仙台藩崎 淡路島之産

尚く御帰国後御すり物被懸御意珍敷拜吟いたし候。度々願御意向奉存候。愚老も御地辺へ吟行申度志願奉存候。以上。

夏中八御両君へ得御意大慶不少候。此門人御地へ罷越候由、急便ながら申上候。弥御平安御座可被成珍重奉存候。野坊六月始る象潟一見二罷出やうく一両日前二帰郷仕候。申捨之吟懸御目すり物進上申候。早々申残候。以上。

八月廿日

きさかたや秋を心に夕すゝみ

身にそへぬ露のいのちや湯殿山

夜か霧か日か又それ歎月の山

当季

琴にはじかるゝ蟲や草の庵

一葉二葉三葉とつりて野分哉

出羽の国にて三夜

鷺鷹の羽をや拾ハむけふの月

引裂て見ぬ鬼灯や十六夜

待よひや富士に足高比叡小比叡

祇川艸

巨石雅丈

可直婦人

※祇川は淡路島の出身で陸奥国仙台に住んだ。青燈下と号す。「新撰俳諧年

44 田川木蘭書簡家城可直宛 宝曆十三年四月四日(推定)

久く／＼にやつがれも今はおなじ国なる秋風の関の関のほとりに居をトしまいらせ候。又く／＼右天知さふらを編御役承り奉りあらく／＼まいらせ候へバ久く御起ふしも申残まいらせ候。いそぎ承り申さず候へどもさき／＼申候。御老体愈御建の事とか斗めで度存まいらせ候。扱はこたび洛の①蝶夢はりまの山李間の俳風にてしもつふさの大芥子むつおく一見に参られ候。松島・象瀧・津軽・松前・蝦夷の国界まで遊歴候也。帰るさの事に御ざ候。兼而賢婦と二も石子の風名慕ハれて其地へ被趣候。御風談あり度事も御ざ候。あら／＼御便承り度までにさふく申残候。かしく。

四月四日 木蘭

可直老仙

逸唱

桜咲て月なき庭のおぼるなる

おかしからず候へども。

①蝶夢・蝶夢が陸奥へ旅したのは、宝曆十三年(一七六三)三月中旬から五月七日までである。『松しま道の記』(蝶夢編著『蝶夢全集』所収 田中道雄・田坂英俊・中森康之編著 和泉書院)によれば、中山道を通つて安中、高崎まで行き、日光街道、奥州街道を北上して塩竈、松島、武隈の松を訪ねている。その後蝶夢は江戸から東海道を経て帰っており、本書簡で木蘭が述べているように象瀧、津軽、松前には行っていない。

※木蘭の出身地は不明だが、『福島縣俳人事典』(矢部楷郎編 昭和三十年)には、明和から文政期までの白河の俳人として掲載されている。蝶夢は可直と巨石がいる会津まで足を延ばす計画があったと木蘭は本書簡で述べているが、実際には訪れていない。『松しま道の記』には須賀川の桃祖、郡山の露秀、本宮の青龍、福島の呑溟の入集はみえるが、木蘭、可直、巨石は洩れている。三河国御馬湊(愛知県豊川市御津町)に隣江亭木蘭(文化七年十月没)という人がおり、追善集に『白蓮華』(文化七年布泉編)があるが、本稿P59にみえる箕浜舎木蘭とは別人のようである。

45 上村山之書簡関本巨石宛 越後十日町 上村与兵衛

弥御清安可被遊御座珍重候。当方無異能有申候。乍憚御安慮可被下候。先達而御向被下候すり物至来仕候二付此度奉備高覧候。御頼上以賑々敷奈大慶仕候。先頃御状差上申候。相届可申奉存候。時分取込罷有艸々申上候。不宜。

卯月五日 山之上

巨石様 几下

雨晴の鳥の羽軽し衣がへ

御笑可被下候。以上。

※山之上は越後国十日町の人。上村与兵衛。

46 支白書簡関本巨石宛 安芸広島之人

未得貴慮候得共新春之御慶賀重畳目出度申上納候。愈御安静可被遊御超歳珍重御義二奉存候。然ハ愚句如此二御坐候得共野境春興奉呈御笑覧候。御高評奉希候。猶又御風流承度奉待入候。恐惶謹言。

正月十日 支白

巨石様

春風や乾きあがりし沖の岩

藪入や親に恋せぬ髪かたち

御高評奉希候。

※支白は安芸国広島の人。

47 樗門書簡関本巨石宛 陸奥本宮

雛脛の炉にすり寄り寄り夜寒かな
雲飛や秋のおハリの浅間山
魚光る今やかなしき下築
馬捨のから脛寒しかれ野原
壁破れて午の嗅ふく霜夜哉
鳥躬んと蝦夷の立寄る落葉哉

中（『新撰俳諧年表』）。

40 石塚文樵書簡関本巨石宛

尾張名護屋 石塚喜平

諷兼題八亀坊百番かと覺申候。右なき跡の題を拾行、野拙案じ申候。大題二かない申候ハ、何れとも被成可被下候。迷い子に尋ね逢ふたる彼岸哉

右 文樵

※文樵は尾張国名古屋の人。石塚喜平。『新撰俳諧年表』によれば石原氏。送月堂と号す。也有の僕。宛名は記されていないが、『謡白番発句合』の句案が送付されているので巨石宛である。

41 李岱句稿

備後福山之人

題三井寺 備後福山 李岱

はや色に出る小艸や月の前月の照親のこゝろのおくまでも

四季

出代の家つとに与所言葉哉
山ひとツ見あげて旅の衣がへ
色々に昼は紛れて虫の声

さく時の気はそろハぬに落葉哉

※李岱は備後国福山の人。謡曲三井寺を題にして、「月」、「親心」の句を二句詠んでいるので、李岱が『謡白番発句合』に寄せた句稿であることがわかる。

42 鸞窓書簡関本巨石宛

出羽大沼山大行院

尚く奉納別而不出来無面目存候。重而百題各章御写可被下候。已上。未得芳信候得共呈片楮候。秋冷之時節弥御清安存候。先達而木兔以其談之噂二而多幸と致存候。当山静謐老愚無恙閑佳致候。然而何方へか御幸納思召立不才も其烈二奉賀二て百番之内盛人之配題相中二付一唱捧至致候。若御差合

候ハ、何分御引直御調達可被下候。夏之頃八道者便にも有之候得共不風雅二候。浮沈も無覚束及延引若八時節二後レ御差問と被成候哉と気毒被存則木兔坊一封も相談申候。御落手可被下候より御風流承可申候。可祝。

葉月廿五日

白萱 鸞窓

巨石文

良夜

荻萩や薄を分て月の影

全

今宵の晴光いかに見しと云越しける方へ

老の身の鏡を知りつけふの月 全

※鸞窓は出羽国大沼（現山形県西村山郡朝日町）の人。大行院の住職。明和七年八月十六日、名古屋の木兎坊風石が奥羽行脚した際、鸞窓を訪ねている。安永三年八月にも再度訪れ、鸞窓のとりなして坂田の梅士宅に寄つて象潟まで足を延ばしている（『東北北海道俳諧史の研究』井上隆明著 新興社）。

43 加藤度雄書簡関本巨石宛

土佐 加藤平内

毎々御書信辱奉存候。秋暑二行候處愈御安康可被成御坐奉恭祝候。然ハ両節之吟御見セ不相変不堪感吟候。十万辱奉存候。従是御無言失敬のミ相成申候。其段御海怨奉希候。当方春興乍遅々御歴もと懸御目候。御笑吟可被下候。尚期後鴻時候。恐惶謹言。

度雄 甫

七月十日

巨石様

重陽

けふの風菖蒲につゞく軒端哉

此頃のよし野はくらしかんこ鳥

名月や何に仰むく唇拾心

草稿之句々懸御目申候。御笑吟可被下候。

※度雄は土佐国の人。加藤平内。

※松童は但馬国生野の人。通称市橋久兵衛。松堂は『謡百番発句合』のうち、謡曲「竹生鳥」(冒頭は「竹に生まるゝ鶯の、竹に生まるゝ鶯の、竹生鳥詣急がん」)に因んだ句を担当した。京都の蝶夢に一度送った句が届いたかどうか不安なため直接巨石宛に本書簡を認めている。

35 聴雨書簡巨石宛 [備后田房之人]

御風流迄古声に因及御床義御座候。春興相催申候旨入貴覧候。御笑評可被下候。且短冊御染筆被下候様二と奉願候。早々可祝。

二月吉日

春風にゆるみし鏝の音色哉

巨石様 聴雨

※聴雨は備後国田房の人。

36 国馬句稿 [志摩]

紅の梅にやどれる春の月 国馬

※国馬は志摩の人。

37 羅雲書簡関本巨石宛 [陸奥本宮人]

当春三月出之御細翰七月中久保田弥五様を被相頼候由二て相達拜見。寒気之節大家弥御清福被成御座奉賀候。弊邑無事能在候間御安慮可被下候。去春中は御尋被下候處取込候節御淹留無程残魂不少候。御姥様とも御丈夫御遊歴其後御達者御安居とめでたく奉存候。近日風被得便急二而あまり御無音候。匆匆右御答希候程過候得共如是申上候。来春中は貴境之辺罷越懸御目申分可希候。若御使も御坐候ハ、不相交御文通被下度候。書余来陽目出度可申頼候。恐惶頓首。

後巴羅雲

霜月十六日

巨石様 貴酬

※羅雲は陸奥国本宮の人。

38 枕流舎 (大内秋夫) 書簡関本巨石宛

即興

椿咲平等院の小くらがり

白魚や海に育て此すがた

春雨や二人壳の小傘

可笑々々 枕流舎

関巨石様

※枕流(枕流亭)は、拙稿「関本如髮集成来翰集(第一卷)」(『人間科学』第38巻第2号 2021年3月)の「47大内秋夫書簡関本如髮宛」付箋によれば、陸奥国本宮の大内秋夫の別号である。秋夫は本宮本陣の大内藤左衛門。枕流亭、蝙蝠楼と号した。塩田冥々宅とは隣接しており、当時の俳諧番付にもよく名を連ねた。文政二年十月二十三日没。享年七十八歳。

39 菊地桃左書簡関本巨石・伊関徳次宛 [備中玉嶋 菊地源七郎]

新春之御慶目出度申納候。弥御清福可被成御重齢旨奉珍賀候。随而乍鹿吟萬祝一葉備御笑覧候。追而貴地御風流拜吟希候。猶期答言之時候。恐惶可祝。

正月吉日 桃左(花押)

巨石様

御名乗失念

伊関徳次様 几下

人曰

鶴も出て鶯を祝ふや芹薺

此空をとぶころへで啼蛙

名月やまはよふすいと山はなれ

近來申捨二候。重而御笑評俟望候。

※桃左は備中国玉島の人。菊地武豊。源七郎と称す。豆葉館と号す。文化年

往々信風木蘭聳
能牽仙客人蓬萊

右松島

山村落木古城辺

夕日凄然生野飼

聞道宗臣藩鎮地

只当片石事空傳

右多賀城碑

石ひとりふみとまりて枯野原

右 絶階

※絶階は陸奥国松川の人。川又屋次郎兵衛。『福島縣俳人事典』（矢部楯郎編 昭和三十年）には「絶階」で掲載され、「一書に絶階と書いたのがある。」と述べられている。

30 一掃句稿

郭公啼や淋しき森の月 一掃 印

※一掃は未詳。

31 浅倉雄上齋句稿 [越中高岡 浅倉権兵衛]

姥おば棄すてやなざけを袖に露の月 雄上齋 印

※雄上齋は越中国高岡の人。浅倉権兵衛。

32 鯉徳 [近江湖南]

爐開の先初ものぞはつむかし 鯉徳

※鯉徳は近江湖南の人。

33 醒上書簡関本巨石宛 [和丹郡山世臣]

去暮は上原氏帰郷之節御甚礼被下辱。如仰未御意候得共愈御清福奉敬賀候。

然ハ御志願之趣御座候而御編集之旨僕媿捨之題ニ而発句可仕承知此度おかしからず候得共入貴覧申候。扱画相調候様ニ御座候所、未更科一見可仕候故、相調兼申候。乍御新手其覚ニ而可然御調被下候様何分御頼申上候。秋中二三句為相調上申候。誠去年大和江行脚被成候よし当地へ通候所御同伴有之御逗留も無御座、残念千少奉存候。去暮御摺物御物好寄拝覧感心仕候。此度おかしからず候得共摺物入貴覧御醉笑可被下候。先々為御報如斯御座候。尚御風流折々承度事ニ御座候。不一。

五月五日 醒上

関巨石様

木間くのほりかぞゆる繩手哉

ほととぎす児のかりねの膝まくら

など御一笑可被下候。

※醒上は大和郡山の人。書簡内容から前年に巨石が大和に来訪していたことがわかる。醒上は巨石から「嫉捨」の題で発句を詠むことを依頼されている。これは『謡百番発句合』の担当であろう。

34 市橋松童書簡関本巨石宛 [但馬生野 通称市橋久兵衛]

二月晦日花輪此節京都書林に差下拜見忝奉存候。先以甚暑之節弥御清福可被成御坐珍重奉存候。先年被仰下候『百番御題』之内鶯野子受取申則俚自洛蝶夢丈夫御頼申置候得共、未相達不申哉。何之御沙汰も承不申此度又々相記入御覧もふし候。近来八少々訳有て俳事中絶いたし申候。併初夏之頃都連中打寄相催候一枚摺進上仕候。御笑覧可被下候。尚期重便之時候。不備。

六月十五日 松童

巨石様 貴報

題百番之内

竹生嶋

鶯の木啼やをのが竹生嶋

笹啼も打しり顔や——

26 翠樹書簡関本巨石宛

伊丹豊岡之人

先達而御風流承及一翰呈上仕候。先以秋暑之節御平福奉賀候。野生共洛東懸情^①蝶夢坊之世話二而未熟之風流罷過候。先般関東下向折節申捨候句々の中拾集候を又ぬき書して摺物申付候間、入高覧候。貴評被下度奉希申候。已後御文通も被下候ハ、忝存候。尚重便可申上候。草々頓首。

初秋八日

翠樹(花押)

巨石様 玉机下

此間申出候故かひつけ申候。御笑覧可被下候。

帷子の袂つめたし今朝の秋

どちらから星はワたるぞ天の河

玄関や秋の納も今宵より

①蝶夢・京都の人。五升庵。

※翠樹は伊丹国豊岡の人。翠樹が蝶夢に師事していたことが本書簡によりわかる。

27 素輪書簡巨石・可直宛

上野前橋之人

○御書翰末に御印被下候御句ども拝見。さて、御趣向おもしろく存候。折節之麓考ども御目掛御覧可被下候。何事も俳事取込早々申上候。以上。

喝祖坊 素輪

四月廿八日

巨石様

可直様

貧而魚詔富而無踏

さればとて、おくらの落や福寿艸

究律

とし暮たはやく月日と思ひけり

春興

うめが香やひやりと握る竹格子

下萌や上吹風はまだ寒き

わけ入りて戻るも深く山ざくら

盗んでもうしろ行気や桃のはな

見おろしつ見上ツめぐる柳かな

落て有るつばきに蝶のとまりけり

脛高し茶に有霧や松の上

去年の冬火の神のたよりに家つしなひて本華一輪

まつ焼て廣きがうへの雪や見ん

雪の日や見たひかた見てももしろき

※素輪は「八田屋氏、喝祖坊と号す、上毛人。」と『新撰俳諧年表』にあるが、本書簡では、「喝祖坊」と記されている。

28 的場左竹書簡関本巨石宛

伊勢宇治 的場東太輔

求幸便一筆致啓上候。完二当夏は於京都初而得御意奉大慶候。其後弥御平安二而御帰国被成候半と奉賀候。小子無難御安慮可被下候。然ば御参会之節ちよと得御意置候汪宮神法案之集弥さし出申候。藩其御地御好土方御歎賑々敷御加入奉待候。先ハ幸之能使故ちよと御様子等承度如此候。早々急便差上候。

九月廿八日 左竹(花押)

巨石様

すさまじや夜半の寝ざめに聞砧

ふね呼で良待どをし秋のくれ

御笑披

※左竹は伊勢国宇治の人。的場東太輔。夏に京都で巨石と会っていたことがわかる。

29 絶階七言絶句・発句稿

白雲片上自東来

鳥與悠然秋今関

候。御笑覽可被下候。右御いそぎ如此御座候。恐惶。

八月二日 青雨（花押）

巨石様

星夕

青梨子に其水うつせあまの川

老と若き声いぶかしく秋の蟬

茅屋庭前の興

淺茅生や溝に横たふ露白し

など申捨候。御笑覽可被下候。以上。

①『いしなとり集』・『いしなとり』（安永四年 春艸舎青雨編）のこと。

同書には「喰ふとる声には細し帰る」陸会津 巨石、「何聞た時に落て

やしかの角 陸会津 可直」が入集する。

※青雨は安芸広島の人。書簡中の「申春の春帖」とある申年は、「いしなとり」刊行翌年の安永五年であり、本書簡の執筆年代が特定される。

24 高藤珎明書簡関本巨石宛

下野今市人 高藤三郎右衛門

貴札拜見仕候。先以後は以書中も不得御意候得共弥御勇壮被成御座珍重奉存候。拙方無異罷在申候。乍憚御安慮可被下候。然ば此度御近所之^①保水子御尋被下恙奉存候。

一、摺物二三送下恙奉存候。毎度御風流甘心仕候。

一、謡之題二而発句御勸進承知仕候。乍愚案一句懸御目候。

題花月

廻り来し山は何くほとゞぎす

又当季之句

君が為一りん切りし牡丹哉

木曾川や若ばの中の埋れ水

何事も期後音早々申残候。恐惶頓首。

四月十八日

珎明

巨石雅丈 御報

①保水・会津の人。今市の珎明を訪ねていたことがわかる。

※差出人の珎明は下野国今市の人。高藤三郎右衛門。『謡百番発句合』編集時の書簡で、珎明が句を送っている。

25 麦羅書簡関本巨石宛

陸奥白石千手院 松窓乙二之父

尚く可直様御社中様方へも宜御承知可被下候。何卒近年又々此辺迄も御下り被成候様かとまち上候。当地おかしからぬ物多入貴覽候。御笑評可被下候。以上。

先日八御細管添奉存候。弥御壮健二被成御坐候段奉珎賀候。艸堂御向安罷在候。乍慮外御安喜可被下候。然バ御摺物類御恵投被下御俳繁殊更御名吟仕驚入申候。此方方八去年中心外之無沙汰申上居候。此段御高免可被下候。委曲申上度御事斗二候得共、此人様為待相認候故、艸々御礼のミ申上候。後音之節萬諸可得貴意候。且『百番謡発句合』御思之品有之拙子杯も御加山被下候故風雅之大慶此御事二奉存候。当月中能キ使り差上可申候間、御加入被下候ハ本懐之至二奉存候。以上。

三月朔日 麦羅

巨石様 貴下

春興

梅が香に闇をさかせる華衣哉

草臥て一度に休むかワづかな

夕がほのたねおろしけり桃の中

白しくうれし今年も山ざくら

など申捨候。御笑覽之上御加毫可被下候。

※差出人の麦羅は陸奥白石の人。千住院住職で松窓乙二の父である。「拙子杯も御加山被下」とあり、『謡百番発句合』に麦羅が加わっていたことがわかる。

尚く。今私五ツ時過方乍御咄御来駕待上候。以上

可直様 完車

巨石様 几下

※完車は江戸馬喰町の人。通称大坂屋市左衛門。深川湖十(四世 寛政元年五月二十七日没)は完車の別号を持つが別人か。

20 斗圭書簡巨石・可直宛 [築前春吉人]

尔来御疎遠奉存候。不珍不出来之寸牒進上御笑覽被下候。久敷玉句も承不申追々御安否承度旁御口御名無之後言。

三月廿一日 斗圭

巨石様

可直様

米を奪さらひ波を奪さらふや藤の花

行当憎むや花の青葉陰

右御尊評奉希候。

※斗圭は筑前国春吉の人。付箋には俳号を「計圭」と記している。

21 谷口田女句稿 [東都神田 谷口氏 楼川妻]

東のひゑをしろしめし給ふ

諸親王につらならせ給ふ

御祓の

おん君此御寺にまふでさせ

給ふの曰とて世の中つゝしもおもうして籠のものとけぶりをさへいとひりんでふものに炭して茶をあたゝめひとツ所に頭つどひ寄て物うちくひつゝ御道の程ハとあらむ。いらせ給ひてはかくやにらんとおそれ多きミつしる事などつばやきながら立春より七十五日おふよふたがハざるの時は過つれども名にあふ桜の御山なれば外やまの盛よりハと独ごちて此時や枝をならさぬ花の山 田女

※田女は東都神田の人。谷口楼川の妻。

22 築山桐雨書簡関本巨石宛 [蕉伊賀上野藩 蕉門十哲猿雖曾孫]

歳旦之御祝詞猶更申納様御安全被成御迎歳奉賀候。当境無為御春迎仕候処、去春貴書被下相達御佳作共拜吟先之通例之春興入貴覽候。猶期永日候。頓首。

正月廿日 桐雨

巨石様

ふるとしみのむし庵再興して砂まいて門もあたらしけさの春ありたけをとりひろげたる柳哉ぬれながら海をいでゝや朧月

冬吟

火へよれば寄るほど骨の寒哉隙あけし土にかはくや鳥の糞

重便御評奉頼候。

※差出人の桐雨は伊賀上野の富商。糞虫庵二世。蝶夢と親しく、明和五年蝶夢の勧めで『みかんの色』を刊行。明和八年夏には蝶夢と共に九州に遊んだ。天明二年六月三日没。句の前書に糞虫庵再興のことが述べられている。

23 青雨書簡関本巨石宛 [安芸廣島之人]

安永五年八月二日

猶く。去夏愚撰『いしなとり集』一冊京橋次様ニ送り進申候。相達候

哉。御風草尊書待候事ニ御ざ候。以上。

一翰致啓上候。未残暑之砌御地倍御安全被成御坐候旨奉賀候。野生無為罷有候。去ル申春帖遠方江掛御心ニ御贈惠被成下右高書遠路遅滞漸当八月ニ相届

キ申候處ニ野子儀も上巳之頃発足仕候而中国筋吟行。夫方伊勢参宮仕漸々端午之頃帰国仕候。欠回送拜見亦遅々彼たちて大延引尚本意に存候。不相変御

風流御楽候哉。珍重被成遠方誠ニ御床敷奉存候。近々幸使之節ハ御作御聞為

可被下候。玉吟之内別而早嶺の御作感吟仕候。野生途中吟摺もの編じ進申上

※順貞は未詳。順貞が寛政十年七月に帰也庵を結んだことを記念して草した句文。

17 伊東萬象句稿

陸奥本宮

一声も啞には鳴かじ夜の鹿

けさ見れバもミじかりけり下り築

はツ霜や萱津の藪に香のもの

しぐるゝや御廟に通夜の友もなし

夜の雪榻のはしきき埋むらん

右 萬象

※萬象は陸奥本宮の人。伊東太逸。医師。鐵崖と号して書を能くす。また、藤原諸葛と号して和歌を詠んだ。

18 諸九尼書簡関本巨石宛

花洛東山岡崎尼号湖白庵筑紫産

明和八年六月十六日

かへすく御風流御物ずきうけ給たさ御なつかしさいはんかたなく存ま
いらせ候。いまだ松鳶へも参り不申近日二打過可申と存居申候。帰り二
日光へさんけいいたし善光寺へ詣ですぐ二登り申はつ二御ざ候。此度御
たづね不申御事のミたのもしさ、やまくと存まいらせ候。何事もく
今の文二つくしがたく如之致し申し残しまいらせ候。にし二帰り申候
ハゞ京都より申上可申候。御序のセツ御風流御聞セ下され候べしと好み
まいらせ候。以上。

一筆申上まいらせ候。時分が暑さはげしくおはしまし御坐候。弥御障りな
ふ今成筆と松しま行とわたくし事も少々二弥生末より京都を打過申候て道す
がら方々見物いたし東都へもしばらくとつりう致し此ほど仙台へ出申候。此
度何とぞ御地へも参り御めにかゝり可申と京都よりもたのしみ二存出まいら
せ候所あつたのセツなかくの道中いかにくつかれまし。殊二御地までハ
山越二て道もあしきよし御計の通り老の身心にまかせ不申さてくたのもの

く奉存候。こゝもとへ浪花^①旧国子参りいたされ候てしばらくつかれをはら

しまいらせ候。御同人へ春の御文相とゞき申上候。御風流うけ給さてくお
もしろく感吟いたしまいらせ候。爰元までまいり候へば一入く御床しく御
著作どもかすくおはしまし候半ときかまほしやまく二て御座候。申上
度事八筆のちからにもかないがたくあらまし申残まいらせ候。めで度かしく。

水無月十六日

諸九

巨石様

閑呷鳥鳴や仏とさしむむかい

月影のちそつにしほむ蓮かな

雪の峯瀧津瀬と見る雨もがな

右御聞可被下候。

①旧国子参りいたされ候て、拙稿「関本如髮集成来翰集（第三卷 巨石宛）」

『人間科学』第39巻第2号 2022年3月の「1安井旧国書簡関本巨石宛」に旧国の仙台来訪中の書簡が確認される。

※差出人の諸九尼は筑後国唐島村の庄屋永松家に生まれ、同族の中原村庄屋に嫁いだが、三十歳の頃、湖白（のち浮風）と駆け落ちして大坂に出る。宝暦五年（一七五五）京に移住して千鳥庵を結ぶ。宝暦十二年、浮風没後に剃髮する。明和四年（一七六七）京岡崎に草庵を結び、明和八年陸奥松島に旅をする。天明元年（一七八一）九月十日没、六十八歳。本書簡は明和八年の陸奥行脚中の仙台から認められた書簡である。諸九は喜多方来訪を考えていたようだが、山越えが困難なため会いに行けないことを伝えている。

19 完車書簡巨石・可直宛

東都馬喰町通称大阪屋市左衛門

此間は不得咄事候。然ハ近日御幣賀之由手前も并野きく事取込罷在、緩々御答も不申甚御残多御坐候。且野子義も一両日中は甚故障ありて御尋も不申御無音罷過候。将今晚五ツ時過方在宿仕候間、御件段も無御座候ハゞ御来駕可被下候。別紙愚草入風徳候。御笑見可被下候。別按出来趣可申上候。草艸不備。

卯月末七日

14 四朋書簡関本巨石宛

遠州掛川 一文字屋八太輔

一簡啓上仕候。先以暖和相成候處弥御壯健被遊御坐候半奉賀候。此方小子無異儀罷在候。乍憚御安意被下度候。然先達而御懇情之花草奉拜見仕候。其節被仰下候委曲御承知仕候。今般御編集集思召有之よし御寄軒千万奉存候。殊更小子方迄御題被遣奉存候。今日野句差上申候。甚角宜御添削被成候而御加入被下度候。且当地連中短冊是又差上申候。あまり数多御坐候二付御集へ御加入は却而痛入候間御用捨奉希上候。

先以右御礼御答旁如斯御坐候。乱筆偏に御容赦御雅見被下度候。猶期重使之時候。頓首。

卯月三日 四朋

巨石雅丈

※四朋は遠江国掛川の人。一文字屋八太輔。『謡百番発句合』の遠江国連中を四朋がとりまとめたことが本書簡によってわかる。

15 芋月書簡関本巨石宛

東都深川之住

兼而及承候付行迎と奉存候所御懇書奉拜見仕候。先以愈御清安被成御坐候由奉賀候。野子春中る此辺二罷在候。御安慮可被下候。

一、御摺もの至、何れも感吟仕御事二御坐候。

一、謡もの二寄之御趣向思召立之段御越方二承知仕候。されども野子明春ならで帰庵不仕候。其セツ申聞候行迎も文通二其段可申遣候。二総之義格別之者不承候。相考二而遣不申候。左様思召下候。

雨季之分先この辺之分懸御目申候。御加入可被下候。江都向其外追々千万懸御目候。

一、此方にて連中之望二付一集急二催し申候。幸之所へ之御句之被下候様にもよろしく加入大悦仕候。其段可直様へも御申伝可被下候。五蓬などひたと御つはさ被申出候。

一、二月之御文通二被仰下野なす行之義先頃相とゞき御答延引仕候。桃路子御同道にて御地申上かねて心懸申候。何方も追々二可得芳意候。頓首。

九月廿八日 う月

巨石雅伯

重陽

めかれすな九日の後の菊の花
右申捨候。

※芋月は東都深川の人。『謡百番発句合』の企画を芋月が承知している。

16 順貞「帰也庵の記」

寛政十年七月 帰也庵の記

年浪は流れやすく隙の駒の蹄はやくして八とせ余りの昔は武蔵野へ月に招かれ浮雲の定かたなきの旅者よりかたわれ船の彼岸ともしらぬひの今日や翌日やと心をも筑紫かたより流石おもひの石にもなれよ草にもなれよと松浦小夜姫の秋の夜の長崎なる濱に漂よひしが品々のかわりたる種々こそ唐菜の種面白風雅の道にも寿こそ目出たれと徐福が仙方の恋しくなりたるもおかしさ八迷故三界城悟後十方空と細脛に枯枝西行の富士見笠も着馴てこそ八行路難山にあらず川にあらず人情反覆にありと馬にのり駕籠にのりても①「朝よさを誰松島ぞかたごころ」にかへりて後の月詠め侍りしより春ははや象潟の花の上漕海士の釣船となげきたる月がはふけたり。いでや臍の緒に啼年の暮には古郷の事もへ出てけふや帰らん翌日や帰らんと等閑なる中にも後生しりたるかたへの誘引よりこころやすさを思ひ出して帰りけるに生なせるおはん父は霜置ける首には二月の梅雪ともちりみどりなる松の髭ハ落ばかく齒齧となりたまへバ不孝の罪こそ恐るべけれ。野となり瀬と代る習なれば老生不常の袂には涙をしぼる愛こそ多し。あハれ人の生涯ハ大河の一粟蜉蝣の一時にも道あり、教ありて黄鳥も丘隅にとゞまるといづれば人の多きを月の村雲と見なして秋月の中の頃月まつ宵といふ今宵庵を結ぶふみしかり。

居らばや薄のあるじ秋の主

右 順貞(花押)

①朝よさを・芭蕉が『奥の細道』出立以前に詠んだ松島の句。

不申上能節二御出野生も居都合宜御楽二悦申候。愚老儀も既近日鹿嶋之方へ
としのび御両子も不得御意候ハゞいかに残念二可有御坐候を扱大慶奉存候。
扱々春興御見セ被下泰直二翁へも見セ申候処殊外正風佳也と御誉被申、別而
「寺の琴」よき趣向と被申候間左様思召可被下候。扱句も無之候、当歳巨歳
暮を承て、

雲水境界の一往に此吟あり。二季分明ならざるハ君子の心にまかすべし
節と笠行年とくれ春と明け

御一笑く

山独活の價見へたり春の雨

雉子一声旭のワたる野つら哉

初夏

かたのものおろす心や衣がへ

漢句

喰^レ蚤^ニ聞^ク時鳥

風石

寝る間も夢の窓に有明

也有

右ハ今日哥仙取かゞり申候。何事も心餘て申し留候。以上。

卯月五日

風石

巨石様

尚く。②可直女子へもよろしく頼上候。以上。

①也有殿御逢之儀・本稿「一横井也有句稿」によれば、巨石は夏に尾張の也
有を訪ねている。

②可直・会津の人。家城而後の妻。巨石のおば。

※風石は尾張国名古屋藩士。木兎坊と号す。也有門人。明和八年と安永三、
四年の二度、奥羽を行脚して、『二度の笠』（安永四年）を刊行した。天明五
年没、六十三歳。『二度の笠』には安永三年秋に喜多方に來訪（水戸、額田、
須賀川、会津柳津経由）來訪し、巨石、如髮父子らと交流したことが以下の
ようにある。

又、里鶴（村松の人。村松は現喜多方市松山町村松）子同道にて、

会津小田附巨石子を訪ふ。国へ行脚せし人にて外ならず。

我も一夜宿かる里の今宵哉

木兎

願ひの糸を結ぶ笠の緒

巨石

野々宮の注連ははづれて鳴子哉

巨石

跡からも散るほど咲ぬ萩の花

如髮

朝霧や玉の兔と濡て出る

洗石

巨石子よりすゞめ有りて、塩川（喜多方市塩川町）なる三石を訪ふ

朝がほの垣にも残る暑さかな

木兎

低ければ軒端にのこるあつさかな

三石

さび鮎も錦のはしや龍田川

全

ことし限く〜とておどり哉

帰蝶

篝目のとゞかぬ隅やきりくす

些云

表家にも朝環はさせぬ鶉哉

素寧

草刈し跡とは見へぬ花野哉

芦遊

13 横田柳几書簡家城而后・関本巨石宛 號布袋庵武州鴻巣横田三九郎

尚く。旧冬手頃椀賣便二從発句合候跡消遣申候。相上申候哉。承度奉
存候。其前にも江都堀留に巨石子へ帰郷之賀句遣候。いかゞ。

青陽の御慶申納候。弥御清福御嘉寿奉珍重候。小子無為加齡仕候。依而二節
僅吟入貴覽候。貴境御物好奉待候。此節諸国文通取込早々尚当永日可得貴慮
候。可祝。

而后様

正月十日 巨石様 柳几

※差出人の柳几は武蔵国鴻巣の人。横田三九郎。布袋庵と号す。而后は会津
若松の人で家城氏。妻は可直。

鐘つきの我におどろく霜夜かな

右 秋色

巨石様 几下

霜月廿日

尚々。如髪様へも御連中様へもよろしくながひ申候。かしこ。

①『しをり集』、秋色の編著であることは書簡内容から確実だが伝本は未見。

②夜興曳・夜興引(よこうひき)のこと。冬の夜間、山中で獵をすること。

※深川秋色は其角門人として著名な秋色の二世。明和末年から安永七年頃に野菊庵秋色と名乗った。はじめ蓼太門、のち三世湖十門。湖十の養女となつて深川姓を称し、其角の点印を一世秋色を経て三世湖十に伝えた。編著に『花実集』、『魚と水』。天明四年(一七八四)五月二十日没、五十八歳。本書簡

が二世秋色のものであることは、本資料付箋に「野菊庵」とあり、巨石と同時代人であることから推定した。二世秋色が「いわしや清兵衛の妻」であったことが本資料付箋によりわかる。書簡には、六月下旬に日町新道石丁つき堂地内の別庵に転居し、兼雅から芭蕉像を譲り受けたことが述べられている。「例のごとく御両節の三章春帖へめでたくはへ申度御坐候。」とあり、巨石は二世秋色の春興に投句していた。

10 蝶酔書簡巨石・可直宛

筑前福岡

未得尊意候得ども啓上仕候。然ば花落^①蝶夢師より御状遣候二付当所風交発句取集外二諷野草発句掛御目候。集之思召在之由、御執心之御事羨敷被存候。其後如之御書通被成可申上候。

一、筑前発句御ならへ被成候。当せうとは秋水と申名ヲ先二御出し可被成候。

其外八御水二てもくるしからず。余り急便ゆへ籠筆申上候。尚待後首候。恐惶謹言。

筑前福岡 蝶酔(花押)

九月廿六日

巨石様

可直様

袖手ハたゞ見て居た人も踊哉

荻吹や此淋しさハ男らし

など仕候。御文通之印二掛御目申候。御句承度候。已上。

①蝶夢・京都の僧。明和五年洛東岡崎に五升庵を結び、以後約三十年間、蕉風復興に尽力する。寛政七年十二月二十四日、六十四歳。『謡百番発句合』

(巨石編 原本未見) 編纂に蝶夢の斡旋、助力があったことがわかる。

※蝶酔は筑前福岡の人。巨石が出版を企画していた『謡百番発句合』に収録する筑前の人々の作品を蝶酔がとりまとめている。蝶酔は掲載発句の筑前国筆頭には秋水を据えて欲しいと依頼している。

11 田川木蘭書簡関本巨石宛

号箕溪舎田川氏

田川箕溪(書簡裏)

改曆之御吉兆無類申納候。弥御家内様御安静可被成御迎春目出度候。扱去夏中は緩くと御誹談被下忝存候。羽州行脚無滞経過此度当駅二而致越年候。近頃亦々常陸之方へ御曳杖候。好使も御さ候は希頂戴御文通可仕候。急便草々不一。

箕溪舎 木蘭

正月廿一日

巨石様 几下

尚く。如髪、里貴登師御□子へ宜御頼申候。乍筆末御家内皆様へよろしく頼上候。以上。

※木蘭は田川氏。箕溪舎と号す。陸奥白河の人か。書簡内容によれば前年夏に巨石と交流した木蘭は、出羽、常陸を旅していたようである。

12 風石書簡関本巨石宛

号木免坊尾陽名護屋人

若嵐の両子御登とて得御意そなたの御様子も久々承之、西川の書状も相達候由只命こそ目出たれと對話の心地悦入申候。扱御両子^①也有殿御逢之儀ハ

寛政十年頃失明する。文化元年（一八〇四）一月十八日没、六十七歳。

5 碓井也蓼書簡関本巨石宛 陸奥岩沼之人 天明四年以前

未得芳慮候處御安康可被遊御座候旨奉珍重候。然二芦中文方より野句遣様申参申捨呈座右候。猶追々可得尊慮早々布字。

二月十八日 也蓼 寄

巨石雅丈

※也蓼は伊賀上野の出身。服部土芳の後裔と伝わる。陸奥国柴田郡船岡（現宮城県柴田郡柴田町）の大光寺十一世住職となる。安永末、仙台の宗禅寺に移った。碓井坊と号す。諸九尼や白雄を厚遇した。白雄の参禅の師と言われる。天明四年十二月二十五日、宗禅寺で没する。

6 高桑闌吏句稿 洛東山芭蕉堂之祖 加州金澤之人

山吹や花ふくみゆく魚もあり

闌吏

※闌吏は加賀国金沢の人。希因門。高桑氏。半化坊、二夜庵等の別号がある。明和五年（一七六九）頃、金沢浅野川のほとりに二夜庵を結ぶ。また、明和七年、江戸に赴き二夜庵を結んだ。天明初年頃に上京し、洛東双林寺中に南無庵を結び、芭蕉像を安置して芭蕉堂と称した。天明六年（一七八六）以降、『花供養』を刊行して芭蕉追悼法会を毎年行った。寛政五年（一七九三）花の本宗匠の称号を許される。寛政十年（一七九八）五月三日没、七十三歳。

7 五城坊句稿 陸奥仙台人

蝶ひとツねばるも抜す草の莖

五城

に八なくてたゞ五月雨の音ばかり

全

舞や蚊の落八まだ散りたらず

全

初雪や松へも情を置とめず

全

何も追々可申上候。

※五城は陸奥国仙台の人。

8 三浦樽良句稿 勢州山田之人住于花浴

火とぼしてかなしと見する蛭かな 樽良

※樽良は志摩国鳥羽の生まれ。鳥羽藩士であったが父が致仕したため寛保二年（一七四二）頃、伊勢国山田岡本町に移住した。安永九年（一七八〇）十一月十六日没、五十二歳。

9 秋色書簡関本巨石宛 號野菊庵東都いわしや清兵衛妻 天明四年以前

追日①「しをり集」の御句ありしだい申遣可被下候。以上。

久々御左右不承寒の節其御ほど揃愈御隙なく御風流御たのしみ被成候半とめで度賀しまいらせ候。且ごとしは御出府もあらむやと待居候所御さたなし。いかゞ御なつかしく申くらし候。且もはや年の尾もちかより申候。例のごとく御両節の三章春帖へめでたくはへ申度御坐候。御出来被成候ハゞ早々御こし被下候やとかならず奉待候。ワたくし事も過しみな月別庵致候。尤本宅日町新道石丁鐘つき堂地内にて市中にはいさゝかことふりたる閑居也。其時の句、

鐘もあり井もあり夏をワすれ庵

水無月下旬にうつり申候。君が出府被成候ハゞ此度ハ愚庵へ向て直に御出かならず所せくとも御宿申べし。且兼雅子翁の像一刀三章御でうごく被成候よしをワたくし方へ御ゆづり被下候。扱も有がたく直に新室之本尊にいたし奉悦候。猶また君よりもくはしく御礼ねがひ候てつきて「しをり集」の内へ出し申候。十月の季にて右の翁の像をくりうけける御賀章被成可被下候。尤すりものも致候間はやくねがひ申候。且をりくくの御くさぐさ聞まほしく存まいらせ候。此ほど申捨候野章御めにかへ申候。

冬

ほのあかき山を時雨の晴間かな

夢野から明てわびしや②夜興曳

瀧音の絶て梢の氷柱かな

はしり井の湯気にしらむや冬至梅

年、家督知行千石（海西郡藤ヶ瀬村）を継ぐ。宝暦四年（一七五四）、五十三歳で隠居し、前津の庵で余生を送り、諸国の来客を迎える大御所的存在となった。天明三年（一七八三）六月十六日没、八十二歳。『鶉衣』の著者として名高い。本句稿により、巨石が夏に尾張の也有を訪ねたことが確認される。

2 大島蓼太書簡関本巨石宛

〔號雪中庵 住于東都〕 天明七年以前

遠境御手札被下辱致拜見候。先以御清福二被成御座候由、珍重御儀奉存候。随而野坊無異二罷在候。乍慮外御安慮可被下候。誠去夏中は初而掛御目緩々得御意候。道中無恙御帰宅被成珍重御儀座候。然ば此便之御巻書冊被遣就致引墨掛御目申候。且御発句ども御見せ面白承申候。猶此已後追々御文通可申上候。恐々謹言。

三月十三日 雪中庵 蓼太

関本巨石様 □□御中

二白。魚役山幸へ御伝言被下候旨申聞候處、又々宜申上候様申候。折節取込早々及御報候。已上。

※差出人の蓼太は信州上伊奈郡飯島町大島の出身。早くから江戸に出て雪中庵二世桜井吏登に入門し、三十三歳で雪中庵を継承する。武士階級を中心に二千人余りの門人を擁した。天明七年（一七八七）九月七日没、七十歳。『俳諧付合小鏡』（安永四年 蓼太著 牛家編）には、「小春までこらえかねてや遅桜 会津 巨石」が入集する。巨石が江戸の蓼太宅に訪問して初対面したことが本書簡によってわかる。

3 岩間乙二書簡関本巨石宛

〔號松窓 奥州白石千手院法印〕 文化二年以前

弥御揃御清福被成御坐候哉。承度壯堅御坐候。老少無恙消烏免候。然ば当旦那風雅被好候所近侍衆春詠相催候間、一葉呈机上候。将越后社中之摺物も懸御目候。猶期再毫候。

暮春 乙二

巨石様

登る日の海見て啼や峰の雉子
おぼろ月人も通らず長つゝみ

花下飲

花の香もありけり酒のうつつはもの

御寺にて

春の日を暮おしむかも鳥の聲

右 乙二

※乙二は岩間氏。白石千手院住職であった。化政期の東北を代表する俳人。文政六年七月九日没。六十九歳。

4 井上重厚書簡関本巨石宛

〔洛陽嵯峨后粟津義仲寺住于芭蕉堂〕

寛政七年以前

尚く

新年目出度申納候。先々御壯堅可被成御越年は又珍重奉存候。毎々^①蝶夢御嚙承此節御風流如何。随而春興懸御目申候。取紛不能詳尚期後便候。恐々。

正月十五日 重厚

巨石様

枇杷の花ひそかに咲てものくし

曲ものも松の嗅や木のめ濱

①蝶夢・京都の僧。明和五年洛東岡崎に五升庵を結び、以後約三十年間、蕉風復興に尽力する。寛政七年十二月二十四日、六十四歳。京都の蝶夢、重厚と会津の巨石の交流が確認される。

※重厚は京都の人。井上氏。梶井門跡出仕の家司だったが明和頃に梶井家を辞して剃髪した。明和七年（一七七〇）、北嵯峨小倉山山本村の弘源寺跡に落柿舎を再興した。安永三年（一七七四）、『落柿舎日記』編。その後『江戸みやげ』（江戸）、『みちのくぶり』（陸奥）、『うら不二』（甲斐）を刊行している。天明六年（一七八六）閏十月、江戸に移住して成美らと交流する。寛政四年（一七九二）四月、蝶夢の勧めにより義仲寺住職、無名庵八世となる。

関本如髮集成来翰集（第四巻 巨石宛）

二村 博（常磐大学人間科学部）

Survey Collection of Letters Addressed to Sekimoto johatsu

Hiroshi NIMURA (*Faculty of Human Sciences, Tokiwa University*)

Abstract

This paper investigates a number of letters addressed to Sekimoto kyoseki, a haiku writer in the Edo period. Sekimoto kyoseki is a haiku writer who was active in Kitakata town in the Aizu region of modern day of friends and acquaintances was very wide. This can be seen by examining the letters sent to him from different regions, including Iwate, Miyagi, Yamagata, Fukushima, Ibaraki, Niigata, Tokyo, Kanagawa, Nagano, Aichi, Shizuoka, Shiga, Mie, Osaka, Kyoto, and Hyogo. The current paper is a survey of the second volume of four volumes of materials collected by the Sekimono family. It covers the content of thirty-nine letters addressed directly to Sekimoto johatsu, six letters addressed to someone other than Sekimoto kyoseki, and thirteen other haiku manuscripts.

Furthermore, this survey examines the signature book carried by Sekimoto that contains the haiku of many haiku writers. By investigating these materials, the actual state of interaction between haiku writers in the late Edo period will be clarified.

はじめに

本稿は会津喜多方の俳人関本巨石・如髮父子宛の書簡を卷子本に集成した資料の第四巻（書簡、句稿点「名家消息」第四巻 大坂公立大学図書館蔵）を翻刻、注解して考察を加えるものである。第四巻における書簡の宛名は、三巻同様如髮の父巨石宛のものが中心である。巨石は喜多方小田付村の人で、本名関本直為。通称與次兵衛。文化二年（一八〇五）六月没、七十歳。七回忌追善集に「信夫山」（文化七年 如髮編）がある。巨石・如髮宛の書簡は、全四巻の卷子本に収録されており、本稿により全文の解説が完結する。交通の不便な近世陸奥会津の地において、関本巨石・如髮父子と日本全国の俳人との交流実態を明らかにし、書簡群全体の集成がどのようになされてきたのかを考察する。

一、如髮集成来翰集（四 巨石宛）

凡例

- 一、書簡・句稿には便宜的にアラビア数字の通し番号を付した。
- 一、各資料には差出人の住所・雅号等を記した付箋が冒頭にある。この付箋の記述は□で囲って翻刻した。
- 一、注釈は該当する語の右肩に丸付数字を付して資料末尾に施し、差出人、書簡内容の解説は末尾に※を付して執筆した。
- 一、翻刻の文字はなるべく原文通りとしたが、濁音、半濁音、書名等の括弧を付し、ゴシック体で表記した。

1 横井也有句稿 號羅葉山人尾陽藩 横井孫右衛門 天明三年前

会津の巨石子に訪れて

石垣のよるほど高し麦の花

今有しを謝して

さがさるゝ昼の螢や麦の花

也有

※也有は尾張藩の重臣。尾張六代藩主継友の御近習詰を勤めた後、享保十二

執筆者一覧 (掲載順)

二 村 博	人 間 科 学 部	准 教 授
樫 村 正 美	人 間 科 学 部	准 教 授
長 谷 川 幸 一	人 間 科 学 部	教 授
石 川 勝 博	人 間 科 学 部	教 授

編 集 委 員

矢口 明子 中里 南子 眞部多眞記

常磐大学人間科学部紀要 人 間 科 学 第 40 卷 第 1 号

2022 年 9 月 30 日 発行
非売品

編集兼発行人 常磐大学人間科学部 〒310-8585 水戸市見和1丁目430-1
代表者 水 嶋 陽 子 電話 029-232-2511 (代)

印刷・製本 山三印刷株式会社

HUMAN SCIENCES

(Faculty of Human Sciences, Tokiwa University)

Vol. 40, No. 1

September 2022

CONTENTS

Articles

Survey Collection of Letters Addressed to Sekimoto johatsu

..... H. Nimura 64 (一)

Exploratory research for the adaptive dimension of ‘emotional neglect’

..... M. Kashimura 1

Introduction to the History of Human Sciences (1)

— Humanities · Science of Man · Anthropologie · Anthropology · Human Sciences :
Transformation of Learning about Humans —

..... K. Hasegawa 11

Research Note

A Review of Research on “Fake News” and Media Literacy Education

..... M. Ishikawa 31